

創刊大正十三年 通卷八三六号
（昭和九年一月一日発行）

川柳塔



日川協加盟

No. 836

同人特集・私の一句

一月号

第3回 鳥取県民文化祭参加

第20回 鳥取県川柳大会

と き 平成9年3月30日(日) 午前10時開場
ところ 米子市文化ホール(米子駅前左向かい側)

(入場券) 全一四二五 米子空港からバス25分)

お 話 文学博士 平 宗 星氏
兼題と選者

「冠」 橘 高 薫 風 選

「通る」 小松原 爽 介 選

「動く」 森 中 恵 美 子 選

「雲」 濱 野 奇 童 選

「北」 土 居 哲 秋 選

「宇宙」 小 島 蘭 幸 選

「浅い」 但 見 石 花 菜 選

「傾く」 原 章 峰 選

出句締切 午前11時半厳守(各題2句・席題なし)
参加費 出 席 者 2000円(昼食・発表誌呈)

欠席投句者 1000円(発表誌呈)

前夜祭 3月10日までに〒689-35 米子市吉岡34 角田千秋へ

宿泊 3月29日(土) 午後6時半
ホテルハーベストイン米子 会費5000円

連絡先 ◎前夜祭・宿泊申込み締切 2月28日
〒683 米子市花園町53 林 荒介 (入場券) 全一四二五

主催 鳥取県川柳作家協会・県民文化祭実行委員会
後援 鳥取県・米子市・新日本海新聞社ほか

定本 西尾 栞句集

橘高薫風・東野大八序文

B6判・248頁・布装上製本

頒価 3000円(〒340円)

柳歴六十五年 西尾 栞川柳の決定版

一步出ずれば吾れ旅人となる心

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

人恋し人煩わし波の音

牛の瞳に人間何をあわてとる

頭ほど光らぬ父でありにけり

張り替えた障子の中に母います

最後の最後の味方は妻なりき

てつちりや路郎門下の生き残り

◎お申込みは川柳塔社事務所へ

発行所 川 柳 塔 社

〒6 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

電話 〇六・六二九・六九一四番

ご挨拶

橘高 薫風

明けましておめでとございます。

今年は川柳塔社には一つ大きな目標があります。

それは、麻生路郎先生の三十三回忌、葭乃先生の十七回忌、中島生々庵先生の十三回忌（一年繰り上げ）、西尾菜先生の新三回忌を迎え、四先生の法要を修し、川柳大会を開催することです。

路郎先生は六大家の一人として、他の三先生も全国的規模での川柳功労者であります。川柳塔のみならず、柳界挙げてのご支援を得て、大会を盛大に、また心

に残るものと致したく存しています。

六月二十八日（土）、たかつガーデン（大阪市天王寺区）でお会いしましょう。

今年は、この大会の開催とともに地方との交流を一層深めるため、各地指導者の本社運営への参画の体制造りを積極的に進めたく思っています。手はじめに、地方からの本社句会への投句復活も決めました。活気ある地方の力で本社を盛り上げて頂きたい。

本社は、若い世代の自覚と行動力を促進しながら来世紀の川柳塔社のビジョンを確立するよう努める所存です。

昨秋、主幹の私に力添えを頂く理事長に小出智子さんが就任、昨今の川柳界の趨勢に即応した新しい体制で出発しましたが、智子さんは直後に体調をくずし、

入院手術をされました。発送部長の山下美津留氏も入院加療中です。両氏の速やかな快癒と一日も早い復帰を祈るばかりです。

旧臘七日の朝日新聞「天声人語」に、「塔は権力、ドームは民主主義をかたどる。そんな解釈があるそつだ。塔は眺めるだけ、ドームは多くの人を受け入れるからだという。原爆ドームをぜひ、民主主義の象徴にしたい。」

とありました。そのとき私は、麻生路郎先生の高邁なる遺志の力を体しながら、祈りの川柳塔、多くの人を受け入れる川柳塔であるべきだと実感したのです。

皆様のご多幸と、川柳塔社に実りある年でありますように祈りながら、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。



座右の句

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

(路郎)

私の句

朱蠟燭 一人悲しむ初参式

西村哲夫

川柳塔 一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 ご挨拶

牛鍋だんぎ

橘高薫風 (1)

川柳塔 (同人吟)

東野大八 (2)

自選集

橘高薫風選 (4)

大空のこころ (72)

橘高薫風 (48)

私の一句 (同人特集)

東野大八 (64)

川柳の群像 斎藤松窓

清博美 (66)

古川柳歳時記「元日」

高杉鬼遊選 (70)

水煙抄

川島諷云児 (68)

秀句鑑賞

「同人吟」
水煙抄

森井菁居 (97)

牛鍋だんぎ

東野大八



あけましておめでとつございます。

今年のエトは牛だそうでこのギュー公にちなんで、モー君の話でもいたしましよつ。

近頃の農村では、コンバインや耕運機一色で、筆者の住む美濃の田舎でも一頭の牛も見かけなくなつた。世はかくの如くパーベキュー時代とあつて、東京のどまん中では、子供たちに牛見物をさせる世の中となつた。こんな世間なのでアタマ、いや腰にきたのかイギリスでは腰抜けの奇病、狂牛病? が流行して大騒ぎになっているのはご存知のとおり。

半世紀以上も前、四国から美濃の片田舎にきた折は、うちの畑の端に丸太作りの、牛掛けセットがあつたことだが、その折、近所のお百姓さんに「一石六斗二升八合」の牛言葉をきいた。つまりこのイミは「黒陸頭耳小齒達」を覚えやすくしたあて字であつた。

日本の黒牛は毛並が漆黒で、頭は広くて平たくて、歯は上下が食い合わぬのがよい。と、ということの語呂合せて、これが良い牛。

渺湖抄

茴香の花

「 碗 」

一路集「祝 う」

「まぶしい」

初歩教室「朝」

十二月本社句会

各地柳壇（佳句地十選／小島蘭幸）

■各地句会だより とつとり川柳会

柳界展望

川崎秋女さんを偲ぶ

一月各地句会案内

■編集後記

八木千代選 … (94)

西出楓楽選 … (98)

松本ただし選 … (100)

清水絹子選 … (100)

舟木与根一選 … (101)

吐田公一 … (102)

…… (104)

…… (108)

武田帆雀 … (119)

…… (120)

野中御前 … (122)

…… (151)

…… (152)

座右の句

雪月花 日本の味は足るを知り

私の句

臥竜梅老骨の意地花に見せ

（薫風）

岩切康子

「牛は角を見て買え」「牛の身分は鼻でわかる」「牛の尾は長きがよし」という博労仲間のきまり文句まできかされた。うちの家付婆さんはよく他人の女房を「牛の糞」とケナしているのでワケをきいたら「牛糞は一見硬そうでも中味は柔らかい。性悪女のカゲ口に『牛の糞女には油断すな』がある」そうな。

その大婆さんの話だと、むかしの「牛鍋」と「すき焼鍋」は、同名異質だという。牛鍋は牛肉屋が座敷を設けて牛鍋を供したのを行い、明治二年江戸入りしたドイツ人がこの牛肉屋の元祖だそう。すき焼鍋は、中がへこんだのに脂のヘットをしき、ネギやコンニャクやトウフを入れてこつた煮るをいうのでやり方が上方と江戸では大いに異なるという。

まあ、こんなむかし話も今時のものでないので、諸橋轍次先生の漢和物語を拝借しよう。『大漢和辞典』でみると、牛の部に属する文字は三百十一ある。その中で一番画数の多いのは牛扁にユウレイの靈の字のついた24画でこれが牛の中で一番エライ牛。要するに動物すべてメスとオスまで牛扁がついてるのでもおわかりでしょう。中国の大昔、人と人が盟約を交わす場合は、牛の耳を切りとり、盟主が耳を取ったときめか「牛耳る」という言葉が出たそう。センサクすると牛ほど面白いものはありません。今年もよろしくね。黒牛のいつか真つ赤な視野となる 大八



橘 高 薫 風 選

富山市 舟 渡 杏 花

余生とや風姿花伝を読み返す

はらぎようにてい はらぎようにていが仏間から

何気ない風に味があつたとは

愚かな奴で片付けられる命乞い

結婚より離婚に使うエネルギー

思う壺にはまってみせるラクでなし

米子市 政 岡 日 枝 子

花に埋れ花に囲まれ寝ておわす

白鳥の飛翔のような訣れなり

闇の向こうの何かに誘われて逝つた

人間の羽化を促すように鉦

想い出の隅にあなたとの居場所

戻っておいでいつもの珈琲を呑もう

堺市 桑 原 道 夫

湖に霧 貴婦人に扇かな

鉄橋にさしかかりたるイヤリング

種を蒔く我が背の形思いつつ

少しめでたくて美々卯のうどんすき

オムレツを食べてふわふわしてきたり

電線や冬をぼろんと奏でんか

和歌山市 西 山 幸

新しい年のジグソーパズル買う

短日をせかせか動く鳩時計

広告の量ほど明日があるのなら

見てはいけない菊人形の大欠伸

わが影を一人の部屋で確かめる

夢の続きの変換キーはすぐ消える

大阪市 榎本落児

顔欠けた仏像なれど美男なり
紅唇がいやに目を引く仏の画
観世音御手に接吻許されよ
お地藏さんの赤い帽子が時雨てる
銅鐸に神の指紋がついている
臨死体験 神のジョークを聞かされた

富山市 酒井輝

増えた苦が別の苦勞を軽くする
何もせぬ事も悪事に数えられ
夢捨てたたびに人間らしくなる
赤子にも理屈たくみに泣き分ける
ウッソーと叫ぶ娘のいい笑顔
道問えば町の子どもに通げられる

西宮市 奥田みつ子

年賀状三回 新世紀間近
欲張らずあるがままにと初日記
机拭き広辞苑にもおめでと
野の花を活けて安らぐ備前焼
菊の香に洩れそうになるひそかごと
静かな暮らしに早口のテレビ

和歌山市 川上大輪

索引で会う懐かしい人ばかり

過去捨てた覚えはないが忘れてる
保護色にいつでもなれる酒がある
子の未来マークシートを塗り潰す
俺にだって明日はあるぞ髭を剃る
前略と書きたくなった芒の穂

和歌山市 川上富湖

闇の深さ女測りに行つたまま
盛りすぎて皿の白さに気付かない
仕送りの間は揺るがない絆
形状記憶 拗ねてた妻がすぐ戻る
幸せの保証はしない貸衣裳
切り取ればどこも絵になる里の秋

米子市 中井ゆき

ハタハタが岬の店でゆれている
人の温み冬が来るから大切に
いたわって花を咲かせる芸がある
陽の目みた若い埴輪の目鼻立ち
ニューフアッション歩いて来るが顔がない
後半生 忘れた振りで生きようか

弘前市 浅田隆樹

アルバムにひっそり過去の優しさよ
どんぐりが痛いといって落ちた秋
控えよと言われて旨い一人酌

コスモスの意志の強さよ秋が行く
山登るさんげひとつの汗が落ち
ふる里の屋台の出ない菊まつり

唐津市 山口 高明

宮城のお空へ飛ばぬ鶴

レンコンの穴は幾つと聞かれても

竹馬に乗るさえ母の許し請い

疑いの眼に神の水只の水

氣にくわぬ奴でも会えば今晚は

捕まった香典泥も喪章つけ

八尾市 高杉 千歩

三年連用 初日記恙なく

六畳で膝つき合わし祝い膳

百点をほんまにしてる子煩悩

兄上の寿命頂き古稀を越す

生母に似てくる亡母のショール抱く

大正は重い荷物を持たされる

竹原市 森井 菁居

山門を出て騒音を懐かしむ

鷺の湯に來た甲斐があり鷺に逢う

少しだけ神をおそれて恙無し

思ひ出を断ちに次なる旅に出る

植物園ギャルは一人も來て居らぬ

日記帳いわく継続は力なり

弘前市 小寺 花峯
生きている証か愚痴が湧いてくる

仮面剥ぐ男がかけている仮面

妻の啖呵聞いた銚子は倒れがち

仏壇の扉に僕が迷い込む

三面鏡の妻は他人になりたがり

弘前市 斉藤 焔

喫煙はよそうレモンが香るから

アトリエのりんごストンと夕暮れる

ガソリンスタンドでお米は購うてきた

図書館の窓を覗いていく落ち葉

お隣の外人さんも味噌ラーメン

弘前市 佐治 千加子

逝く秋や男背伸びをしてのぞく

穂すきが揺れる疑い深くなる

人情に疲れた鴨は水の中

耳鳴りの中靴音が遠ざかる

身に余るお言葉 水車きしんでる

弘前市 相馬 銀波

農閑期 昼の電話は長ばなし

農閑期 天気予報は聞き流す

コメリングミな仮払い預金帳

そばうどん それでも旨いにぎりめし

雪の日の靴は長い日短い日

弘前市 高橋 岳水

神様の間近に吊るす老いの絵馬
雪搔いて搔いて壮心積み上げる
枕頭の本が睡眠薬になる
飢えた日にもう戻れない血糖値
風邪引いて飲む一服の般若湯

弘前市 肥後 和香子

迷わない自分が少しさみしくて
只ならぬ決意ガラスのハイヒール
美しく三枚おろし出来候
茶髪から虹色次を待っている
近眼のとび魚 松坂慶子ふう

弘前市 高瀬 霜石

朴訥な男の胸にある暖炉
簡単に直りお金をもらえない
手遅れになってしまった長い舌
よく眠る妻だ男の甲斐性だ
銘柄は断じて変えぬ父である

弘前市 中山 雅城

寺納豆弥陀の光明頌ち合う
前向きへぶつかってくる風当り
強ければ敵もだんだん強くなる
雨上がりセーラー服の少女来る
りんごの樹 腰を落として冬仕度

弘前市 櫻庭 順三

津軽富士を借景とする新居です
御来光やがてところを得て昇る
富士玲瓏の真諦掴み倦んでいる
稲妻を下界からきく越天楽
朱彩に染まる山の一瞬待ちこがれ

弘前市 須郷 井蛙

入院は洋服 退院は和服
内幕を抱いて疲れる秘書の夜
観光が目当やたらに塔がたち
健康が宝こぶしを北にさす
おとなりもサンマの煙でホツとする

砂川市 大橋 政良

ブランコが揺れてる誰も乗ってない
人脈の狭間につるの切れた弓
ほったたを丸く弾ませ母乳のむ
傘立てにしょんぼり忘れられた傘
胸ひらく暗証番号ならほしい

黒石市 千葉 風樹

妻の背の夕日を消してやれなくて
向日葵の真うしろがこんなに寒い
男と書いて背中貼ってくる妻
吐き捨てた言葉拾っている余生
蟻の巣へ戻るしかない日が落ちる

黒石市 相馬一花

くちづけの稽古をさせるかどうか

カロリーを考えながら酌む無念

諦めてどじようは泥を吐いている

金の無い僕にもくれる利息表

ジェラシーを隠して拍手する祝賀

十和田市 阿部進

子の将来 目線同じにして語る

うず潮の魅力に迫る秋鳴門

消えたはずの灰の中から恋が燃え

悪徳商 貴方のそばへしのび寄る

なつかしい味に逢いたく北の旅

青森県 西谷大吾

残されて幸か不幸か木守柿

自問自答ともかく生きるほかはなし

午前二時 伝言板は眠れない

あくせくと働く蟻に温い冬

新米を供え仏と懐旧談

仙台市 川村映輝

九十三歳と知っての褒め言葉

夫婦茶碗欠けないように日日精進

到来物お裾分けする隣あり

ストープ列車 声の大きい女達

“海の日”は港一杯大漁旗

東京都 山口新子

目が好きと温い目をした人が言う

出迎えの君を隠れて待つ駅舎

振り返らなくなった里父の死後

善人の肩書守る着ぶくれて

明日逢うのにせつかな夢に出る

横浜市 菱田満秋

元旦に日が暮れるとは思えない

元氣よい順に生け簀は指名され

騙されて喜ばせてるだまし舟

落選へ入れて抵抗したつもり

うしろから斬りつけそうな影法師

富山市 島ひかる

どちらかが合わせ相性いい二人

早食いに愛の器が拗ねている

賞味期限過ぎてから出る人間味

少し泣いていっぱい笑う長い道

過去帳を繰ると子供の声がある

奈良市 宮口笛生

休肝日ちゃんちゃらおかし父の酒

贅沢の限りを満たす新春の酒

おめでとう交わす元旦のうまい酒

初詣で帰ってからのみ直し

寂しくも七十過ぎてしもうたり

奈良市 天正千梢

泣いている叱りながら泣いている

天才の努力 誰も知らなすぎ

のみすぎたのか影がさみしすぎ

思案がつかず深爪切っている

追伸は少し小さい文字で書き

奈良市 吉田笑女

一段と寒さきびしい奈良の朝

なつかしい友の笑顔も夢の中

嫁の愚痴 今日笑顔で聞いてやり

亡き夫に負けずおとらず子も短気

一家四人働く朝を送り出す

生駒市 麻生アート

情報をパクパク食って迷い居り

在りし日になぜ言えなんだアイ・ラブ・ユー

法善寺こんな処に昼の月

二日酔いなんて昔の事だった

サム・サンデイモーニンかりそめの恋ごころ

大和郡山市 坊農柳弘

ねずみから牛へあんじょう頼んます

嫁が来てチャンポンめんの晦日そば

塗り箸で湯豆腐ひよいと祖母達者

雲水に心のゆとり諭される

加茂川の冬を彩るユリカモメ

和歌山市 木本朱夏

急行の止らぬ町で待ち合わせる

塩辛いくちづけ返す恋人よ

愛は憎くると返る猫の耳

横顔の泣き疲れたる阿修羅仏

身の内の湿地帯にも春兆す

和歌山市 堀端三男

思いがけず失せ物が出る衣替え

テープ切るイメージ抱いてスタートへ

菊の鉢 手入れのメモも付けてくれ

例のところで分かるふたりの穴場です

杉さまにエールを送るおばあさん

和歌山市 福井桂香

枇杷の花ひそかに咲いているのです

星影のワルツきれいな錯覚よ

本体が輝いてこそ逆さ富士

無料になったら歯医者さんへゆこう

ひとりの人を大切にして暮れの街

和歌山市 堀畑靖子

美は微なり心陰ると外に出る

明と暗わたくしなりに生きて秋

五十三歳まだ私は未完成

まず母をあげる理想の人として

叩いたら渡れなくなる恋の橋

和歌山市 山田 高夫

老いらくの二番煎じのような恋

いい目覚め口笛吹いてみたい朝

罪は罪 花も実もある裁きでも

縋る目につい指切りをしてしまふ

めらめらとアダムとイブの火の祭り

和歌山市 青枝 鉄治

土下座して貰った票をもう忘れ

ムリしたと裏を知ってるダルマの目

腹の立つ政治忘れて趣味に生き

朝市の威勢にムダも買わされる

点滴に長寿記録を延ばされる

和歌山市 岩本 美智子

牛の瞳よ母が在せば年女

新雪をまとい白山神の山

初春や少年風と空を行く

時は旅人春夏秋冬巡り来ぬ

明日の力約束をして大落暉

和歌山市 池永 正 範

皆かつかしては地球も温暖化

神様も峠の先は存じない

本当の歌手は第九を歌わない

虫の音に眠り雀に起こされる

花屋さん色も香りもほしいまま

大阪市 西出 楓 楽

舌一枚 尻尾一本では足りぬ

喫煙コーナー端へ端へと行きにけり

よく見ればじゃこにも美男美女のあり

建てるなら朝日の似合う家にする

看病が過ぎて回復遅くなる

大阪市 板東 倫子

煩惱と同じ重さのいのち抱く

権謀のおどろおどろの総選挙

自転車を盗られてからの性悪説

カワイイと柳家小さんにギャルの声

メイクドラマ父が息子の首をきる

大阪市 井上 白 峰

子や孫に囲まれ傘寿の祝い膳

祝宴の余韻たのしむ千鳥足

性懲りもなく老骨に鞭を打つ

趣味一つ持って広げた老いの視野

ポンコツも流れに乗れば走りだす

大阪市 中田 あい子

初日の出かわらぬ波がかがやいて

使うてもへらぬ財布のほしい暮れ

年玉をもらう順番守る孫

催促は出来ぬがほしい義捐金

嫁ぐ日の迫る娘はやさしすぎ

大阪市 玉置英子

私を叱った母を父叱る

珍しく腹を立てたら風邪を引き

トイレットペーパー銘柄きめている

乾いても薔薇の誇りで立っている

暗闇が恋しと猫は路地へ行く

大阪市 大塚節子

ただいまの戸口へ大根の煮えたかざ

脇役の白菜にしむ鍋の味

何となく女は古希となりました

つんとして花柵の無口なり

足袋先が薄汚れして旅帰り

大阪市 清水利武

初春だ元氣を出して初詣で

戦争も地震もいらぬ初日之出

国内が乱れてもなお富士毅然

俄仕立 家紋の違う大臣連

震災の仮設の初春がまた巡る

大阪市 上田柳影

ポーナスに平和になれた旅の窓

嘘のない顔だと思ふ丸さもつ

もって死ねる財でもないよへそくりよ

アルバムに私一人が生き残り

催促に行けば覚えのある生活

大阪市 大河未佐子

形振りをかまわぬ岐路の辻に立ち

積み上げた石蹴って行け薔薇のもと

強くなり嫌な女になりました

みこころのままに余生に悔いはなし

花がらを摘む穏やかな日に戻り

大阪市 小糸昭子

紅筆を転がし愛の行方追う

すだち来る深い緑に救われる

白い月 雀五 六羽よく遊び

アルコールほんの少しの気の緩み

灯が付けば帰りなくなる我が家です

大阪市 大野武太

ふるさとに父竹次郎の石碑たつ

どうするの消費税だけ居すわって

小商人 肩に力がいりすぎ

悪童記 哀しきばくの通知表

黄昏れて社会党さんどこへ行く

大阪市 奥田良子

お年始の新婚さん手をはなさない

オルゴールの乙女の祈りさえ聖夜

新世帯 鍋にもりボンかかつてる

玉椿ただ一輪の隠居部屋

老いひとり祈りにまぎれくらしおり

大阪市 松尾柳右子

初日の出満願込めて犬連れて
早朝に届いた荷物 着払い
お年玉貰いに孫はちよつと来る
色々な賀状うれしや読みあきぬ
牛歩にて二十一世紀へ登りましょ

高槻市 川島 諷云児

羊羹を分厚く切ると茶がうまい
学歴はないが仕事に自負がある
頑固で無口これも男の勲章だ
嘘ばかり書いて余白のない日記
ぼろぼろの辞書に一年感謝する

高槻市 井上照子

生きていく同病の友励まして
検査苛酷堪えて命をたしかめる
しあわせは今生きている歩いてる
桜 紅葉 テレビで観てる諦めか
落胆に炎をつけてくれた人

茨木市 井上森生

世紀末真を問われる人の意志
朝市に大根まつりの旗が立つ
いもを掘るぼくが育てた夢を掘る
紅葉の見事さを説く氣象学
ばあちゃんにひ孫がおくるつるとかめ

茨木市 島元ふみ

音沙汰のない子を託つ秋の宵
小さい虫 私の耳で鳴き通し
超ミニも卒業式は明治調
少年倶楽部 少女倶楽部の仲間達
子らがはや余生の夢を語り出す

枚方市 海老池 洋

一日天馬そんな願いも木馬たち
安い分飲み代となる船の旅
一徹の男の行った風の道
エイエイオー元氣いっぱいネギ坊主
煩惱もそう捨てられぬ百八つ

枚方市 前 たもつ

飛ぶ夢はまだ見るつもり 六十五
ふり向いて欲しくて母を困らせる
銅鐸の里にやさしい秋の風
三日分の日記真面目に書いている
休耕田掘れば眩しい土の貌

寝屋川市 江口 度

干潟埋め立て休耕田を増やすのか
小春日和 椅子ずらしつつ日向ぼこ
年金暮し貯金ときどきショートする
美しいねと念を押すからうそになる
色欲捨ててくらげのように暮してる

寝屋川市 岸 野 あやめ

耕耘機 牛の立場も変わったね

娘の家へ新幹線でちよつと行き

誕生日せめて紅葉を見に行こう

判一つこれで連帯保証人

半額で売ってあげると買わされる

寝屋川市 堀 江 光 子

慰めは黙って注いでくれる酒

裏町に関東煮のうまい店

花野へと母を押しゆく車椅子

背伸びせず裏も表もない暮し

渡り鳥 虹の向こうを知っている

寝屋川市 柴 田 英 壬 子

陽も風もシャットアウトの仕切り堀(府宮建替え工事 二句)

金木屋よさらば花壇になる水路

身を躲す空間がある自恃がある

公孫樹の実を食み力付けられる

笛吹けば踊る姿になつてくる

寝屋川市 森 茜

民族の大移動のよう父の靴

むらさきしのぶ咲き検診の通知くる

憧れのままプロフィール老い給う

おんぶばったこっそり虫籠だしてやり

縦横無尽に孫のミサイル攻めてくる

寝屋川市 北 岡 波留吉

先ず日の丸上げて寿ぐお元日

当り年祝い闘牛にもお神酒

流行を気にせぬ父の作業服

ふと祈る音沙太の無い友の幸

虎の尾を踏むたび箔が付く男

守口市 森 川 まさお

祭りずし仏頂面の高校生

稲架の道 旅のおわりはゆつくりと

手をかざし雨を占う宿の妻

城の裏どこからか秋刀魚焼く匂い

山越えてきてうどんやの深い軒

守口市 結 城 君 子

さまざまの身の上告げている枯葉

美しい落ち葉に迷うわたしのうつり気

くれないの冬薔薇咲く王女のごとく

銀杏散る寺の静けさ肺の底

雨という予報ききつつ一葉忌

吹田市 栗 谷 春 子

夕暮れはすでにさびしい文字となり

十日ほど金木屋の中に寝て

おいと声かけたいような旅の茶屋

冬の障子いろんなものの影たのし

自己診断 脳の一ヶ所故障中

秋から冬へ扉 音もなく開く

吹田市 山 本 希久子

年改まるただそれだけに威儀正す

散り急ぐバラをとどめん術もなき

敗者の夢に同じ高さの空がある

けんかではなし言葉のキャッチボールなり

吹田市 古 川 喜美子

秋の蚊が合わせ鏡の中でなく

これという事なき身にも薄化粧

睡蓮が開いて母が座つてゐる

洗い髪 少女の頃の顔になる

1プラス1の答で採めている

豊中市 安 藤 寿美子

にしん蕎麦食べている間を京時雨

泉水の飛石童心にかえり

昼寝覚めこことこやつた今何時

あれがかの東京都庁霧の中

汽笛一声こども列車が動き出す

豊中市 田 中 正 坊

新年や十年日記 七年目

無神論おみくじをひく初詣で

牛歩でもよし真っ直ぐに進むべし

日日好日わかものに席譲られる

大臣はみんなボクより若い人

師走来るまでは形にならぬ家事

柿の皮むきつつ柿右衛門思ふ

煩わし埴輪の顔にでもならん

善人が阿呆に見えて来るニュース

いたわれ続けて老いを深くする

豊中市 井 上 直 次

古文書が歴史の穴を埋めてゆく

石橋を叩く男が火傷する

喜びに酔つておつたら梯子なし

夜の更けてうごめき出すや菊人形

老い少し少し赤めの服を着て

豊中市 滝 北 博 史

米作りやめてコスモス能登の里

連れて行く刑事の頭上に流れ星

不しあわせ砂糖で食べる酒の粕

フロンガスの権威がヘビースモーカー

金婚へ牛歩善哉あと五年

豊中市 江 口 明 光

節度ない暮しに恩を見失う

終夜運転列車はみんな日の出号

十年は若くなりますアテランス

絵葉書の通りアゴ湾秋になる

喜寿すぎてまだまだ修羅をくぐらねば

豊中市 月原方郎

古女房いよいよ腰が座つて来

流れゆくパイプの煙苦吟行

冗舌に疲れて眠る孫の顔

朗報を早寝の友に遠慮する

ささやかな運に守られ年明ける

箕面市 岩津 ようじ

航空ショー空が迷惑しています

着物着る礼儀正しい顔になる

グルメ番組見ながら食べている茶漬け

おもらしをまたしちやったのと古い無邪気

老いてなおプラトニックな片思い

東大阪市 森下 愛 論

ひとり者春に背かれ不貞寝する

新雪を袂に掬うておめでと

さりながら元旦おんなじ顔で飲み

部屋替えて置き場所迷うシクラメン

春風に匂う美人とすれ違い

東大阪市 指宿 千枝子

酒を断った日からあなたは衰えて

電気消してくれの言葉で永遠の旅

葬送にあなたの好きな揚げ羽蝶

父さんは逝った静かに日が暮れる

楽しかった日々をお話ししましょうよ

八尾市 高橋 夕花

生かされて真つ赤なバラと見つめあう

時雨の記 亡母に心配かけていた

山茶花にひと重二重のふゆ支度

かささぎの橋を渡ってふゆに会う

端正な額にかかる霜ばしら

八尾市 宮西 弥生

身辺はきれいにしとくものひとり者

靴の音 往きと帰りが違うなり

ハンサムで食えない分だけパートする

一度きりの人生だからノーと言う

高野山 暴走族もなく平和

八尾市 宮崎 シマ子

竹馬の友 下戸と上戸に分れても

辛抱の果ての啖阿だもう退けぬ

風神 雷神 祖父母元氣な初日の出

地獄の鬼に年始の酒を贈つとく

お帰りの声が聞こえた無人駅

八尾市 山下 美津留

腹に水 黒い冷気が背を走る

即日入院ちよつと待つてくれ

恨んでも仕方はないが酒の所為

いや待てよ死ぬと決めるにまだ早い

新世紀見るまで呼吸してみせる

八尾市 吉村 一風

必死で涙こらえたなんて知らんだろ
負けて勝つ口ではなんとでも言える
忘れてるふり許してる妻の顔
時おりは妻のふとんを掛けてやる
居眠りの母居るだけで座が和み

八尾市 大内 朝子

梅一輪ポツとはじけたお正月
あるがままわたくし色で生きてみる
姫鏡十九の春を知っている
落ち椿もいちど枝にのせてやる
しあわせを入れるポツケにアツプリケ

松原市 玉置 重人

行くところがいっぱいできた無料パス
フルコースすこし肩が凝ってくる
燦々と曾孫男の声をあげ
老人ホームの電話が人を恋しがる
パトカーの後をいっぺん走りたい

松原市 小池 しげお

一人でも笑えるように稽古する
倅せな時計をグンと遅らせる
すかたんへ丼飯を盛ってやる
老眼鏡拭いて半分聞き流す
こおろぎが入って納屋をしめてやる

富田林市 片岡 智恵子

にっこりしてしまふ椿の八分咲き
本心を隠す化粧が薄すぎる
摺まえてほしいと思うちぎれ雲
忘れたい事は記さぬ日記帳
傷を持つ友のところに遠くいる

富田林市 池 森子

実り足りないわたしを秋が通りすぎ
風葬は如何と黒い訪問者
秋が来るたびに買い替えたい目鼻
紙鍋でとろりとろけるのが味方
火も水もやがては遙かなる絵画

富田林市 松本 今日子

秋なすの紺華やかで落着かず
魂を空っぽにする紅葉狩
木の株につまずいている秋の月
青い鳥信じた頃の男と逢う
終章のつもりが靴を捨てられず

堺市 中野 櫛子

聞く耳は二つあっても聞きもらす
六十年の愛聖くして刻止まれ
座るのに禁句また出るドッコイシヨ
病窓の花しゃべり出したらどうしよう
極楽の余り風とはどんな彩

堺市 山本半銭

藤井寺市 中島志洋

正月を待つ手作りの餅と味噌

いさぎよく生きたしと思う福寿草

出来ること何にもなくて百度石

玉砂利の一足毎の祈りかな

不動明王の目で曙が仕切りする

藤井寺市 吉岡美房

柿熟れて太子御廟に近き道

十二月今年もやっと生き延びる

もう師走犬も溜息ついている

願かけて吹雪く仁王に手を合わせ

背水の陣へうしろは風ばかり

藤井寺市 田中透太

もう一度渡つてみたい春の橋

ライバルの位置確かめる曲り角

向い風男盛りも過ぎました

胸底に女沈めて秋刀魚焼く

かけうどんおなじ思いを持っている

藤井寺市 高田美代子

休肝日忘れて今日はお元日

本日は晴天なりで初詣で

神主の咳払いさえ有難し

番犬も御節料理をいただきます

もう帰ろ五時になったら日が昏れる

丑の年 急かす慌てずマイペース

元日の日の丸いつか忘れられ

顔触れも揃い目出たく初句会

福耳も金と美人にご縁なく

ジャンケンに負けて思わぬ残り福

河内長野市 井上喜醉

チャンス待つ弱虫だから先越され

割り勘で厳しい話ばかり聞く

魂を売るにも相手みつからず

あの人は口にチャックが無いらしい

満腹の眠気が背中駆けあがり

高石市 浅野房子

老兵の流れで無人駅に着く

院長に少しときめく診療日

旅先の贅沢くらい許されよ

温泉で疲れをいやし風邪もらう

主導権ある日境に交替し

和泉市 岡井やすお

謡初めあとのカラオケ盛り上がる

バファローズ大暴れさすドーム待つ

友好はW杯が済んでから

据置は三月までの税アップ

よく噛んで又もう一度うしの年

和泉市 西岡洛醉

再職の日々堅実の歩を運ぶ
二十四時 余白だらけの老いの道
祭り笛今日はピエロで舞うとする
逆夢であれと迷いの朝が明け
一癖を隠すサングラスが映えぬ

岸和田市 高須賀 金太

争わぬ人には負けたなと思う
どう見ても隣のバラに負けている
詩集でも抱えて歩こ秋ならば
読書週間は本を読みたくない
夕食を作れば夫食べてくる

岸和田市 岩佐 ダン吉

靴ひもをきびしく締めた冬の朝
さあ来いと父さん冬の山になる
冬の空今は我慢と決めている
慟哭の日よ慰安婦の重い口
生きていてよかった後は出てこない

岸和田市 原 さよ子

赤い羽根少しいいことした気分
巻き戻しきかない今日をふり返る
私まだ枯れてはいない試着室
相談をされ深みにはまるお人好し
秋深み三時のお茶も熱くして

岸和田市 古野 ひで

完璧でないから人はあったかい
建前の裏で本音が疼いている
亡父の忌 黄菊白菊真つ盛り
歳時記のように街には赤い羽根
旅人を優しく包む紅葉山

岸和田市 田 中文 時

餅つき器 男の出番無い師走
バラバラにされてマネキン運ばれる
被災者の心身凍る虎落笛
寒厳し葬列の中今日も立つ
歳佗し何も残せぬままに古希

岸和田市 井 齋 一 齋

新年会最初音痴で盛上る
お正月三日で戻るグイエット
北国の春は暦と食違う
初賞与 孫からもらおうお年玉
お正月小さな客が勢揃い

岸和田市 長谷川 呂 万

杉さまが触れたハンカチ宝物
老い進み妻の助けでワンカップ
政治家に求める無駄を知った古稀
立ち合いに迷いとっさのはたき込み
核心に触れると矢弾飛ぶ会議

大阪府 八十田 洞庵

西宮市 門谷 たず子

無理しても次の世紀を見てやろう

円空仏ここにもおわす北の果て

子供から見れば大人は勝手すぎ

宴会が多すぎますと妻の愚痴

スカイライン段々色が濃い紅葉(佐渡にて)

川西市 氏林 洋敏

別姓を別れたものと早とちり

ポケットに忘れたままの清め塩

酔っぱらいの横が大きく空いている

わたくしの命わたしのものでない

補助席に大事な人を乗せている

尼崎市 春城 武庫坊

馬券売場到天狗の鼻が落ちている

歳相応に影は変ってついてくる

塔と人同じ角度で影伸ばす

賢人に見える眼鏡を買い集め

4Bで冬の林の絵は描けぬ

尼崎市 田中 薫

秋は虚構の日に日に水硬し

月光に脆き手足や金剛力士

剛直に人黙らせて月曜の電車

身の果ては曖昧模糊 白犀ねむる

オリーブの実 はるかに原発の岬

春咲くを信じて並ぶ球根よ

情け断つテールランプが遠ざかる

水面下の恋と知ってるティーカップ

すこし嘘すこし化粧をしておんな

逢えぬまま瘦せゆくばかりカレンダー

西宮市 山本 義子

峠の茶屋 天氣の良い日だけあける

深夜ラジオの童謡 亡母の腕まくら

ひとり旅走らなくてもいいだろう

他人ごとでないと見ている救急車

ひたすらに無欲たらんと日々生きる

加古川市 吐田 公一

余白まだあるので描く老いの夢

鉛筆のいのちが尽きるまで描く

妻の酌だけで結構三ヶ日

朝酒を庄助なみの三ヶ日

今年こそはとお預けのフルムーン

鳥取市 西村 黙光

わが家では牛の乳から酒を出す

口論の果てに二次会三次会

おでん屋で宇宙旅行をして帰る

嘘をつく少女に蝶の羽化をみる

酒の字を習っていない孫が書く

鳥取市 両川 洋々

神様を味方につけて出直そう

田の神よ怒るな離農すると決め

花いちもんめお前新党には要らぬ

千羽鶴きつい再起と知り尽くす

スト権が妻にあるとは知らなんだ

鳥取市 武田 帆雀

客になり済まして菊師聞いている

伏兵が現れ出たる菊花展

三百六十五 手塩に掛けた出世菊

優勝馬撫でるが如し菊還る

亡父より厚い表札して済まん

鳥取市 倉益 一瑤

真っ赤なワイン胸の隅々まで染める

わたくしの昔話は赤すぎる

狸寝入りただではすまぬことを聞き

笑顔にも罪があつたと知つた日より

賑やかな娘の部屋行つてみたくなり

鳥取市 美田 旋風

騏驎獅子舞えば黄金の穂が実る

放し飼いされても戸惑う齢になる

建て前の顔にうっかり騙される

大切なことを書いてる但し書き

悠々自適尻尾を振つた日が遠い

鳥取市 植田 一京

日本の秋だ童謡湧いてくる

変身の構えて軽い風に乗る

根まわしの済んだ構図を渡される

逢いにゆくエネルギーなら湧いてくる

あまりよく見ると幸せ逃げてゆく

鳥取市 坂田 和歌子

何もかも忘れた母が僕を呼ぶ

秋雨に四川の月が惚ばれる

山ほどの愛を棺に入れておく

自己主張ふるい時計が鳴っている

古毛糸派手な腹巻出上来がる

倉吉市 米田 幸子

手練手管で男の城は落とされる

哀しみをこらえた父の高笑い

子が登る路へレールを敷いておく

袴をはずして酒を呑みなおす

言い勝つてすっきりしない喉仏

倉吉市 淡路 ゆり子

晩学へ歳月かかる山登る

泰然と亡父が生きてる庭の松

空耳か柩の釘の手が止まる

泣いて笑つて毎日同じ飯を食う

出払つた後の昼寝が若さの秘訣

米子市 林 荒介

履き慣れて遊び上手な靴になる

坂は続いて梵鐘の余韻を登る

接点を探す4Bの苦渋

先頭の帽子の数が多すぎる

掃き寄せた落ち葉が今日を語りだす

米子市 林 瑞枝

柿の葉は散り讃美歌空に溶ける

若き日の色香ただようははの櫛

師の恩はいつか甘美な虹となる

山のことに詳しい四つ折りの帽子

青空に衿足見せて美女も老い

米子市 澤田 千春

雲に乘ろうね孫と語って帰り道

タンポポの綿毛に乗った仏様

しみじみと影がわたしに酒をつぐ

生きている限りは花の種をまく

思いきり泣けば荒海風いでくる

米子市 石垣 花子

だぶだぶの服で男の日曜日

時々は仏に弓を引いて見る

尺取虫にからかわれてる小鳥達

玉子の殻つけた夜店のヒヨコ買っ

海峡の橋から村が狂い出す

米子市 野坂 なみ

恩師のはがき二枚を額に入れている

子の海へ亡父の灯台の残照

バトンタッチ余力は私のためのもの

善玉 悪玉 綱引ごっこ始まった

甲乙丙学力だけのものでない

米子市 光井 玲子

亡母のように安らぎもらう牛の瞳よ

牛に笑われるそそかしい私

折々の幸をかみしめ生きている

パソコンが身近マンガで手ほどきだ

老夫の心に理想の女神いるらしい

米子市 白根 ふみ

茫みち亡母もわたしも身軽くて

戒名とやっ睦んで小春日の

傷ついたほどきずつけているブランコ

毒キノコ月にこたえるから怪し

追われると逃げ背けると不安がる

鳥取県 新家 完司

どの街に流れ着いても傘が要る

目が合わず軽い会釈が空を切る

無駄めしを食ったと思う五十年

敵意なしと蜂にどうして知らせよう

霧雨の街にひとときわ君の傘

鳥取県 鈴木公弘

うまい酒さがして歩く文化の日
陽だまりに心許した風邪らしい
眠ったら忘れるほどの情けかな
逃げのびたところに蠅叩きがあった
鼻ぐすり騙し合うのがむずかしい

鳥取県 土橋 螢

刺抜いたあとに接吻してくれる
肩書きは川柳作家朝を出る
いつか芽が出る忘れてはいけないよ
嫁に来たときの鏡を拭いている
世界一おいしい米を食べている

鳥取県 土橋 はるお

どうしよう祭りが休肝日に当たる
カラオケに弱い私なのど仏
質札も入った宝石箱がある
まだ若い爺ちゃんなんて呼ばないで
準備万端 初雪が来てもいい

鳥取県 乾 隆 風

マイカーを磨いて牛の顔忘れ
牛として納得いかぬ貨車にのる
核家族人の情けも冷えてくる
どん尻の方に大きな拍手する
国防婦人会の襷が蔵にある

鳥取県 西原 艶子

芋粥をふうふうけんかもう忘れ
世に慣れてまだ初雪の白さ恋う
初雪の便り息子はまだひとり
破れにも汚れにも慣れ黄昏れる
分別を試すネオンが美しい

鳥取県 羽津川 公乃

目秤と手秤で選る松葉蟹
足し算も引き算もして古希の春
止めどない憶いに秋の夜は長い
お年玉送金をする孫も居る
耳に穴開けた位の風通し

鳥取県 石尾 かつ乃

好きだから迷わず買った花の苗
エンピツを少し削って大人の字
山紅葉 心の奥も晴れてくる
絨毯につまずいたまま こんにちわ
愛されて相合傘の遠まわり

岡山市 時末 一灯

元旦や古稀の誓いを若水で
虚しさよ信と義のなき日が暮れる
ひと眠りただ迷いから逃げただけ
人が寝る頃から湧き出るこれが街
わらべ唄どこかそぐわぬ村おこし

岡山市 花田 たけ志

趣味の会 世間話に舵取られ
文無しの妻で花買う金はあり
餌やれば雀は畠を荒らさない
世渡りの口笛ときどき吹いており
復唱をして回れ右した昔

岡山市 川端 柳子

柿熟す精一パイの顔をして
亡母に似たお人ようぞしあわせに
車椅子 思い残しのないように
とある日のわたしの肩にかかる雪
花嫁を描けばうちの孫になる

倉敷市 田辺 灸六

俱会一処 川柳塔の笑い声（高野山参拝）
ボロボロになって齢を知りました
定年が来れば私も使い捨て
貧乏神と結んで余生気楽です
退屈の虫が謀叛を考える

岡山市 矢内 寿恵子

少子化を横目にねずみの年が逝く
幸せの尺度それぞれ三世代
エリートは孤独が道を逸れたがる
生き甲斐を支えてくれる一行詩
想い出を拾ってこぼす萩の道

岡山市 二宗 吟平

八十年前の恩師の懐かしく
思い出を語れば香の煙ゆらぐ
又お参りします握手の墓を撫で
この人と決めた握手に声が出た
倅等の力で出来たわが句集

岡山市 荻野 鮫虎狼

自叙伝の貧乏時代が永すぎる
体操がやたらと多い熟年期
熟年の旅 勘定は妻が持ち
別居した夫鼻毛がよく伸びる
週刊誌翔んだ女がよく喋り

松江市 舟木 与根一

つまみ食いして台所仲がいい
大根が美味いこの秋一の冷え
救急車消えつるべ落しに暮れる街
父さんにやっとなんだ帽子掛け
球根を植え立冬は日本晴

松江市 柳 楽鶴丸

波乱の人生でした好々爺
貧乏だから幸せがよくわかる
大好物はジャパニーズキムチです
妻であり母のような女です
チビリチビリチビリ嬉しい日は妻と

出雲市 尼 れいじ

一直線に転がるミカンで愛おしい
紅葉散る明日の木枯らし呼ぶように
料理番組見た妻の料理まじくなる
電話番みんな美人だと思ふ
川柳の里を好んで出る狸

出雲市 板垣草丘

大根の背伸び見ながら蕪ぬく
栗植える山からホダ木二三本
弁当の要らぬ日みんな寝坊する
浴槽に釣糸たらず精神科
適当にやって世間についてゆく

出雲市 竹治ちかし

寝る楽がやつと解って父の齢
人間のままで老いたいなと思ひ
窓際の席で感じている季節
休日の数だけ馬鹿になつていく
一人立ち出来たかTELのない暮らし

出雲市 伊藤寿美

末期ガン川遡上する高瀬舟
まだおねしよしてパソコンでよく遊び
遠い日を遊ぶ老母のわらべ唄
秋夜長 同じ夢見る老夫婦
草の実の勲章孫と文化の日

出雲市 園山多賀子

本当は弱虫だろう医者嫌い
秋更けて温い仮面と取り替える
まっとうな人指し指が病んで
おだやかに石路の黄匂う終の庭
好意だと受けとめている水引草

出雲市 久谷まこと

無人駅どちらに一步ふみ出そう
初対面サインボールが飛んで来る
気取つたらだいなしになるひげ奴
成るようになるとあきらめ初暦
矢は一本射程距離的定まらぬ

出雲市 富田蘭水

一言をしゃべりたそうな菊が咲く
通じない心を夕陽に愚痴つてる
のんびりとすべてを忘れさす温泉
よい事がありそうな朝菊がおる
思いきり口論しても夫婦仲

島根県 小砂白汀

銅鐸を掘りあて加茂町グロッキー
バブル裂けひっくりかえつたおもちゃ箱
枯れ芒バブルバブルの夢の跡
自家菜園虫に試食をしてみらい
健康法一ぱい吞んで駄ばら吹き

島根県 堀江正朗

惚けたなら縋る音さえ見放すぞ
見えぬ目が眠たがるのも不思議だね
物忘れ笑い戦盲初春を待つ
手さぐりの日々にも妻といふ安堵
思い出を積んで崩して日向ぼこ

島根県 堀江芳子

ふるさとの雲と流れて行く追慕
手術待つ明かり冷たく身にしみる
付き添いに刻は動かぬ秋夜長
見えた日をナースに語るいとときに
吐き出せぬ貝の苦しみ我が身にも

島根県 西村早苗

初風呂は万病に効く山の宿
消印を落したらしい初便り
飲み放題食い放題にだまされる
防犯灯うつすらついて混浴場
節煙節酒なんとか師走終りたり

広島市 森田文

カジュアルでバランス崩すおじいさん
テープカット祖父の袂が切れにくい
ダム湖にはいい雨老母はわびしがり
教会のノブを握って引き返す
明日へ継ぐ夢を繕い手をつなぐ

竹原市 小島蘭幸

父がいそうで古道具屋を覗く
星空を見ている妻と旅にいる
髪切った娘の明るさをまん中に
父の貌して蟬螂が振り向いた
最後には負ける大きな壁がある

竹原市 岩本笑子

酔うてしゃべって男の温い手のひらよ
一期一会 男の涙見てしまふ
煮こごりの母の笑顔を見たような
しゃっきりと目覚めて初春のあらたまる
元日のバラはピンクと決めている

竹原市 時広一路

瀬戸の波テトラポットにじゃれてくる
双子ふと影武者ごっこしたくなり
ピンボケの明日を履く靴磨きます
百薬の長を悪いと言われても
小便小僧だれも笑顔になつてくれ

竹原市 石原淑子

百万ドルの夜景明ければひしめいて
香港の洗濯の旗さがなり
石ころを見るような目は許せない
御仏のお顔そのまま九十五
四十九日 小菊の香り姑にたむけむ

呉市 榎田英詩

縁あつて翁と姥で舞うてます
いい夢の中で果てたいなと思つ
そう言えばスマートだったなあ妻よ
老いて候聞えてこない妻の笛
時を経て軽い会釈の女となる

広島県 藤解静風

政治家の左の耳と右の耳
親も子も孫も分からず生きて候
あらかたは承知している妻の愚痴
夫婦別姓ポンポン船が旅に出る
コスモスの一輪挿しのあるトイレ

柳井市 弘津柳慶

妻の愚痴軽く笑顔で聞き流し
子の事で井戸端会議もつれてる
やつと芽が出かかったのに踏みつける
片言で孫がよちよち擦り寄つて
相手から逆に変化球投げられる

宇部市 平田実男

車椅子の明るい顔に救われる
貧乏へ成人病が寄り付かず
エリートが鼻で笑つた正義感
川柳が僕を活字にくれる
食べるのも言いたい事も腹八分

美祢市 安平次 弘道

ライバルがいつもこつちを見ているぞ
花言葉そんなに覚えきれません
教会の椅子が突然くずれだし
オフレコになると話が盛り上がる
止り木に昔の僕が掛けていた

下関市 石川侃流洞

それとなく負ける一手へ深い読み
上げ膳 据え膳 二日もたぬ妻の旅
柿すだれ母は決めてる送り先
冬の絵の中にポツンと僕がいる
鍵穴を覗きやつぱり留守らしい

香川県 川崎ひかり

何処へでも顔を出してるコシヒカリ
転ぶたび大きくなつた雪ダルマ
急ぐのに電話かかるし客もくる
効果出す涙なかなか出てこない
すぐおろす金だがまずは預金する

香川県 木村あきら

神苑の緑鮮やか初日影
除夜の鐘聞いて目覚める福寿草
生かされてまだまだ恥をかくつもり
エア少し抜いてノンビリ生きてゆく
若水に〇一五七はもう要らぬ

香川県 池内 かつり

今治市 野村 京子

紙芝居ほどの短い自分史だ

うっかりとちやっかりを併せ持つ

おむすびの三つを持って山男

褒められてはいはい花を差し上げる

転居先に着いてた氏素性

香川県 工藤 吟笑

ネジ巻くに巻き代のない九十坂

正直に生きて下積みばかりなり

変わるまいマツ正直なままでよし

飛んでくるツブテに正論引つ込める

父の視野届かぬ処で子は育ち

香川県 山地 マツエ

肩書きをはずす余生はゆっくりと

ライトもう照らぬ舞台に立つピエロ

上客だ今日は羊羹厚く切る

手紙書くみどりのインクで別れ書く

北の旅島の民話を持ち帰る

今治市 矢野 佳雲

明日も来るバスを信じる定期券

その後は誰も知らないかぐや姫

俺の背な見て育つ子の程が知れ

無理言うなというて悪友聞いてくれ

あの頃の夢中アルバム繰って見せ

花盗人に泥棒草がついてくる

金箔が剥けてやさしい仏さま

期待させ風はそれから知らぬ顔

人情の屋台つぎつぎ泣きにくる

決断をするに短いエレベーター

今治市 越智 一水

世の仕組み知りつくしてる草むしり

野の花が私の人生変えてくれ

一票一揆だまされないぞ消費税

世の仕組み変えよう一歩また一歩

風うけて男はロマンつくり出し

松山市 白石 春嶺

氷囊を干すウイルスがやつと抜け

グイヤルを回せば里の声も風邪

ソロバンに合わせぬ余生の趣味に凝り

精子バンクのセールスが来る十年後

五時からをうその世界にするネオン

松山市 宮尾 みのり

気配りの人が目くばせしてくれる

妻多忙ふろふき大根とはいかず

口笛の名人だったのは昔

川に棲む魚も飼育されている

当人は愛だ恋だと言ふ不倫

西条市 片上明水

ご近所のどこも灯の数減つて冬

透析の窓 雲ばかり数えさせ

路地へ積む落ちてきそうな物ばかり

抽斗の一番奥に酒の金

女房が逝つて八百屋は店を閉め

北九州市 梅田宣司

忙中閑 本屋のはしごでもするか

従いてこいと言つた男も粗大ゴミ

フリーダイヤルで神様呼んでみようかな

生きているはずだが出も欠も来ぬ

くすりか酒かやつぱり酒にします

唐津市 久保正剣

暁の瑞雲映す水鏡

平成の土俵を攻めるジングスカン

ワープロは孫パーカーはお爺ちゃん

赤札は赤札なりの消費税

墨壺の苦勞を知らぬ青写真

唐津市 田口虹汀

西高東底ゆつくり冬の仕度する

供日疲れか妻は毎日リハビリ

山麓にオウムの椀が捨ててある

物言わぬ遺言状にある力

真つ昼間 噂の主は僕の妻

唐津市 仁部四郎

よくできたごまめ お屠蘇は三ばいめ

正月の雨にも縁起あつたはず

よその国だが停戦のお正月

正月や満年齢が気に入らず

元日や日本国民たる憂い

唐津市 山門幸夫

合掌の涙にでかい師の笑顔（西尾榮先生の仏前に二句）

遣影笑みよう来やはった来やはった

ステッキに満員電車の思いやり

マイナスをゼロにしてから奮い立ち

ゼロ歳児無限を秘めて大の字に

唐津市 山門タミ

鞭打てばまだ余力出る老いのロバ

貯金箱孫の笑顔にもう百円

寒い朝車も白い息を吐き

回顧録 花も嵐もまだ夫婦

うるさいが孫のピアノを褒めてやり

唐津市 市丸晴翠

炎と風叫んで土は窯変す

子が病めば朝露夜露母の胸

余白から呻き聞こえる子の日記

富士見えて幸先良しと旅を行く

街道の新築はみな食物屋

弘前市 岡本花匠

友の個展 縄文しのぶ炎の祭り

あの夏の火焰地獄を友の画布

屋根のカラス起きろおきよと冬の朝

美味しさに妻の挑戦さしすせそ

弘前市 一戸ツネ

肩書きが取れて名刺もリストラに

初雪にしよばしよば駄馬の鼻袋

日めくりに息切れしてる老河童

原っぱより牛舎に戻り売られる身

弘前市 今生恵子

仕合せはテレビ観ながら朝のパン

山高帽が散策してる美術館

前髪をつかみそこねて風去りぬ

やがて咲く やがて散るから美しい

十和田市 小笠原敏人

婚札に向かう飛行機揺れ過ぎて

赤い靴履いた女で吠える犬

留守電にかけて虚しさまた募る

飛行機の旅に潤い求めない

八戸市 島田昭治

欲のなさ裏から見れば馬鹿みたい

口惜しさは元氣過ぎた妻のこと

月命日何を置いても墓参り

生きざまを子等の評価がきびしくて

青森県 諏訪柳々

津軽 冬風の中から風を生む

顔見るもイヤな男に酒を注ぐ

高椅子で足がつかない位置に居る

奴さん天狗の面をはなさない

町田市 竹内紫鏡

万歩効果かよろけずにズボンはく

ニトロ持つ男がクラス会の雄

磁石駒買ってベッドで詰将棋

美しく老いゆく唱歌ないものか

静岡市 安本晃授

老梅の殊更薫る初日の出

書き初めの絵皿に清き富士を盛る

三が日過ぎて懐かし麦の飯

踏んぎりの一步に迷う土踏まず

富士宮市 渥美弧秀

白糸の滝音の中孤独な日

賀状から温もり深い三箇日

大合唱「基地反対」が海を越え

富士霽れた朝なりショパン曲を弾く

静岡県 藺田模沓

老桜の九十七年へ葉を落す

梁組と土間のあいだに歴史あり

霊柩車と婚札の荷がすれ違ふ

川会所のお白州冷えて秋深し

羽昨市 三宅ろ亭

新年や大風呂敷を用意した
何用か知らんが必ず一駅先に下り
君もまたやっぱり公園好きなのか
年末に野望を少し発散す

京都市 都倉求芽

三が日くらいは下駄の音聞きたいな
出土品いまの日本を喜ぶか
冬仕度 山は人嫌いの風になる
呉服屋倒産 着だおれの京で

京都市 山海友熙

元日やゆっくり牛についてゆく
又一つ若くなります新春や
O型で牛が三人おめでとう
牛井を今年は少し控え目に

京都府 稲葉冬葉

おおきにと大阪弁の軽いこと
欲が深くて雑念を去りがたし
初恋の兄ちゃんが逝く喪中はがき
菊の花 容姿端麗花鋏

奈良市 米田恭昌

隣から焼き松茸が攻めてくる
出たっきりの船待つ母と言う港
山からの無事が土産と言う息子
地獄まで御一緒にねと恐いこと

生駒市 北山悟郎

巖然と嘘を通さない喉仏
有難う良き友周り囲まれる
秋日和 妍競いあう菊花展
大声が人に元氣与えてる

大和高田市 岸本豊平次

老眼鏡妻に譲って次を買う
吾が庭は小菊の倒れたのが似合い
吾が窓に二上山の夕茜
紅葉散り木枯し通りよくなった

大和郡山形市 榊原慧心

喧嘩して無口になると皿がとぶ
卒業の見込みがたつてパスポート
影武者の妻の操縦狂わない
誉めること探す苦勞の披露宴

奈良県 長谷川春蘭

七五三この児嫁くまで余生欲し
句を拾うて捨てて夜長の時得たる
子供らの個室は城よクリスマス
忘れねばならぬ事抱き年越さん

和歌山市 福本英子

山茶花へ和む目白もわたくしも
知らん振り通してあげる愛してる
仮面脱ぐ機会外しただけの罪
障子貼る亡母の仕草がふとよぎる

和歌山市 田 中 輝 子

和歌山市 山 口 三 千 子

くたくたに疲れし日あり飯の世や

構想を練る流木の身の果ての

霧晴れてふと年齢を意識する

寒菊も精一杯に咲いて冬

和歌山市 宮 口 克 子

衿巻きにしたい毛並のいい毛虫

友達だ いつか爆発する日まで

捨てるには惜しい子猫のテレカード

湯煙の向こう美人だなあきみも

和歌山市 桜 井 千 秀

傷ついた翼を癒やす独り部屋

もういいよー呼んでいるのはかくれんぼ

鼈甲のメガネと誰も気付かない

チャンスの芽相手のエラーから伸びる

和歌山市 玉 井 豊 太

細やかな気性でこちら困ります

紅葉谷 陽気がさそう秋の列

巻き添えはご免自分の道を行く

思いやりお地蔵さんに花と水

和歌山市 細 川 稚 代

向う岸素敵な顔が多すぎる

焼いもの笛なつかしく黄昏れる

一生を名脇役の碑を拝む

ふんざりがついて駆けてく枯葉道

幸運の女神微笑んではくれず

虚勢張る夫の背も丸くなり

兄に乳房ふくませている今朝の夢

職場から今日のお酒のアテを聞く

和歌山市 榎 原 公 子

洗顔の水がはじける朝の音

掛けるたび老けてる美容院の椅子

老齡の村こまやかに花畑

利用価値あつて方向定まらず

海南市 三 宅 保 州

人は皆天賦の靴を履いている

運命は書かれていない余命表

上機嫌すぎる私を持て余す

いつもの席にいつもの人が居る安堵

大阪市 渡 部 さと美

共に好き動のうま良し静のうし

新春に鯛の目つくめでたさよ

生まれるのは男の子ですおせっかい

予定日へいっち待ってるお腹の子

大阪市 神 夏 磯 典 子

初暦 丑のよだれを忘れずに

孫からの賀状は夢がこぼれそう

一日が短い余生時間割

残り火を掻き集めよと冬トマト

大阪市 本間 満津子

しょうもないことでも言えるので家族
にんにくを使い慣れると欠かせない
体内にライバルが居て追いつけず
反芻癖いらんことまで思い出す

大阪市 川端 一步

歳月を語る無念の孤児の詩
読書週間 水上勉の雪三景
再就職カラカラ笑う人となる
妻病抜けたか電話声高し

大阪市 津守 柳伸

天職の誇り六十路の作業服
石橋を叩き大地と通じ合う
やるだけはやった明日が軽くなる
物忘れびつしり埋めるカレンダー

大阪市 辻川 慶子

コーヒーを抹茶に替えて古都の秋
秋が好き今頃が好き御堂筋
衣替え探し通して日が暮れる
開運の方角に来て恙無し

大阪市 清水 絹子

あわや遭難みやげ話に花が咲く
お見舞いの帰りと云えず見舞う午後
孫のおゆうぎ末はブリマと母と姑
清盛の墓は知らねど巖島

大阪市 寺井 東雲

上空を飛んでも知人氣に懸る
茶髪にピアス注射痛い泣いている
競馬場寒さで爛が追いつかず
くすぐりがセクハラになる恐ろしさ

大阪市 北 勝美

寝そべって反芻の牧場春のどか
闘牛の角は引き際知っている
小春日に埋める球根春の夢
未だ齢を意識している不仕合せ

大阪市 町田 達子

芸術の秋です裸婦もまつられる
銀河鉄道の話などする御先祖と
野仏も秋を着ている奥嵯峨野
終章を飾る落ち葉のうらおもて

大阪市 河井 庸佑

こだわったばかり掌中の珠落とす
深追いはせず諦めが身を守る
遠慮過ぎ相手の気持悪くする
折角の好意は受けるのも礼儀

大阪市 川原 章久

新しい息子の城に別の味
新所帯 何をさしても試運転
ゴミ袋下げて息子が降りる朝
紅い灯は別の元気が湧く泉

銀閣寺幻に酔う初春の釜

高槻市 芦田静江

郷里に帰りたい日の兵馬俑

黒好きな女心のダイエツト

老いらくの恋 海鳴りは聞えない

茨木市 藤井正雄

お願いと書いてはあるがべからず調

里帰り夫は祖父と岩魚釣り

医薬分業院外処方茶をよばれ

ちゃん付けで母が呼ばれている法事

茨木市 堀良江

茶髪金髪とても外人にはなれぬ

見て育つ親の背中の中の見当らず

おみくじを見せ合いながら枯山水

遠めがね向こうの岸はまだ見えぬ

枚方市 八田敏

口論も忘れた妻の車椅子

同病と励まし合ってる車椅子

ゆずかりん 熟れてわが家の小さい秋

年賀出す友またも減る淋しさよ

枚方市 二宮山久

紅葉も今が見頃と夫婦旅

我が家の家計見てきた靴のへり

嫁がせてようやく慣れた我が暮らし

我が社には不況を知らぬ旅仕事

雨風の凌げる軒にありがたい

時に叱られ時に優しくありがたし

未年ばかり四人の小旅行

檜山の予約はとうに出来ている

寝屋川市 太田藍子

したい事一杯画いて初春の夢

母さんがF A宣言したものの

家中でピッピピッピと朝の膳

十二月あれもこれもへ目をつぶる

寝屋川市 平松かすみ

ときめきが図柄になっておめでとう

四十年 楷書の好きさひとと居る

バスタオルもう離さない女の子

子の節目 夫も節目ががんばろう

寝屋川市 籠島恵子

若いって上着の裾をなびかせる

夫より気が合う息子との会話

天気予報 毎日母に聞いて出る

深夜のバイトあつからかんでいる救い

寝屋川市 後藤黎之助

夕映えのすすきに想う故郷の母

同窓会割れてたかけらつぎ合せ

分け前に視線鋭い子供たち

雲の流れ早くなつたと古希の秋

一年の計 招福の壺に盛る

初詣でだけは欠かさぬ無神論

夕焼け小焼け明日は胃カメラ飲む蛙

副賞に自信を少しだけ貰う

雪だより北の国から孫の声

無人駅 切符記念に旅たのし

あんまりな値を付け松茸萎びてる

皆までは言うなど我慢目で教え

快晴の間近にみゆる淡路島(和歌山、すさみ温泉旅行吟)

陽の照らす三色にみる海の碧

すばらしい朝日拝する海の宿

ケセラセラもうあせらない老いふたり

私を拒否する海の鉛色

斥候のクラス夜明けに一羽二羽

被害地の主よいずこに草茫々

新米の香りに母は手を合わす

金婚に新婚旅行と同じ宿

米持参当時は戦後国貧し

冬の使者 寒を氣遣う娘の手紙

カラオケ嫌い麦と兵隊うたわされ

摂津市 井上源一

交野市 福崎しげお

東大阪市 安永暁子

吹田市 瀬戸まさよ

吹田市 茂見よ志子

豊中市 三宅つえ子

豊中市 松岡久留美

豊中市 湯浅馬洗

豊中市 稲葉眞郎

箕面市 椎江清芳

ジンベエ鯨に誘われてゆく海の底

病院の梯子で過ごす日がつづく

車椅子昔を拾う銀杏の実

おとめ餅 胸に抱えて車椅子

晩秋の空にロマンが甦る

嫌な予感当ったように計報聞く

あれこれと苦労重ねた欠け茶碗

父母連れて出湯の里へ今日の幸

銅牛の背を撫で願え大山寺

喜寿の春近くて遠い坂の上

まさかからもしやに変わる深夜ベル

自らのいびきに覚める寝正月

熔岩から流人が出そう三宅島

秋の盆終りおでんも肉が出る

議員選挙よう判らんと言うて書く

咲いた小菊色とりどりに話し合い

フルムーン夫婦の錆が少し取れ

除夜の鐘 蕎麦屋は湯気の中で聞き

金婚の旅の切符は妻が持ち

お若いの世辞に鏡は妥協せず

池田市 岡本 吉太郎
我が国土広い狭いと言わぬ世に

ドラマ見て泣いて笑ってすこす老い
義理故にしぶしぶ買った株上がる
何事も神の試練とすまず女

池田市 藤井 計光
柿の木は人の欲ばり戒める

蠟梅の香り港に似つかない
胡蝶蘭セカンドライフに花を添え
七色の宝石ばらまくにしき鯉

八尾市 生嶋 ますみ

ぶらんこの取り合いをして仲良しに
信じ合い午後のくつろぎ柿をむく

大輪の菊 賞の札つけ疲れぎみ
大阪に着きホッとするだしの色

堺市 柿花 紀美女

孫嫁ぐ手にぬくもりがまだ残り

八十歳未知の世界がまだ続き
自分史の節目節目に母がいる
茶どころへ嫁った娘今年も新茶着く

堺市 吉本 菁風

酒やめてメニュー通りの汗を出し

雪つりを終えて賀状を投函し

秋深し里へと牛が降りて来る

親切に手足が付いていて困り

堺市 近藤 豊子
もみじ葉を手紙のように児とひろう

ひろわれて犬はだんだん犬らしく
なまえさえ蚊帳吊ぐさのなつかしさ
かやつりぐさ蚊帳のかたち捨てらるる

堺市 黒田 真砂
彼岸まで後わずかなり草の露
友が皆上達して絵面展

菊盛り庭に出る楽しみがふえ
傘干して今日の戦を振り返る

堺市 一瀬 福一

平凡で水着が似合う夏がよい
平凡で美貌をもたぬ妻でよし

にくからぬ御方と一寸火傷する
平凡な女が隠す株の怪我

藤井寺市 福元 みのる

酌まずには居れぬ嬉しい日が続く

写真嫌いな人の谷間でそつと立ち

加熱処理せねばならない本溜まる

動く書齋 大阪往復の電車

羽曳野市 吉川 寿美

五線譜をはみ出す孫たちの青春

生きてゆく証に靴を光らせる

原点から出直す旅へ駅舎の灯

終着はわからぬままの一里塚

羽曳野市 酒 井 一 壺

孫からのトルコ人形愛らしい
おみやげ屋今はカラオケ喫茶です
旅費よりも土産の方が高くつき
長逗留するに貧相な土産物

河内長野市 植 村 喜 代

文句言うのに有難うは言えず
三日月が雨を降らせて雲に入り
病院で半年過ぎたカレンダー
好きなこととしてまだ好きに生きたがる

岸和田市 芳 地 狸 村

大受けの金の茶室の秀吉展(秀吉展 二句)
三献のお茶で三成認められ
口喧嘩しながら添って金婚式
閑空を視野に句づくりペン走る(サンヒル阪南)

岸和田市 寺 田 甚 一

余韻囁々風邪がなかなか治らない
ワンテンポ遅れ意見を言ひそびれ
多数決の仲間入りして波静か
くもり硝子の中に温もる家がある

岸和田市 藪 野 けい子

昼下がり喉元冷やす生ビール(ビール工場見学)
食べ初めの茹でだこ側に笑顔抱く
ジンスに右足から出ておちつかず
後味悪い相談にかりだされ

貝塚市 池 田 寿美子

「道行き」の柝の音あらたに大向う
プロセスを大事に明日を生き延びる
反応がピカッと光る面白さ
イースター島のモアイもあすの夜明け待つ

大阪府 榎 山 隆 盛

三箇日せめて和服の妻でおれ
信州の風土をこねるおらが蕎麦
マルクスにおぼれた頃の安い酒
幕尻で力の萎えを意識する

伊丹市 山 崎 君 子

一期一会 哀しいことば亡夫の忌
丑年はあの亡子の年よひとつ星
堀越えて小菊の笑顔春日和
冬の蝶明るい畑知っている

伊丹市 小 熊 江 美

やすらかな老母の寝顔に安堵する
満月としみじみ見合す露天風呂
ばかりと老母に逝かれた気のゆるみ
コーラスでストレス発散しています

尼崎市 春 城 年 代

菊日和 飽くことのない米の飯
とめどない話で温い冬の部屋
赤の似合うお年寄りには目をそらす
身のほとり悲しみごとが湧くように

西宮市 林 はつ 絵

元旦はえこひいきなくやってくる
立ち向う相手のあくび見てしまふ
仏だんを心の中に置いている
教え子も余生自作の碗もらう

西宮市 西 口 いわゑ

落日へ神も仏も無の時刻
菊を着て太閤さんの艶を増す
嘘という空間にいる大悪人
うとうとと思い出行きのバスにのる

西宮市 秋 元 て る

そのあげく白票投じねこじやらし
河川敷の運動会よ村総出
磨かれた木目昔を話し出す
精いっぱい生きたと言える日のために

西宮市 亀 岡 哲 子

手を繋ぐこの子秋の子手がさみし
蜂蜜の凍え掬って今朝の秋
試飲するクレオパトラも飲んだお茶
母ゆえに子の青春をいとおしむ

西宮市 菊 池 トミエ

ハーブ園 説明いらぬ良い香り
極上の茶も用意して客を待つ
そばを打つ母はめん棒大切に
柿の赤 霜をもらって艶やかに

西宮市 久 保 まさお

こおろぎも家にお入り今朝の寒
急ぐ姿小さくなりぬ冬迫る
仰ぎ見る全山紅葉老師亡く
スロースロー二人の時差が遠くなる

西宮市 牧 渕 富喜子

充電の赤いランプは消えている
花束の花粉が付いてリァリスト
代理人書くべきものが多過ぎる
秋は足速見切り発車が多くなる

西宮市 刈 田 泰 司

運不運 蕾のままで落ちる花
壁の絵に惹かれて通う小さな店
色眼鏡外してごらん春が来る
運のない男強がりばかり言う

西宮市 池 田 善 守

青空に雲一つない初詣で
初詣でラッシュアワウの力出し
気は二十歳 無理をするなど足は言う
困ったと笑顔でうける孫の無理

芦屋市 黒 田 能 子

願ってた通りに晴れた旅の朝
マンボウのぼっかり見てる飛行船
あの当時から美しい人だった
母さんが知っていたわたしの秘密

宝塚市 嵯峨根 保子

確かめに来た保険屋のお線香
お土産の由来を先に読みはじめ

鎮魂の遅き涙を知覧にて
国臣の句碑の如くに桜島

宝塚市 上田 佳秋

天国の妻から届く離婚状

有馬記念僕の一年過ぎて行く

水割りのグラスと謀叛考える

降圧剤忘れて酒を酌んでいる

宝塚市 中田 純次

神無月われも空から出雲路へ

瞑想の枯山水に水の音

丸髻の姿立派にみえた母

冬近し妻と茶の間の模様がえ

川西市 松本 ただし

日本の夜明け銅鐸鳴り出す

煽てたと解つていても浮く話

現実と離れて遠き億と兆

木枯しに一円玉がふつと浮く

神戸市 山口 美穂

ひとり言 首をかき上げて犬がきく

折り紙の鶴 翔びたいと空をみる

影法師も六十歳の歩きよう

蓑虫がそつと顔出す秋日和

姫路市 古川 奮水

ペンだこもむかし話になっている
旧友の電話か声も俺お前

やっぱりの話に酒が増えそうだと
しばらくと地球の裏に話する

相生市 中塚 礎石

奥さんに軽い気持ちで握手する

縄のれん軽く一杯だけと言ひ

爪の色ときどき命気にしてる

キッチンの出刃包丁に驚かぬ

鳥取市 前田 一枝

かくれんぼ勝ち負けなしに鬼にされ

ブタ汁を狸汁だとだまされる

脱いで見てこんなところにあるほくろ

手紙なら隠したいこと包みこむ

鳥取市 春木 圭一郎

猛牛となつて今年はおあはれるぞ

わが会は牛のよだれでは困る

初売りに牛牛牛の絵があふれ

買状からのつそり牛が動き出す

鳥取市 岩原 喬水

歳とらぬ秘訣辞書には書いてない

ブライドが落ちてる財布拾わせぬ

鐘の音にああ友が逝く友が逝く

煩惱がまだ老骨に燃え残る

鳥取市 杉本孝男

白い歯が自慢の妻でよく笑う
仕事には弱いが美人には強い
男ならドラマを作る風吹かす
精根を使い果たして己知る

米子市 鷲見正子

元旦の酒に一番実がある
わたくしが瘦せたと遠い子が気付く
だんだんと男の顔で遠くなる
美しい嘘を選挙の度に聞く

倉吉市 松本よしえ

懐にかんしゃく玉を持っている
釦穴くたびれている夏のシャツ
狸かも知れぬ男と手をつなぐ
ささにしきしか食べないと言うおうち

米子市 青戸田鶴

仏の目に怠惰な私叱られる
山脈をじつと見つめるやさしい瞳
まだ夫と初日拌める有難さ
重い荷をひととき忘れさせる旅

倉吉市 野口節子

心情を吐けば木石まで揺れる
母さんを語ると春の陽がのぞく
風船のようにふくれた孫愛し
矢印が倒れ人生狂わせた

米子市 茂理高代

この峠母も越えたと教えられ
この音はどこかで聞いた記憶ある
学歴という踏み台がほしい亀
深い傷背負う支えで外せない

倉吉市 最上和枝

何かある何がなくても酒を呑む
何事も笑って済ます父の腹
美しい花になりたい土筆んぼ
坂登る駕籠を欲しがるなまけもの

米子市 木村春枝

ひっそりと明日が杵から覗いている
ひたむきに生きて黒杵活かしている
噂など梢に干して今日眠る
わたくしに忘れると言う隠れ蓑

米子市 田中亜弥

くせの無い字で元旦と書いてみる
漫画のような暮らしでいつも仲がよい
万物のいとなみ頭から生まれ
針の頭がまがる力をぬいてみる

米子市 永井三津子

花を買う喪は喪喜は喜の顔をして
三十路坂かぼちの馬車がまだ来ない
一本の電話に黒い幕が開く
父が逝く昨日と同じ朝なのに

年ふえて嬉しさびしのお正月
鳥取県 津村 八重子

七草の香りたしかな新春を知る
一日一善ちかい七草いだだこ
年玉の御礼を曾孫いい顔に

鳥取県 土橋 睦子

借景を窓に満足しています

春まではわたくしの愛充電する

おめでとう賀状待たずに電話する

後継ぎが家族制度を変えてゆく

鳥取県 岩崎 みさ江

厳格に響き合うのは難しい

身の内の我と言う鬼に手がかかる

遠吠えがしたくなるよな満月だ

うれし涙もやはりしょっぱい味がする

鳥取県 乾 喜与志

十年目に会うも我が子よ我が娘

生涯の疲れが少し出るころに

卒寿の恋も月に祝福されました

異郷の空よ殊更に月光る

鳥取県 上田 俊路

一を消し二も消し三を考える

図書館を味方に余生まだ磨く

才覚がなく持ち味で世を渡る

背なを押す風が謀反をそそのかす

露地に出し万年青美事に実を結び
鳥取県 林 露杖

山荘のリビング飾る熱帯魚
電話口孫の甘えた声嬉し

老犬は尻尾も振らず吠えもせず

鳥取県 石谷 美恵子

さわやかな嫁のタクトへ皆揃い

男ならこんな過疎には埋もらぬ

実のならぬ花が精いっぱい媚びる

中立でパパは堪えてる板ばさみ

鳥取県 幸家 單車

さわやかな笑顔に福の神も来る

頑固だが女に弱いのが疵だ

異国語に身振り手振りで会話する

演歌には強いがジャズには弱い父

鳥取県 さえき やえ

あの耳かざりもう見られない夕子さん
(不慮の死 夕子さんへ)

投げ返すほどのボールでありません

夫がここに居なかつたらと思う夜

たわいない話におちていく二人

鳥取県 田村 きみ子

本心は暫く伏せてハテナハテナ

美しい文字で男からの便り

うちの大家出したとは面白い

何だろウ女が酒を恋しがる

鳥取県 谷口次男

先生が見えると鉛筆動かない
この胸の邪心くつきりX線
かといってお日様逆に回らない
胸の内満月に告げ慰める

岡山県 小林妻子

コシヒカリお礼の冬耕雨続き
小銭探してカード忘れていた電話
古稀すぎて何を探している眼鏡
後ろへは一步もよらぬ牛歩です

鳥取県 西川和子

追い越せぬ小さくなった母の背を
昼の月仰げば眠くなって来る
耳奥に響く明治の父がいる
石段を上りごりやく期待する

岡山県 山本玉恵

理性一つ守り通した白い骨
思い切りうつを吐かせた影法師
歯ブラシを二つ並べた遠い過去
五体投地まだ耳鳴りはなり止まぬ

鳥取県 黒田くに子

岡山県 池田半仙

哀愁そそるおとこへ母性くすぐられ
哀愁はアルトで歌う子守歌
でこばこの道もあります老いてより
くだらないなやみはよせと陽が昇る

岡山市 井上柳五郎

岡山県 岩道博友

ビーボーを鳴らさず帰る救急車
末席のひとことこわいことを言う
健やかさご祖先 親へ感謝日々
片減りの靴に照る日や曇る日も

倉敷市 小野克枝

岡山県 大石あすなろ

一年を丸く生きよと光る餅
熟年へ牛歩焦らずへこたれず
一本の思想貫く父の川
生きて行く結婚記念日など無くし

母の癖をつくりついで苦勞性
べっぴんさんに男の捻子がゆるくなる
野仏と内緒ないしよの赤トンボ
みかんむく手がふれ合うた置炬燵

岡山県 福原悦子

夜しらじら母の戦の水の音
半音を下げて夫婦の丸い部屋
愛情が半端で花が枯れていく
紅絹裏に亡母の泣き追っている

岡山県 江口有一朗

初光浴びて八十路の春祝う
年頭の客へ八十歳の夢
初鏡のぞき今年の初笑い
ゆったりとしっかり大地踏みしめる

出雲市 吉岡きみえ

口数の少ない夫と紅葉見に
赤い羽根つけて胸張る青い空
同意書に男の顔で署名する
去る者が去って身内の笑い声

出雲市 板垣夢酔

父を抱く箱の軽さや骨の壺
酒チビリチビリで蟹の足が消え
ずけずけと言うて表裏の無い男
無理聞いた神への恩が返せない

出雲市 小白金房子

澄みきった空へ選挙の声通す
四つ手網 風情をそえる鮎の里
のんびりと刈田つえば夫婦鳥
最終便頭上さり行く月あかり

出雲市 岸桂子

運命線はめて病友慰める
父と子の一味違う設計図
他人からときどきもらう渋い柿
野仏は何を聞いても他言せず

出雲市 小玉満江

針運ぶ女やさしくなつて秋
寺めぐり故事来歴を聞かされる
ご馳走を前に眼鏡をかけ直し
あきらめが上手になった寡婦の意地

出雲市 石倉芙佐子

野鳩ほろほろ妻を呼んでる春の森
火の海に剣を投げた好きな人
何処から何処へ私行くのかな
娘は遠く海を渡ると聞きもせぬ

島根県 松本文子

千人針が見世物になつてきた
ひとりになつて赤トンボと遊ぶ
気の晴れる言葉聖書から貰う
若者の荒々しくて道をよけ

島根県 佐々木鳳笙

破裂した笑い袋が泣いている
路地裏は何故か秋刀魚の煙が好き
恥じらいを忘れぬひとと小半日
絶景へ帳張りを打つ町はずれ

去年今年川の流れに沿って来る
昭有史で指折り数え七十二
昇る陽と沈む夕陽がアンダンテ
どんぐりの孫がころころ競う庭

竹原市 古谷節夫

大いなる朝揚げ風の二つ三つ
道路開通うちの畑を掠め取り
鶴のみした話も一度かみしめる
処方箋解らぬものを飲んでいる

甘日市 林野甦光

丑年にあやかりのんびり暮したい
月夜よし闇夜またよし二人づれ
名勝地 歴史を売って生活する
十一時三十分孫達のいる上空だ

香川県 成重放任

自家菜園故郷教え子ばかり逢う
出品へ一瞥決まる蕪真白
書くに要り読むに要らない小辞典
文化の日 菊十鉢の誇り詠む

高知県 北川竹萌

高山の靈氣に触れて蘇り

高知県 赤川菊野

機上から見下ろす大地山水画
大地にも棚田が続き風も秋

パスポートこんなところにも日本人

古い二人今夜東京ど真ん中
いろ留袖の妻に夫の方がてれ
銀ブラは止めて窓から見る夜景
東京は怖い早くに帰ろうよ

松山市 丹下美津子

雨あがり新緑に瞳も若返り
誘われた花火に感動まだ覚え
親しげに声かけられて誰だっけ
古い程良いのは物で人じゃない

唐津市 浜本ちよ

落ち栗を探して遠い日を拾う
山茶花ちりちり思いちり秋の風
満ち潮が欲しい夕べの月を見る
メイクドラマ私にはもう縁がない

熊本市 永田俊子

植木鉢並べて花の中に座す
音立てて道路を走る恋木の葉
ヘルシー食 和む女の解放感
近づいて胸の高鳴り意識する

熊本県 岩切康子

広い畑 大地はここぞ靴を脱ぐ
予算額かたんに言うゼロ十二
モーターが唸って釘が打たれたり
生きてやろ十年日記書きはじめ

熊本県 高野宵草

— 43 —

自選集

月原宵明

金井文秋

八十を越すと振り向くことばかり
風呂敷を抱き小走りのひととなる
潔く散る花 未練残す花
ウイルスも噂も撒いてゐるのん気
十年後語る会には興味無し

二十一世紀覗く希望は満たせそう
亡妻へ心残りのフルムーン
居眠りは決めてなかった時間割
動けなくなれば定年小商人
日曜大工するにも齢に拒まれる

正本水客

奥谷弘朗

数えたら五十年をとくにすぎ
陽の当る場所ばかりを歩いてき
背をむける後ろ姿は泣いてない
のんびりと羊いっぴきを数えてる
お地藏さん悟り切った顔でない

川柳に世渡りのコツ教えられ
我が家には輝く妻が居てくれる
栄光の陰にかくれたつらい汗
言葉より汗かく姿子に教え
自分史をゆっくりたどる筆のあと

八木千代

藤村女

笑い残した袋を握りしめてゐる
あやとりの切れ端だけをてのひらに
ほんものの宝は両の掌にあった
握っているものはこの世の種袋
大つづら残せるものは一握り

精一杯生きた命をあたためる
古寺巡礼 塔も私も秋の色
第九を聞くと聖夜に星が降る
振り出しに戻り軽い荷とかえる
新春を迎える障子張り急ぐ

黒川紫香

カタコトと止まらぬ駅で冬の貨車
ころころと落ち葉が転ぶ寒い駅
お別れを交わす相手もない駅
駅長も祝福してるハネムーン
駅からは遠いが古里変わらない

野田素身郎

情けなや六十代で杖が要り
杖ついても墓参の坂が上がれない
初心者の杖はときどき空を切り
杖ついても句会に出たいのかと妻
杖ついても行動半径知れたもの

松川杜的

遠ざかる駅 無言でレールついて来る
散り敷いて山茶花日本地図を描く
東山ずたずたにして京都駅
熱帯魚無心に見てる車椅子
九十四 握れば温い老母の手よ

藤井明朗

紅葉が車窓をたたく奥出雲
生きるだけ暴走族のはぐれ鳥
店頭に晩秋の彩濃ゆくなる
忘年会へ血圧医師に叱られる
新年へしあわせなプラン夢でなし

野村太茂津

膳下丹田気力は満ちる事始め
清濁を分けて明るく見え始め
目標の玉へ真実見えてくる
自己暗示して湧き上がる気力哉
写生する古里の島甦り

恒松町紅

初日の出 抱負は若さまだ負けず
高齢者ですよと胸を張っている
まだ男 整髪料と老斑と
初日の出高齢晩婚拒産症
脚力は弱いが知恵を持っている

遠山可住

どんぐりの夢がころころ冬に入る
何もかも許して花のない季節
気に入った服へこれからダイエット
漢方薬選り分けて来た恐ろしさ
雪降れば酒花咲けば酒いい友だ

小林由多香

刈るほどもない髪床屋念を入れ
百円のさんまが膳に横たわる
飼いだにまで吠えられて陽が沈む
督促のがきが吹雪の中を来た
リストラへ栄えたころの夢があり

高杉鬼遊

波多野五楽庵

貴婦人の帽子はいつもお正月
子の声が弾けて光る春休み
銀行が転んでからは腹に巻き
消費税ものを買わない癖がつき
毎日がいのち三年日記買う

小出智子

小西雄々

雲が行くつらい季節はすぐ過ぎる
狙の上というのはギャグでない
葉書さえ書かず十二月を迎え
言葉などいらぬ銀杏舞っている
女という恥じらいは捨てていない

西田柳宏子

河内天笑

火気厳禁くわえ煙草で指図する
公園の隅に目立たず老いの席
怖さより眠気に負けたお留守番
渋滞の外車へ自転車投げキッス
貴抜けて五人で団子レースする

辻白溪子

橘高薫風

バイキング二度目を皿へ盛りに立つ
トンネルを出て海岸に沿い曲る
口軽い嫁で近所のうけがよい
舟つなぐ綱は男の力借る
ちぎれ雲 富士が気に入り離れない

運不運すべては神のおぼしめし
薄墨で書くと涙が洩れて来る
見せかけの演技を風に見抜かれる
バイロンもハイネも酔って寝てしま
また後でなど含みのある言葉
夾竹桃へ澄んだ胸中あたえよう
冷静なハートを乱し季が巡る
遠くから狼煙を上げて人を恋う
ピエロにはなれず酒量も上がらない
喪の葉書今日も届いた師走風
火を畏れ火を恐がらぬ氏子中
水瓶に溜めた童話を手で掬う
木の精が僕を時々呼び止める
金にとり憑かれた人を見ておこ
紙芝居の拍子木を恋う土の道
元旦の母なる川は朱金の帯
巡る忌や師は不死鳥と号されし
鷲峰に三日月天と地は豊か（鹿野にて）
母さんは一か八かが大嫌い
手をつなぐことのかなわぬ雪だるま（匠とみのり）

あけましておめでとうございます

川 柳 塔 社

主 幹
理 事 長
副 主 幹
副 理 事 長
常 任 理 事

西 口	高 須 賀	田 中	河 内	奥 田	岩 佐	板 尾	河 内	小 出	橘 高
い わ ゑ	金 太	正 坊	月 子	み つ 子	ダ ン 吉	岳 人	天 笑	智 子	薫 風

吉 岡	山 本	山 下	宮 西	宮 崎	西 出	宮 口
美 房	希 久 子	美 津 留	弥 生	シ マ 子	楓 楽	笛 生

川柳塔社常任理事会

大空の、い、ろ

(72)

橘 高 薫 風

この頃の編集部の顔触れを見ると雑誌の充実した成果も頷ける。それで今一篇川村花菱「人と芸術」(川柳と俳句についての「考察」)なるエッセイを転載する。

つくづく口惜いと思う事、しみじみ残念だと思ふことがある。茲に言おうとする事は、柳樽にも武玉川にも句主の名前がないことだ。何故そんな事を考えるか、それについていさ、か自分の考えを申し上げて見たいと思ふ。

古池や蛙飛び込む水の音

ただけあって、もしこの作句者の名が無かったら此の句を禅味なりとし、あるいは平凡なものであるとして、甲乙互に論じ合うことがあるだろうか。

一つずつ蛙を仕舞う水の音

柳樽にこの句があるが、これこそ、芭蕉の古池やの句を川柳式に表現したもので、パロデーとしての興味だけは感じるが、それ以外にこの句独自の価値について論ずるものは一人もないと言ふ事も出来る。

芭蕉の句、一茶の句、蕪村の句、そこに名

句もあろうが駄句もある。然しそれぞれの俳人が詠み来った数千数万の句をひとまとめにして考える時に、批評家は必らずその俳人と俳句とを同時に考えているのである。作者を離れてその句だけを考えることをしない所に俳聖芭蕉の評論があり、一茶蕪村の評価が出来るのである。俳人そのものの人物、性行、逸話、即ちその人それぞれの生活全体を考へて見るところに、単なる十七字詩がその背景の力に由つて、更に多くのぬうちをもつて考えられ十七字のよき、うまさ、引いてその俳人の人格をも引上げたところもある。人と芸術の問題が俳句ほど密接に考えられ論じられるものは無い。

俳人が行脚する場合、その句とその俳人の性行人物にあくがれるものは、さながら名僧の来たようにこれをむかえ、これに会い、これと語ることを精神生活の上にとだけ多くの歎びを感じるか分らないのであるが、句だけ残して名を残さなかった川柳詩人・柳樽の投句者が行脚したとすれば、恐らく一市井の

皮肉屋が来た位に考えて、これに慕い寄るものがはたして幾人あったであらうか。

柳樽の句主、武玉川の句主には、必ず幾多の俳人に優るべき人々があつたにちがいない。

何故柳樽の句主、武玉川の句主は自己の名を表わす事をさけたのかと私は残念に思つものである。が、そこに又川柳詩人の心境もつかがいづくす所もある。川柳詩人が一つの洒落者であつた所にも、自分の名を売ろうとする事を避けたのであろう。あまりに平俗な詩形は、素人にも川柳が詠め、いやになればすぐ止めるという江戸者の独特な気軽さが、遂に川柳を心のなぐさみにした点もあろう。ねばり強さ、やりとげなければ止まないという辛抱強さの欠乏が俳句に比べて川柳の弱さであるとも考えられる。無責任な放言に等しい人生批評に対して、特に名を秘したという心持ちもあつたのかも知れない。いずれにしても川柳が、人と芸術の問題から離れて残つたという所に、作品そのものの価値が非常に低く考えられるうらみがある。

「伝湯浅又兵衛」と言うよりも明かに作者が知れている画の方が、大衆には安心され信仰されるように、あの人の句か、あの句をよんだ人はあの人かと、作と人を並べ考える所にその句が更に味われ、その人が更にした

われる事は事実である。柳樽に連なる多くの句の中には、あるいは此の句は此の句を作った人の句ではあるまいかと考えられるものがある。人生に対する見方、考え方、そこに同じ態度と同じ焦点とをねらっているものを見出す事がある。一つの名句に対する作者への信頼は、他の平凡な句に対しても一つの信頼と親切とを持って研究しようとする。此の句のよめる人ならと、更に同じ句主の句を探し、たずねる心持ちもある。

川柳が人と芸術を離れて考えられなかったとしたら、今日まで幾多の川柳詩人の評伝が残り、そこに人生批評家としての詩人の生命は永久に生きて行かれたらう。

詩人が人か、人か芸術かを考える時に、私は先ず作品よりもその人を多く考え深くながめようとする。芸術はその作者の人の問題だと考える。作品のみ残されて、その人の知れないという事が、川柳を一般から軽く見すこされた所以である。

作者に対する信頼は、その作者の試みに対して吾々は厚意と親切とを以て対して行く。無名の作者が同じ試みをなした場合、吾々はそれを何と考えるか。

画に落款があつてはじめてそれが完成した作品であるように、俳句の下に句主の名があ

つてはじめてその句が独立する。川柳に句主があつたら、柳樽、武玉川に対する信頼は実に百倍の力があつたらうと思われる。

よき句を作れ、しかして作家は自己の名を公表する点に於て充分の責任を持ち、更に深く、更に大きく、自己の人間をきづき上げなければならぬと考える。川柳愛好者は人を見、作を味わい、更に一層の信仰をそこに持つ事が出来るだろう。

かりそめに歌い残した端唄小唄のそのように、川柳をよみ捨てたという所に川柳詩人そのものの意義があるのかも知れないが、反対に、そこに又川柳が俳句と同列の品格を保つて、後世に残らなかつたらうらみもある。

はたしていづれが川柳として正しい道であつたであらうか。私はこれをもつと考えて見たいと思つ。

明治大正を通じて、川柳は最早や研究時代を過ぎて作品の時代に来ているのではないか。過渡期はすぎて現代川柳の完成に近づけば秋に来ているのではあるまいか。

川柳の水平運動は、幾多の人々によつてしばしば考えられ企てられた事であるが、作と人との問題について、川柳と俳句を並び考えられたものはないような心持がする。

私は昔の柳樽、武玉川を読む事だけ知つて

いて、これを研究する道を知らない。その道の先輩が、もし柳樽武玉川からその句主をたずねさがす事をしてくれたら、幾多の川柳詩人は、茲にはじめてよみがえり川柳に対する一般の信仰は改めて大きなものになるだろう。此間、武玉川八篇の中から、十七字の川柳をさがして評釈して見ると三太郎に言われ、私は又武玉川を読んだ。

野慕と云う字が今よめて夢枕という句にぶつかつて私は胸をうたれた。涙が出て来た。何と言う奥床しい静かな境地だろう。何と言う悟り切つた心、澄み渡つた人であらうと考えた。

此の句に句主の名があつたら、私はこの句主の名を更にたずねて、もつともつと教えを乞う様になつたらう。一つの作品に打たれた私は同じ作家の作品を更に更に読みあさつて、もつともつと深くその人の心を知ろうとするだろう。柳樽の句、武玉川の句、打たれても、驚いても、私は再びこの作者の胸にふれる道がないのを悲しむ。

現代の川柳詩人も、人と芸術の意義をもつと考えて、よき句を詠み、その句から吾々がその人をたずねさがすような心持ちにしてくられたら、川柳はもつとよくなつて行くのではあるまいか。

同人特集

私の一句

源流に一筋の滝名も知らず
 背囊じやないぞリュックを背負っている
 根性と共に薄らぐ記憶力
 心して生きよう予備のない生命
 三里の灸効いて残り火掻き立てる
 捨てられた処で薔薇は紅くなる
 櫛風沐雨あれは昔のちちとはは
 もしかして妻はみ仏かも知れぬ
 赤い帽子の欲しいシナリオ持っている
 退職の花道善意に包まれて
 生き延びたいのちへ貝になどならぬ
 躓いた一步情けの風が押す
 屈託のない耳を俵せだと思ひ
 身の不安夫がっちり受け止める
 まるく丸く納めて帰す母の知恵

豊中市	豊中市	大阪市	大阪市	呉市	大阪市	和歌山市	和歌山市	大阪市	米子市	大阪市	今治市	出雲市	大阪市	大阪市	大阪市
橘	田	井	横	川	川	川	川	榊	小	西	越	園	上	北	鈴
高	中	上	田	原	上	上	上	本	西	田	智	山	江	野	木
薫	正	白	英	章	大	富	富	落	雄	柳	一	多	勝	久	節
風	坊	峰	詩	久	輪	湖	児	々	々	子	水	子	子	子	子



たたんであったとおり畳んでおく形見
 掘って見ようぬるま湯ぐらい湧くだろう
 無知でよし老母には母の海がある
 生かされて折々使うありがとう
 寒風にみみずくの耳つめたかろ
 ここからが春ゆつくりと珈琲飲む
 裏町を歩いて知った父の酒
 探してる物をときどき考える
 往事茫々とんぼと昔話する
 網棚の過去が時どき落ちてくる
 四国路に遍路の笠が揺れて初春
 縄文も弥生もほんの昨日かも
 川柳を杖に余生の歩を運ぶ
 故人にも来ました選挙依頼状
 長生きを邪魔にされない親になる
 背伸びした杭と知ってか無視される
 蜘蛛の糸もつれています阿弥陀さま
 抜けるぬけるアートネーチャーだけ味方
 何くそのこぶしが可能にしてくれる

大阪市	奈良市	和歌山市	鳥取県	鳥取市	寝屋川市	高槻市	和歌山市	香川県	香川県	弘前市	京都府	八尾市	東大阪市	吹田市	鳥取県	五所川原市	米子市	大阪市
北	天	桜	羽	岩	北	川	池	工	木	波	稻	宮	森	栗	黒	加	石	小
	正	井	津	原	田	島	永	藤	村	多	葉	西	下	谷	田	藤	垣	出
勝	千	千	公	喬	綾	諷	正	吟	あ	五	冬	弥	愛	春	く	彩	花	智
美	梢	秀	乃	水	子	児	匍	笑	き	楽	葉	生	論	子	に	人	子	子



帰る灯が待つから遠い道も好き
孫と住み鳴らぬ時計と掛け替える
素晴らしき老熟が逝く目が潤み
流れ雲忘れ上手になりました
銀河仰ぐ父の両手が肩にくる
往事茫々万朶の桜未だ枯れず
小さな手の温もり明日の命なり
鯉の町雨に泣いてる紙人形
喜怒哀樂きようは喜びだけとする
はんなりと和紙に萌えたつ春和菓子
長い眼で見てろと子から便り来る
花束のようにひい孫渡される
いくつものタブーと揺れる絵馬の数
地獄極樂生きているからあるのです
跡取りへ千年杉を見せておく
散華する約束だった飛行雲
一夜干し淋しがりやの眼をしてる
八十の手垢の中の白と黒
サファイア婚一つのみかん半分こ

岡山県	富山市	和歌山市	岡山県	茨木市	豊中市	芦屋市	出雲市	岡山県	京都市	廿日市市	岡山県	大阪市	大阪市	松原市	和歌山市	大阪市	川西市	豊中市
岩道	酒井	野村	矢内	藤井	井上	黒田	小玉	大石	都倉	林野	二宗	津守	金井	小池	青枝	正本	松本	滝北
博友	輝	太茂	寿恵	正雄	直次	能子	満江	あすなろ	求芽	魁光	吟平	柳伸	文秋	しげお	鉄治	水客	ただし	博史



直線にうけとる愛が美しい
浮雲の一つに欲しい僕の椅子

金木犀にあすを重ねているいのち

変換キーあつと言うまに消えちゃった

愕然と定期の齢をみつめたり

鱗一枚はがせば涙溢れそう

あれが孫チユンチユンワールド指差して

時々はさからいながら流されよう

修羅越えて雪のぬくもり抱きしめる

満月に翔べぬ女の古い枷

子に乗せたドロ船ながら渡りきり

ピリ走る根気に拍手惜しまない

泣くまいと土壇場へきて頼濡らす

振向けば妻だけが居る人生譜

一発の銃弾が消す蜃気楼

忘れたい話にまたも触れてくる

渡り鳥虹の向こうを知っている

おもいとどかぬ女の指が豆をむく

狂い咲く桜の如き恋したし

岸和田市

竹原市

貝塚市

美祢市

松原市

弘前市

寝屋川市

米子市

青森県

出雲市

岡山市

尼崎市

吹田市

岡山県

米子市

大阪市

寝屋川市

大阪市

奈良市

芳地 狸村

時広 一路

池田 寿美子

安平次 弘道

玉置 重人

一戸 ツネ

平松 かすみ

青戸 田鶴

諏訪 柳々

石倉 芙佐子

時末 一灯

黒川 紫香

茂見 よ志子

荻野 鮫虎狼

驚見 正子

河井 庸佑

堀江 光子

大塚 節子

宮口 笛生



鯉のぼり総身だらり五月病
嫁がせた娘が背負う妻の味

余命表相手にとって不足なし

どんな風吹こうとこの手放さない

無駄のようでもあちこちと美術館

笛吹けどみなそれぞれにある都合

必要な太さと思う象の足

欲の雲払えば心青い空

余命表また塗り替えて年新た

箸持てるまでに快復した生命

俱会一処川柳塔の笑い声(高野山参拝)

五年前助けた鶴を待っている

夢にみた初孫嫁がくれるという

主流から逸れて遠くを見るゆとり

許し合う形に置いた箸茶碗

うっふっふおでことおでこつつんこ

百本の寡黙なばらに口説かれる

止り木に僕のポリシー置いてくる

招待席見慣れた美人連れている

豊中市

枚方市

海南市

八尾市

大阪市

寝屋川市

寝屋川市

大阪市

堺市

香川県

倉敷市

鳥取市

出雲市

富田林市

羽曳野市

和歌山市

摂津市

宝塚市

大阪市

湯浅馬洗

二宮山久

三宅保州

吉村一風

町田達子

後藤黎之助

江口度

本間満津子

黒田真砂

池内かおり

田辺炎六

春木圭一郎

富田蘭水

片岡智恵子

吉川寿美

宮口克子

井上源一

上田佳秋

清水利武



胃ぐすりを飲んでコーヒー欠かさない
よばよばがおしゃれしてはる偉いなあ

ありがとう今日の命に化粧する

ぼんぼんのセンスで老舗甦る

倅せになろう指輪もそう誓い

まだ野心あるから靴の手入れする

きさらぎの月の凄さよポストまで

ひとりには一人の音で日が暮れる

落葉道歩くと足が温かい

命はじけて輪廻知ってる鳳仙花

二代目が遠洋に出る波しぶき

退院後は一緒に旅行約束し

わがままに暮せていいね他人様

胸を借り胸を出してはいけません

修復の窓辺に花を置く安堵

きさらぎの猫丹念に顔洗う

空の未知あしたの未知へ芽が覗く

雪椿女やさしく恐ろしい

ときめいた昨日が耳を出てゆかぬ

高石市

箕面市

寝屋川市

西宮市

竹原市

尼崎市

尼崎市

高知県

大阪市

熊本市

竹原市

柳井市

八尾市

鳥取市

西宮市

富山市

兵庫県

唐津市

米子市

浅

岩

柴

亀

森

春

春

赤

辻

永

古

弘

高

武

菊

舟

遠

久

澤

野

津

田

岡

井

城

城

年

菊

川

川

慶

田

節

杉

千

帆

池

渡

房子

ようじ

英壬子

哲子

菁居

武庫坊

年代

野

子

子

夫

慶

柳

千

雀

トミエ

花

住

春



人は人戦盲らしく生きていく
折れぬよう支えながらに夫婦箸
花びらのような月見る海の家
人知れず散った桜も美しい
遣り遂げた汗に大きな日が沈む
紙袋少し油断が入ってる
ことごと煮るから母の味になる
出張のように宇宙に発って行く
残された時の限りを惟みる
風上へヨットが走る物理学
この坂を登る気力は失わぬ
父の日の盃何故かほろ苦い
雪踏んで出稼ぎの父点となる
いきいきと今朝も露踏む草むしり
酒やめてからの話が水臭い
夢のごと二人で登るダイヤ婚
戦列を離れひもじさ増してくる
人間の眼になって熊立ち上がる
噛みしめるいのち寿ぐけさの春

島根県	島根県	伊丹市	岸和田市	堺市	大阪市	今治市	横浜市	鳥取県	島根県	島根県	島根県	岸和田市	富田林市	西条市	倉吉市	和歌山市	弘前市	弘前市
堀江	堀江	山崎	高須賀	山本	神夏磯	月原	菱田	小林	小砂	藤原	石田	田中	和田	片上	奥谷	山田	佐治	岡本
正朗	芳子	君子	金太	半銭	典子	宵明	満秋	露杖	白汀	鈴江	清泉	文時	維久子	明水	弘朗	高夫	千加子	花匠



よく回る口で言えないありがとう
 春のオリオン片方だけのイヤリング
 喝采のうしろの声を聴いている
 親譲り馬鹿正直と言う宝
 昔はむかし潔く弓外す
 吹雪とも妻のこの手を放すまじ
 誇るもの無いからせめて尊厳死
 八月の雲よ勲章とは何ぞ
 一生の不作とときに思い合い
 同じ場に二度立ち旅の厚味知る
 母乳吞むまるで太鼓を打つように
 地平線までコツコツ種をまいている
 洗いたてのカーテン風も洗いたて
 議論白熱クロワッサンが売り切れる
 冬の絵を燃やす煙をほっと見る
 年輪の節目ふし目にある慕情
 爪に火をともした母の形見分け
 お互いに一人になった時のこと
 土の香を宝と思う歳になる

八尾市	河内長野市	奈良市	出雲市	西宮市	和歌山市	豊中市	米子市	米子市	岡山県	岡山市	岡山市	岡山県	和歌山市	青森県	米子市	和歌山市	堺市	和歌山市
山下	植村	吉田	久谷	林	榎原	吉田	田中	政岡	江口	井上	小林	堀端	西谷	光井	細川	門谷	一瀬	福本
美津留	喜代	笑女	まこと	はつ絵	公子	あずき	亜弥	日枝子	有一郎	柳五郎	妻子	三男	大吾	玲子	稚代	たず子	福一	英子



悔いはなし自らの円好きに生き
久びさに逢うて優しい人やさし
花柄に染める六十歳の夢
繁盛に母刀自おわす奥座敷
野心捨て風にゆれてる野の一樹
長生きをしたくば笑う方がいい
手をつなぐ程老いていず若くなく
カラオケに行つて酒だけ飲んで去に
十二月八日の喝采が侵略に
湧き水を辿つてゆけば神の森
おん目許おんやわらかき仏たち
一人でも笑えるけいこしています
完全燃焼いいえ微力のありつたけ
思ひ出はみな美しい罪までも
寒木瓜が幼児の爪のように咲き
八起き目もやっぱり妻の手を借りる
春間近信頼に足る露の臺
樹を揺らす一人ひとりに空がある
感情を透き通らせる桜シャワー

吹田市	大阪市	吹田市	西宮市	香川県	藤井寺市	岸和田市	出雲市	大和高田市	米子市	岸和田市	京都市	松山市	倉敷市	池田市	宇部市	茨木市	米子市	弘前市
瀬戸	渡部	山本	奥田	川崎	福元	原	竹治	岸本	野坂	古野	松川	宮尾	小野	藤井	平田	井上	林	肥後
まさよ	さと美	希久子	みつ子	ひかり	みのる	さよ子	ちかし	豊平次	なみ	ひで	杜的	みのり	克枝	計光	実男	森生	荒介	和香子



是々非々で生きた父には四季はない
娘と話す心を写し合うように
邪気払いやつと百巻経を読む
椿の季いとしい人よ死ぬでない
堂々と使える金を持っている
恥ずかしやまだ捨て切れぬ背の葛籠
朝の電車で青春に囲まれる
新世紀の扉は核の全廃で
希望とや花屋の花はみな蕾
石臼ですったもんだは粉にする
日ぐれ坂等身大の影連れて
結び目が解けて笑いの輪をつくる
女三人ちよっぴり悪を企てる
胸のうち猥もだんだん年を取る
梅雨寒や旅をつづける首一つ
スマートな昔を誰も信じない
もっともな話と母さん茶を入れる
ムルロアの魚は黙って死にました
要領の悪い蔓だけからみ合い

静岡県	八尾市	大和郡山市	米子市	羽洩野市	米子市	弘前市	岸和田市	和歌山市	米子市	大阪市	奈良県	西宮市	米子市	守口市	鳥取県	岸和田市	唐津市	唐津市
安本	宮崎	坊農	八木	酒井	林	斉藤	岩佐	田中	茂理	西出	長谷川	西口	中井	森川	西原	藪野	山門	山門
晃授	シマ子	柳弘	千代	一壺	瑞枝	ダン吉	輝子	高代	楓楽	春蘭	いわゑ	ゆき	まさお	艶子	けい子	幸夫	タミ	タミ



自画像に節目の色が溜めてある
敬礼一つ朝を和ますガードマン
懸命に生きよう虫も私も

母親はあきれながらも出してやり

思い出の地を行脚する老いの夢

正座してからの小言が手厳しい

生きて一人動いて一つ年かさね

嘘つけぬ男荷くずればかりする

うなずいて正座していた龍安寺

記念樹へふと重なりし手の温み

人形の死野菜サラダを食べつくす

スエズ静かすべては神の思召し

チョボチョボの友情だから永つづき

正月の朝も雌牛に乳が張る

初夢は楽しパステルカラー調

耳に栓絶えず笑顔でいたいから

無神論の枕に今宵も亡母が来る

チャレンジの心を持って能磨く

ビール出す気だなコップが伏せてある

鳥取県

枚方市

鳥取県

大阪府

茨木市

堺市

岡山県

五所川原市

大阪府

富山市

堺市

大阪府

富田林市

和歌山県

和泉市

大阪府

羽曳野市

高槻市

下関市

上

前

土

玉

島

楊

山

對

川

島

板

板

松

玉

岡

稲

榎

井

石

田

橋

置

元

井

本

馬

端

川

尾

岳

倫

本

井

井

岡

本

本

川

俊路

たもつ

はるお

英子

ふみ

二南

玉恵

一閃

一歩

ひかる

岳人

倫子

今日子

豊太

やすお

凡子

吐来

照子

侃流洞



残り鍋雑炊にしてまたのこり
うす味を妻の愛とは見てくれぬ
ころばぬように二人三脚喜寿と古希
故郷の在る方向は忘れまい
輪から和へ塔がどっしりしてきたぞ
啓蟄のあと矢つぎ早や花だより
人生とは忍の一字か走馬灯
毎度おおきに口癖になる日商い
夕暮れは埴輪の口になだれ込む
地球には核より怖い人が居る
好きずきな方へ向きたい風見鶏
男が居ない大屋根も登らにやならぬ
さて何をやろうか二重苦はあるが
悲しみの底の底から湧く勇氣
蟬ほどに鳴いて見せたい時もある
信じれば味方になった太い蔓
鬼ごろしより女ごろしはおまへんか
明るい話題選って伝える電話口
悲しい時に哀しい顔をする人と

八尾市	寝屋川市	大阪市	京都市	大阪府	鳥取県	鳥取県	鳥取県	大阪府	弘前市	和歌山市	和歌山市	和歌山市	宝塚市	竹原市	倉吉市	東大阪市	島根県	大阪市
高杉	富山	寺井	山海	八十田	中原	中原	中原	藤田	中山	福井	玉置	山口	中田	小島	淡路	安永	岸桂	奥田
鬼遊	ルイ子	東雲	友熙	洞庵	みさ子	諷人	汲香	頂留子	雅城	桂香	当代	三千子	純次	蘭幸	ゆり子	暁子	桂子	良子



鳥たちの休んでくれる樹になろう
 渡る橋渡れぬ橋もわがえにし
 秋茄子を嫁も姑も笑って食う
 月の暈織姫はいまラブシーン
 立たされたおかげと思う事ばかり
 ミスしても気付かない振りされる年齢
 衣ずれの音させ野性ねむらせる
 早起きの靴が大地に逆らわず
 毎日が裏方だけど悔いはない
 生きている朝の扉がすつと開く
 頼る息子をはるばる遠い国に住む
 全山が萌えても神戸春いまだ
 かわいさが男らしさに変わる孫
 無理はせぬことよと箸が先ず折れる
 吾子踊る 十三センチの雨靴で
 八月のいのち見つめる朝の露
 参考に飲んでも効かぬやせ薬
 無位無冠飾り気のない詩を綴る
 風呂敷が解けわがまま零れでる

和歌山市	泉佐野市	高槻市	西宮市	豊中市	吹田市	池田市	神戸市	伊丹市	西宮市	西宮市	和歌山県	堺市	西宮市	藤井寺市	堺市	出雲市	八尾市	鳥取県
岩	阿	辻	久	小	古	金	木	小	牧	山	児	河	秋	吉	河	吉	高	鈴
本	萬		保	林	川	崎	村	熊	渕	本	島	内	元	岡	内	岡	橋	木
美智子	萬的	白溪子	まさお	一夫	喜美子	峰子	貴代子	江美	富喜子	義子	与呂志	月子	てる	美房	天笑	きみえ	夕花	公弘

川柳太平記 (224)

川柳の群像

斎藤松窓

東野 大八

京風川柳の家元であり、京都柳壇の大御所だった斎藤松窓は、本名万七。明治18年3月24日京都市生れ。別号山茶花・蕉風荘。京都の木綿問屋まんやの長男に生れた若旦那松窓の六十年のその生涯は、まさに川柳趣味一代で娑婆の生涯を終った。いふなれば、京洛川柳の元祖だったと言えなくもない。

稿物で来た妓がみかんお喰べという 松窓
果太鼓に追われて今日も逢いに行く ”
めぐりでもあるのか舞妓無愛想 ”
襟垢を氣にして二日三日たち ”
花ぐもり髪二日ほどまたせとき ”

「明治・大正の川柳人は、ことさらに花柳界を対象として句を詠むことが多かった。一つは、川柳を復活せしめたと自称した阪井久良伎が、江戸吉原遊廓の通人趣味こそ川柳の

真随であると強調したせいもあるが、一つは当時の都市生活が花柳界と接近していたこともあろう。とりわけ当時の京都では、都どのりの噂や、顔見世などの評判は、知るも知らぬも口にしたところであり、現在でもそれが京都の風土性となっているようである。

明治十八年、木綿問屋まんやに生れた松窓の若旦那時代は、日常生活の中に花柳界があったのかもしれない。

昭和二年、彼四十二歳にして三十三歳の妻と死別した。その時十二歳であった長男も太平洋戦争で戦死した。昭和八年三月出版された松窓句集は、明治四十年頃の葉柳時代から昭和八年の『川柳街』時代までの約二十五年間の句を収めているが、なんといつても亡妻に対する深き思慕の情と遺児に対する思いや

りの句が多く、ここに円熟した川柳作家としての松窓の陰翳が深くにじみ出ている。

髪梳いて病人春の灯をながめ 松窓

母がないからといわさぬための金 ”

お前ほどの美しさがある我が娘 ”

このとき長女十六歳。『亡妻祥月』に――と

これらの句がある。

以上は『平安』誌旧刊に堀口堯人が書いた連載「作家展望」の7の松窓篇の一節である。

「なめらか調」のご本家堯人は、この誌のほか『川柳』誌旧刊にも長文の作家展望で、松窓を捉えている。この仁の松窓への入れ込みは大変なもので、筆者も耳にタコができるほど聴かされている。以下はその堯人稿の、いところだけのつかみどりである。

「京都は季節感と民間行事と市民生活とが融け合っている都市である。元旦祇園神社のおけら詣り。二月節分、吉田神社の追儺式に伏見神社のお稲荷まつりの初午。三月は春彼岸会。四月は都おどりに壬生狂言。五月葵祭。六月は鞍馬の竹切り。七月はお目当てる祇園まつり。八月大文字。九月秋彼岸会。十月は時代祭。十一月は嵐山のもみじまつり。十二月は顔見世興行。そして鳴滝の大根だきや、島原の餅搗に至るまで、春夏秋冬の移り変わりとして市民生活が密着している。そこで京風の

川柳は、俳句じみたと言われることもあるが、以下はそのくらしの句である。

十一月三日候をとつて着る

雪おこしどの南天も揺れている

燭けませうかと娘がいにいし鮎のすし

二十二になった娘をうち眺め

以上の松窓壮年期の句は、旧『平安』誌に目を通して、塊人向きのなめらか調である。

どうして松窓が壮年期に妻を失いながら再婚しなかったか——この辺で川柳が出てくる。

何分、明治18年生れの松窓だから、川柳に手をそめたのも早い。彼が本気で川柳に力を入れるようになったのは、小島六厘坊主宰の『新篇柳樽』からで、その第一回句会は明治38年5月大阪の服部ふくべ方で、会する者は六厘坊、七厘坊（のちの日車）、松窓の五人で、これが関西川柳界の草分けだ。

一口に上方といっても京都と大阪は、全く体質が異なっていたことは詳記する迄もない。京都は商都大阪とは隔絶した厚味のある古都で、てんで西鶴風の上とは全くの異質だ。古川柳調が帯びた体質とする川柳社会より格段の香気を帯びた体質を持っていた。

松窓句集は昭和8年3月川柳叢書刊行会刊で、手帳型百十頁の一頁七句建ての小冊子であった。上述した松窓作句の傾向に見られる

ような、京風の陰翳がたちまどっている。

このあと六厘坊、路郎、半文銭、当百らと

『葉柳』へ京都代表格で参加し、そのあとの

新傾向雑誌『雪』またそのあとの『土団子』

にも協力し、やがてそのあと京都川柳界で本

格的活動を開始し、『大文字』の参加後、縁天

・半文銭らと新川柳誌『紙魚』をつなぎに、

昭和五年新川柳派の『川柳街』を興し、主幹

となった。

前記の『松窓句集』の収録句は、『紙魚』

作品がほとんどである。

伯母さんが洋服呉れる秋さ中

松窓

は『紙魚』創刊号の一句である。

「私が川柳を作り始めてから二十五年にな

る。私達は依然として一人一党川柳家である。

何派だの何主義だという必要がない天下の川

柳家である。お互いに自分の川柳を続けるこ

とをお奨めする。他人のことは一切考慮し、

またして貰いたくない」（『紙魚』創刊の辞）

昭和十六年三月京都の柳界を一九として大

京都川柳社が結成されたが、これはその後の

日本文学報国会へとつづく政府の文芸統制に

つながる圧迫であった。松窓は藤本蘭華・後

藤千枝・紀二山とともに名誉会員に推された

そして現れた統合誌『川柳月刊』六月号に彼

「多読多思せよ、川柳書のみを言わず一般書物なり学問なり、而して多作せよ。一カ月

五句位の同人吟さえ怠ける如きは以つての他

なり。閑あらば武玉川や柳樽を読み、かつ味

わうも徒事ならず。今の川柳家に欠けたるも

の味わうことならん。もののあわれを知るこ

と、即ち味わうことにあらずや、敢えて川柳

とはいわず、総べてのことなり」。

松窓が明治維新発生から推移した、自在・

平生・奔放・活気に充ちた新時代下の川柳に

対し、軍国主義下に抑圧せられた、拘束と不

自由な世情にもはや句風にも新傾向は許され

ず、人間本来の風刺・笑いさえ官憲によつて

封じこめられた時局の風潮に對し、結局はこ

う述べるのが一種の限界であつたと知れるの

である。その意味から、昭和二十年十一月二

日享年六十をもって他界した彼の心情、万斛

の想いが漂うのを感じる。遺作より

妹が泊つて久し塗枕

松窓

野々宮や筍ははや竹となり

お薬を素直にのんで母逝けり

柿の艶娘の頬の艶秋晴るる

料理人鱈のついたままで来る

女房を阿呆といひ懐しき

〃

〃

〃

〃

〃

▼次号は「桂 枝太郎」

古川柳歳時記

元

日

清 博 美

元日は正月の一日である。元日の「がん」は呉音、「じつ」は漢音。「がんにち」とも言う。

元日は、普段の日の朝とは異なり、明け方から清新な気分がただよう。人々は皆、厳粛な面持ちながら先ずは目出度い気分を横溢させる。町家では早朝から井戸で若水を汲み、その水で雑煮を炊き福茶を煮る。新調した手桶には輪飾りをかけ、今年の恵方に向かって水を汲むのである。昔の人達は、こうしたシキタリを大切に、頑固に守りとおしたものであった。

「元日は空も麗閑に遠近静謐にして水汲める頃明の鳥告渡り初鶏の長鶏相聞て東天紅の光景今言少し以前迄も雑忙鬧せし町々も静まり心にさわることもなく勤の役とてうるさし

と思ふ心なく新年の祝辞相互に自ら出づるも目出たかりける大江戸の新禧にこそ」と『絵本風俗往来』は記している。商家は見世を閉じ、職人も仕事には出なかつたから、町に普段の喧騒はなく、静かだったには違いない。しかし、時刻が進むにつれて、これまた普段とは違った賑いを見せるのである。

「深川洲崎にて日の出を拝する人、明ヶ七ツ頃（午前四時）より群集す」（『増補年中行事』）とあり、また、『今朝の明ばの初日拝みと今年の幸ひを祈らんと打出ぬる中にも深川の洲崎堤上は都下に聞へし朝日影の名所人の出殊にすぐれ実に今朝の日出は立春の空に一陽の影現る、や海面静かなる白波に紅るの影を浮か鴨又明鳥の飛びける光景江戸三百年の太平楽目出度御代と知られたり此人々衣類

は別にはでを競はず男女同じく木綿絹を選ばず只新調に打揃てぞ拝しぬる」（『絵本江戸風俗往来』）とあるように、初日の出を拝もうとする人達が動き始める。深川洲崎のほかにも、高輪・芝浦・愛宕山・神田湯島の両台などが海上を見晴らせる場所として、初日の出を拝もうとする人々で賑わった。また、神社仏閣に参詣する人々も多かったであろうが、意外なことに初詣に関する川柳は見当たらない。

子供達も「もう幾つ寝ると」と待ちわびた正月にはしやぎ始める。

男の子は専ら風揚げに専念する。「正月元日に家業をなし錢儲けするものは風商ふ店の外はなし」「霞寶をかこひて町毎に二二ヶ所つ、見へて子供の集るは辻の紙鳶商人なり又軒下に入堵をなすは風売店と知られたり」（『絵本江戸風俗往来』）とあるように、風を売る商人にとつて、男の子は最大の得意であった。女の子は羽根つき・手毬・歌がるたなどに、黄色い声を張りあげてうち興じたものであった。

さて、『宝暦現来集』には、「扇売 安永中迄は、元朝より扇々と云て、正月十四五日迄売来るもの、又天明年中よりは此商人止みて、払扇箱買ふと云て、元日より来るなり。

昔の商人は扇を売計、今の商人は払ひ扇箱買ふと云て、買たり売たり、扱々賤しき商人の風義にぞなりける」とあり、また「天明中迄は、正月元日より、はぜやぐと云て売来けり、是は餅米の玄米を煎たる、そのはぜたるもの也。是を正月買初にして、喰積へ乗せ置くと、年札の人来たり喰積を出せば、此はぜを摘みて喰ふべき物也、当年の豊作を賀したる也、花の形故祝ひしもの、夫故春の買初めにぞしける、何事も其年を祝ひ我身も祝ひし也、依て故障の有る家には門飾もせず、年札も不_レ受、喰積もいらす、皆年を賀し身を賀せし事也、近比はぜ売来るやこ、付かず」などとも記されている。

ついで、万歳を初めさまざまな門芸が街を賑わすことになる。

「万歳は三河国より年々正月までに江府に着す諸侯并旗士の邸へ罷出新年の目出度を祝しつゝ、みを打鳴して万歳歌をうたひて舞ふ舞酣なる時供の才藏立上り戯れて老若の別なく座中をして大笑を発せしむ此才藏の技倆は目から別なり先才藏は遠国山だしの容貌を備へ愚かに見へて痴鈍ならつ好色に見へて好色ならず武骨中に愛嬌を含み飽まで質朴なるをよしとす」(絵本江戸風俗往来)」とあるように、万歳は、多くは三河から出てきたので、

三河万歳と称された。烏帽子大紋で両刀を差し、才藏なる脇師を伴い、鼓に合わせて初春の辞を面白く唄い難し、得意先を歩き廻り祝儀を貰う。滑稽卑猥な文句と所作で見る人々に笑いをもたらした。

そして、太紐の編笠を深く被り縞の木綿布子に繻子の帯などを締め、手に手甲日和下駄を履いた鳥追が三味線に合わせて祝歌を謡い、猿廻しが得体のしれぬ三味線を弾いて猿に芸をさせ、首に人形箱を吊した傀儡師がその箱の上で人形を遣い、太神楽が獅子舞を演ずるなど、それぞれに街中でその得意の芸を披露して祝儀を乞うて歩いたのである。何れも元日の街頭を賑わすのに格好な芸人達だったのであろう。

こうして、元日の一日はまたたく間に暮れる。そして、夜は静かであった。「元日の夜は皆人去年のつかれにて、早くいぬるにやあらん、いとさびしきものなり」(『市隠月令』)というようなことだったのであろう。

*

元日は一夜の事てしつかなり 宝十一亀1

——夜明けると大晦日の喧騒が嘘のよう。
元日の町ハまたらに夜か明ける 宝八1215

——普段の日のように街が一斉には動き出さない。夫々の家庭の事情で早かったり遅

かったり。

元日ハ祝てねろとゆりおこし 明三智1

——いったん起きて、屠蘇を祝い雑煮を食べべから寝ろと。

元日はおきそつにして札を請ヶ 明四智3

——昨夜の疲れで起きられない。朦朧としたまま祝賀を受ける。

元日はまたこわいから戸を明ヶす 明七礼5

——戸を明けないのは昨夜の疲れが残っているからである。「恐いから」とは、債鬼

がまだ表に居るかも知れないから戸を明けられないのだろうと、第三者の目から見た、川柳独特の洒落。

元日ハ羽織着て出るわたし守り 宝十三智2

——しがない船頭も今日は正装して舟を漕ぐ。

か、あ殿など、元日やさしく出 明五智6

——やはり日頃とは違つのである。

元日ハ目かさめてから日がくれる 宝十一信1

——何もせずに一日が終わる。

元日の心年中持ッならば 別中14

——大概是三日で忘れる。

元日の夜ハ気のしれぬ人通り 宝十三礼3

——どうして元日の夜に歩かなければならぬかと。

秀句鑑賞

同人吟 川 島 諷云児

— 12月号から

右脳も左脳も秋の荒野となりけり

新家 完 司

久しぶりの秀句鑑賞を仰せつかり、先輩諸氏及び柳友三三〇名、一五五一句をじっくり拝読鑑賞する機会を与えられたことをまず感謝したい。

十人十色それぞれに句に対する見方や、味わい方があると思う。頭が古い、勉強不足と言われればそれまでのことではあるが、昭和十四年川柳という未知の世界に足を踏み入れ

(兵役のため中断)て以来五・七・五の基本を徹底的に叩きこまれたせいであろうか、未だに定型にこだわり、近代的川柳に溶けこめない旧人間である。頭脳も感性も年齢と共に鈍くなってきた私が、作者の創意、句意を充分に理解して鑑賞ができたかどうか疑問が残る。恐らく柳誌一月号に活字となつて、再読した時、冷汗が背を走ることであらう。

雑用に追われがちな今日この頃、何はともあれこの機会を利用して頂き先輩、柳友の着想、表現の技法を改めて学ばせてもらった仕合わせを噛みしめ、老軀に鞭を打ってみなさんに負けないよう一層の精進をしたい。

最初に私の目に焼きついたのがこの句で、私の言いたい事を代弁してもらったような気がして、思わずそのとおりと心の中で拍手した次第。若いつもりでいても、まず足腰に老いが忍びより物忘れが激しくなってくる。

人間の摂理とは言いながら情けなく寂しいことである。まだ若い作者が、このような作句をされたことが意外であつた。

淡々と奇や銜いとらわれず実感をズバリと詠まれ、特に中七の「秋の荒野」と比喻したところは、さすがベテラン。表現力の豊かに脱帽するのみ。

真心のわかる男を掴みたい

永 井 三津子

男性が詠めば、おそらく男を女と変えてみたくなる句である。今の世にあなたが望む男性が、何人いるだろうか。見目や姿にだまされないようご用心。お望みどおりの良きパートナーに一日も早く巡り会えることを祈る。

本店へ叱られにゆく時刻表

小 池 しげお

宮仕え特に中間管理職とは辛いものだ。身をもって体験した私には、この光景が走馬灯のように甦ってくる。サラリーマンの哀歌がひしひしと伝わってくる。良い事で行く時は、自然と歩幅が広くなり、逆に叱られに行く時は、誰しも二の足を踏みたくなるのは、当然のことである。サラリーマンだけとは限らない。人間の心理をうまくとらえたデクニックは、いつものことながら敬意を表します。

ひたすらに走れふたりの縄電車

門 谷 たず子

ふたりを夫婦と解釈すべきか、はたまた巣立っていった子供たちのことか熟考させられた。作者の創意に逸れた見方になったかも知れないが、子と思う親心と推察した。この句を味わっている時少し古い「這えば立て立てば歩めの親心」を思い出した。子と思う親の心が切々と訴えられ、心に響く句である。親の気苦労は、子供がいくつになっても絶え間がないことを、リズム感よく詠まれている。おふたりさん、温かい親心を汲み取り、縄電車が脱線することのないよう、ふたり仲よく手を繋ぎ、自ら選んだ道を目指に向かって走り続けられることを、陰から祈ってます。

絶筆は点滴中というハガキ

岩 津 ようじ

一抹の哀感が身を攻めてくる。作者が男性という観点から、おそらく病友からの便りであろう。針の痛みに耐えて一日も早い回復に望みを抱いていた友が、気分の良い日に書いたハガキが、まさか最後の便りになるとは、本人も句主も知る由もなかったことだろう。

句主はどんな気持で作句されたことだろう。人の命の果敢なさが、この句から読みとれる。上五の「絶筆」と中七の「点滴中」の取り合わせが、絶妙な味をかもし出しており、巧みな表現に拍手喝采を贈りたい。

謹んで拝受敬老祝金

玉 置 重 人

なんともはや、鮮烈な風刺と皮肉の効いた句で笑いがこみあげてくる。謹んで拝受とは本心から出た言葉だろうか。本人に一度確かめたい。最近、風刺の効いた作品がだんだん少なくなってきたおり、寂しい限りである。

消えてゆくように死ねたらおめでどう

宮 尾 み の り

生者必滅会者定離、神の思し召しとは言いながら、やはり死は恐ろしい。まして罪深いわれわれ人間にとって、花火のように綺麗にしかも惜しまれて天寿を全うすることが出来

たら最高の仕合わせであろう。死は人間にとって一度は必ず遭遇する宿命である。家族、友人に見守られ安らかに天国へ旅立てる事を誰もが望んでいる。がしかし天災人災は予告なしにやって来る。神のみが知り得ることで、句主の願望どおり事が運ぶかどうか疑問であり難問でもある。それにしても「おめでどう」とは、大胆奇抜な表現でその創造力のたくましさに賛辞を贈りたい。

一合をゆつくりとのむ今日をのむ

仁 部 四 郎

下戸の私が、酒のことについて云々する資格はないが、一日を無事に終えて飲む酒は、甘くほろ苦い味であろうと思う。一合ということとは洋酒やビール党ではなくどうやら日本酒がお好みのようだ。袴を脱いでひとり徳利を傾け今日一日を回想されている光景が浮かんでくる。今日をのむの下五がこの句を引き締め、特に飲むとしたいところを取ってのむと平仮名で押し通したところが心憎い。

何ごとも嫌いは嫌いは好きは好き

西 原 艶 子

一足す一は二と明快に割り切り、ズバリと詠まれたあなたがうらやましい限りだ。らしくない男が増えてゆく今の世に自分の信念を正直に句に託したところが素晴らしい。

私にはもう手遅れかも知れないが、あやかりたい心境である。作者と親交を願って以来女性としてのつつましきの中に、芯の強さを秘められている方とお見受けしていたが、私の目に狂いがなかったことを、この句が証明してくれた。竹を割ったような気丈さが、逆効果を招くこともあります。釈迦に説法かも知れないが、世間はそう甘くはありません。時と場合によっては、妥協も必要です。老婆心ながら申し上げます。

禁酒禁煙それをつちやーおしまいよ

小 寺 花 峯

何処かで聞いたことがある台詞。列島を悲しませ、惜しまれて逝ったふつてんの寅さん思い出した。軽いタツチで、ユーモアとウィットの溢れた愉快な句である。

以上をもつて秀句の鑑賞を終わりますが、紙面の都合上句評の出来なかつた心残りの句を三句列記させて頂きました。紙面を借りて皆様のご健勝とご健吟を念じております。

乗り心地などきかれぬ霊柩車

菱 田 満 秋

冬へふゆへと調律のいるわが心

田 中 輝 子

母の忌に母の平手がまだ響く

酒 井 輝

水煙抄

高杉鬼遊選

東大阪府 谷口 義

兵庫県 大谷 幸次郎

叱るのは食事がすんでからにする
もう遅い保険屋からも見放され
遺言状お金のことは書いてない
酔う前に酔ったふりして言っておく
かけ持ちを四軒もする大工くる

河内長野市 大西 文次

哺育器ではや福耳を期待され
曲るだけ曲って今日に辿りつく
軽いので土台石から外される
頂点の男難聴かも知れぬ
刈入れを終えて大きな魚買う

広島市 流 奈美子

念仏は苦手終った頃に行く
運動会待ってたように雨が降る
蛇の目傘似合う京都の格子窓
極楽は遠くて近い夜の酒

ゴルフではシングル商売そっちのけ

八尾市 村上 ミツ子

親孝行のチャンスが不意にやってくる
病室の母の笑顔に会いに行く
支えてるつもり支えて貰ってた
出る杭の頭ときどきなでておく
わたしを変えるみんなも少しずつ変わる

日本のこころを探す冬の旅
せせらぎに抱かれて休む山の宿
ときめきもなく混浴のありかなど
週末の安らぎがある雨の音
自画像の鼻が低くて描かない

高槻市 乙倉 武史

前向きに生きてと遺影言う如く
妻逝ってから多くなる独り言
軍隊の躰が生きる拭き掃除
困ったなタンス端から探しもの
又逢える黄泉路デートを楽しみに

鳥取県

山内芳江

和歌山市

山根めぐみ

家中を磨いてやつと気が晴れた
背負い切れぬ苦勞を神は与えない
頼る子は沢山いるが独り住む
大法螺を提げて一升ビンが来る
家中を妻の都合で掻き回す

羽曳野市

三好専平

新潟県

高野不二

授業中眠ってバーで媚を売る
当選のためには嘘も金も吐き
釈迦牟尼に惚れた腫れたの夫婦旅
藁塚を焼いた煙で泣いている
莫山の書がみな笑う秋の奈良

藤井寺市

鴨谷留美子

和歌山市

古久保和子

コスモスを束ね束ねた秋の風
人恋えばどこまで澄むか秋の空
長生きの秘訣に母の身だしなみ
新鮮なうちはわたしも好かれてた
お酒ならいただきますにみな拍手

泉佐野市

稲葉洋

高槻市

傍島克治

風見鶏 雀の噂など平気
疑似平和वादつみの声何と聞く
渋滞があちこち僕の万歩計
野草さえ実をつけるのに老いひとり
患った妻の空席風が抜け

陽が昇る矛盾一つもない虚空
凜と咲く花にも秘密二つ三つ
合理性 味もしやしやりもないお方
歯車の錆を落している眠り
毒舌のサインか動くのど仏
バツ一で賞味期限を残してる
預金帳ゼロで死ねたら本望さ
カレンダー診察予約書いて寝る
消費税その分子算狂わせる
年金で包むのし袋が多い
父の名を一字貰って反抗期
隣との垣根に猫の道がある
お利息と言われるほどでない満期
立ち話すると野菜のくれる道
家計簿のその他の欄でする出費
こらえればこらえるほどに咳が出る
算盤が下手で戸惑う風見鶏
かりそめの話が元へ戻らない
規制緩和わが家もしきたり緩くする
日だまりの蜥蜴動かず秋深し

島根県 今 若 あき子

自転車明かり頼っている視界
灯台の父は黙って子を照らす
人恋し秋にはベンも淋しがり
ああ女 幾たび燃えしななかまど
手をつなぐ親と月夜のいい絆

綾部市 藤 田 芳 郎

街はいじわる故郷からも風が吹く
弥陀の掌に運命線が見当たらず
あなたからどうぞと歳の順らしい
悪事でもしたのかすごい門構え
面白そうな男だ揺すってみてやろう

成田市 斎 藤 房 子

風になり雲になりして里を訪う
異状なし医師が女神に見えてくる
一日のいろはを抱いて陽がしずむ
豆を煮るいのちの音を聴きながら
半世紀まだ弾んでる黒電話

愛媛県 安 野 案山子

ホップ ステップ ジャンプにあつた水溜り
親切を誤解されそう母子家庭
長男も二男も僕を追い越した
新任の胸のボタンがちぎれそつ
袴を脱いだ夫の甘えんぼ

寝屋川市 井 上 すみれ

めでたさもラッキーセブン回り年
古時計巖かにして初春を告げ
深夜放送あの感銘を寝て忘れ
友は来ず缶のジュースの気飲み
婦唱夫随 羨ましくも悲しくも

八尾市 神 原 まさと

冷やされて頑固になった瓶の蓋
棟上げの喜びローン忘れさせ
銀行のタオルは風呂に使え
母の味 今妻の味 孫と食べ
低金利 窓口の子に謝られ

横浜市 伊 藤 ふ み

バラ色の世にする人ばかり選挙戦
いろは坂 美女が隣で酔ったふり
ゴミの日はカラス朝から待っている
柿実る母から便り届くころ
万歩計少しいことあると言う

米子市 林 風 子

母を看る 空一面に鱗雲
千羽鶴二三羽折って母ひと日
ピアノ連打 波に翻弄されてみる
鷺草よ何処へ飛ばうというのです
葉隠の今を昔に鐘の音

愛媛県 中居善信

涙ぼろぼろ落としドラマのなかに居る

知らんふりしてる女の強かさ

空き缶を拾うと小さい風が吹く

百姓を苛めた付けが何時か来る

叩いたら埃くらいは出る男

横浜 明渡トヨ子

広辞苑リユウマチの手に重過ぎる

三食はひとり暮らしの句読点

耳もとの一匹の蚊にささやかれ

恩人の墓参が出来た日本晴れ

遠からず世話になる身を我慢する

尼崎市 田辺鹿太

改札を抜けるとボクの解放区

伸び縮みする良心を持ち合す

日向ばかり歩いて芯のない男

哀しみの受け皿となる母の膝

良妻の毒に時々当てられる

倉吉市 山中康子

孫牛とならんで先ずはお目出度う

文鳥のなつく機嫌にのつてやる

一存は通せぬ孫の向き不向き

晩学の顔がちよっぴり上を向く

干涉の釘は平らに打っておく

八尾市 平川幸枝

コスモスの揺れで休めぬ赤とんぼ

一行を足して空白やと埋め

覚えなき打身のあざの色があり

お札ばかり何か佗しい敬老日

堺市 井崎ミサ子

忘れそうになるとサボテン花をつけ

満員電車 背広の壁に囲まれる

震災の古巣荒らしに舞い戻り

負けん気を出さず私はマイペース

鳥取県 橋本多哥由

八起き目の味方に妻の手を借りる

肩書を捨てて出足がよくそうう

生きたとは空を仰いでいることだ

哀しみを隠すつもりの笑いだろ

米子市 猪森スミエ

初雪が来て大根が美味くなる

差別なく包んだ今朝の雪景色

しきたりをつぶやくハゼの昆布巻

出雲路にここ掘れと鳴く犬がいる

徳島県 安宅美代子

こんな時 嘘がつけたらなと思う

この川が好きでこの村出られない

ビー玉もメンコも知らぬアスファルト

大阪市 中井正秀

大将の声につられて鯛を買う
やどかりにローンの苦しさ分かるまい
お人よし厄介なこと頼まれる
湯の街をゆるい鼻緒で土産買う

尾張旭市 三浦きぬ

長の留守 庭の花木に詫びて発つ
来年も出せるでしょうか賀状書く
大器晩成期待外れて越えた喜寿
悩みごと断ち切るように夜爪切る

横浜市 福田由美子

他人事のように投票すすめられ
粉末のだしが主役の嫁の味
ゴミ置場 無責任さも捨ててある
糠漬けは子育てよりも手間が要る

和歌山県 中後清史

倍になる話へ耳の好奇心
絵にならぬ構図を老父は抱き続け
狂わせてならぬ順番香を焚く
自分史の中ほどにあるけつまずき

伊丹市 榎谷郁子

納骨を済ませて寒い部屋になり
航空券買って気になる空模様
お父さんここがセレネのホテルです
銀海に棹さす亡夫と乗る私（寿馬の句集）

静岡市 佐藤次枝

先に行く歌に伴奏追いかける
糞食べて何故に美し黄金虫
旅終えて帰宅の妻に安堵する
古稀祝い俺より先に逝くなよと

札幌市 三浦強一

蟻の巢の喧噪に似て通勤車
タイムイズマネーと蟻も人も秋
リストラの風が冷たい蟻の首
働いて働いて蟻老いてゆく

富田林市 中井アキ

喜びのひとつひとつが皺になる
完熟の柿はつるりと過去を吞む
想い出をこんなに沢山有り難う
癌告知白いブランコ揺れていた

横浜市 鈴江純子

渋滞をしないテレビで旅をする
来客のある日掃除機よく動き
鬼の目の涙に老いを知らされる
若しという思いに負けて今があり

横浜市 上野天々

妻のいぬ蟻よりはいいキリギリス
生きてると届け年金確保する
地価半値なにか損した気がしてる
腕白な膝 勲章をつけている

西宮市

古谷ひろ子

東京都 井上つよし

チンチン電車秋を見つけに孫を連れ
朝市の農婦に習う麦こがし
なべものから売り切れていく冬一番
先に逝く夫に席を予約する

島根県

森茂美

鳥取市 徳田ひろ子

紅葉へ静かに冬が忍び寄る
ふるさとに遊ぶメダカを見て飽きず
銅鐸へ夢の広がる神の郷
病院に預けっぱなしの余命表

今治市

野村清美

今治市 渡辺南奉

乗った船 覚悟はちゃんと出来ている
忘れてた今日はコーヒー飲んでない
雲掴む話に調子いい息子
いい風に出会いカーテンうれしそう

和歌山市

水田秀男

横浜市 保田絹子

日本の無くしたものであるカナダ
ハイウエー鹿に車を止められる
自然へのいたわり持っているカナダ
リストラの波に押されて去った友

神戸市

船津とみ子

泉佐野市 山本蛙城

健康管理 食は七分か八分目
豆餅をゆると焼いている二人
さつまいもずしりと重いほど買いぬ
長男が折る広告の鶴 何ぞ

雷よ男のピアスに落ちて来い
張り切ってぶらぶらしてる病み上がり
居酒屋で妻とデートの給料日
有楽町 約束守り濡れて来る
正月の顔した子等のごあいさつ
妹はいつも褒められ役ばかり
回り道する雑学に救われる
歌声もピアノも響く小さな城
芋飯は昔の方がうまかった
いざの時覗いてくれるのは近所
だまし舟折ってもだます人が居ぬ
ふところが豊か衝動買いをする
夕映えのいわし雲みて秋刀魚焼く
留守番にメモの履行が難しい
ハイテクのホテルで和食眠れそう
場違いな席外してのシヨッピング
医療科とあり首腰の引っ張り機
傷テープだけが減ってた置き薬
高齢化 生めよ殖やせとなぜ言わぬ
凡人の誇り隠した手暗がり

兵庫県 西山 八重子

気まぐれな風が部屋まで覗きこむ
栗拾い孫との絆たぐり寄せ
長生きも良かれ悪しかれ昨日今日

煩惱を捨てて枕を裏返す

犬山市 早川 盛夫

生きたらこういふことか腹がへり
悪い方ばかりをおもう検診日
どこまでが本当ですか嘘ですか

一匹を群れの中から釣りあげる

今治市 村上 久美子

合掌の中で十指に余る欲

泳がせてくれる却って裏切れぬ
約束があるから今日も生きられる

突然変異で孫は賢いかも知れず

岡山市 藤原 一平

着飾ってみても心にすきま風

肩抱くとほろほろ解ける雪女

背伸びする度に梯子を外される

さよならを言うと哀しい風が吹く

富田林市 藤田 泰子

幸福を噛みしめながらゆく牛歩
出来そこないそれが私の個性です

贅沢にローカル線に乗っている

アルバムの中の今昔物語

八尾市 鷺見 章

秋思とや兵たりし日も五十年
一期一会楽しき酒を呑まんな

両刀を使って甘いものも好き
秋桜うす紅色に風が揺れ

堺市 志田 千代

ざくろ裂け思いのたけをうちあける
大人だから誘ってくれて大丈夫

私には目をそらさずに話してね
長生きを嘆きながらの栗御飯

尼崎市 的場 十四郎

幸せの明日を描いて二度の職

騙されて清き一票入れに行く
お神輿を担いで神と戯れる

ハイ一つすぐに返ってよい心地

堺市 宮本 かりん

恐いもの知らずで橋をわたり出す

歯車の一つ絆がみな回り

汗だくの荷物をひよいと娘婿

いやな自分をごしごし洗うしまい風呂

八尾市 村上 剛治

わたくしの歩幅でいつも歩きたい
段取りがよくてばたばた慌てない

極楽に近い気がする寺の町

健康を拾って歩く散歩道

横浜市 近藤道子

恐いのは時々脳が白くなる
カタカナの多い受話器を持て余し
トンネルを抜けて光のシャワー浴び
死に方を頭の隅ににおいている

北九州市 岡田幸生

大の字を実家の畳に書いてくる
病む人にいつまで続く辛い嘘
治ったらハワイ奢ると元気づけ
草焼きがあるとも知らずきりぎりす

大阪狭山市 伊藤尚子

目立たない妻の力に支えられ
身のまわり保険だらけで生きている
千羽鶴退院されて間に合わず
傘の柄を二人で持つと重たすぎ

羽曳野市 川田晋

わが娘でも相合傘は面映い
度忘れで話弾まぬ老夫婦
初孫を抱いて町内一回り
待て待てと詰んだ王将思案する

羽曳野市 芦田絢子

ストレスは写らなかつたレントゲン
自己主張譲らぬ家の時計たち
ジョーカーが来て順番を狂わせる
斜めから横からペンは人を斬る

和歌山市 津村武春

單身赴任家族の輪から孤立する
はつきりとけじめをつける句読点
擦り減って無口になった父の靴
美人でも喋り過ぎると飽きがくる

横浜市 後藤早智

秋深し体重計が疑われ
包装紙のれんの意地もあざやかに
イヤリング片方ずつが残ってる
パソコンの中から夢を探し出す

八尾市 與田明

ギャンブルの火傷は高い授業料
飲ます馬鹿 飲む馬鹿がいて終電車
備忘録どこに置いたか記憶ない
怒らせてやつと本音にたどりつく

十和田市 阿部喜久江

温泉巡りこころ洗濯して帰る
せせらぎの音になごんでくる心
おつき合い何時も真剣勝負です
道草を食べて元気な子に育ち

秋田県 湊修水

秋晴れに燃える紅葉の抱返り（秋田抱返溪谷）
行く秋をいっぱい食べてきたカメラ
心まで染まり夕虹吸うてくる
抱返りすんと暮れて肌寒し

静岡市 松下正枝

何時の間に定例会の席きまり
戻れない道じんわりとあれやこれ
背に腹は替えられませんリユック買う
菊日和すみれうつかり顔を出し

尼崎市 森安夢之助

空き缶が転ぶ渴いた音たてて
丁寧な言葉が皿に盛つてある
握られた尻尾が重く動けない
母に似て娘ころころ太りだす

和歌山市 楠見章子

昼ごはんマンガを置いて話そうよ
わたしの影 背中まるめて従いてくる
シーソーの相手不況は重すぎる
テレクラも麻薬も遠いことでない

大阪府 奥野義夫

また来ると言うのは世辞になる見舞い
朝の駅リモコン操作の人急ぐ
控え目に座布団もらう通夜の客
子離れに泣いて地蔵のよだれ掛け

兵庫県 円増純子

エネルギー若い人からもろて来る
あれこれと惹かれるうちは気も若い
忘れられたくはないから街へ出る
何もかも忘れてしまう空の青

静岡市 大村正雄

御都合のよいとこだけはガラス張り
新年会元の階級よみがえり
へそくつて末は家計へ逆戻り
保釈金 何億円と出る不思議

松江市 安食友子

蜆舟おつとつとと傾くぞ
大黒天 不景気面は避けなざる
景気よくどんちゃん騒ぎではいかが
微熱から一喜一憂させられる

三重県 佐々木森哉

てのひらに神に絶った痕がある
反省のポーズで詫げる酒の罪
残像はまだ捨てられぬ戦中派
遠い日のボクはラムネの壺の中

横浜市 秋元和可

妬くことのない幸せが物足りず
定年の夫掃除を趣味とする
ひとりで鼻唄が出るなにかあり
許してはいるがチョッピリ拗ねてみる

横浜市 金森徳三

検査値がふえて休肝二日制
脳味噌をみな出しきった投句あと
平成の今は大目にみるばかり
不器用を絵にしたような障子張り

豊中市 みきわきみ

大臣も総理も若いと思う年

選良が破廉恥犯す世とはなり

多機能はよいが手引書の厚いこと

文藻を育てる手紙孫へ書く

唐津市 宗弘

浅瀬には浅瀬楽しむ魚が住み

りハーサルできぬ葬儀に悔い残る

夏が好き冬が好きだと天に愚痴

あざやかに値切る度胸は女です

和泉市 中川楓

釣書にかいてなかった力瘤

着飾って齡忘れたし同窓会

妻の輪に夫の地位が顔を出し

心配性の母には聞かせないことに

唐津市 松本圭

灰皿にされた赤絵の柿右衛門

缶詰で育てた猫に秋力魚焼く

抜擢の椅子の硬さに耐えている

仲直り菩薩の面を付けて行く

大阪府 澤田和重

金婚は夫婦の祭りだと思ふ

意見する母も悩みは持っている

居眠りの顔に視線がこそばゆい

セールの粘りに負けたなと思ふ

鳥取市 岸本宏章

若いっていい借金苦にしない

大山に登るたんびに高くなる

念押しをされて決意が揺れ動く

富山県 増田紗弓

ケーキカットふわりと空気動き出す

花婿の母も少しは淋しいね

ヴァージンロード一度歩いたことがある

大阪市 小林周信

手を焼いた三男坊と母は住む

母親に似た娘を連れて来る息子

行楽に抜け道マップ渋滞し

兵庫県 北川とみ子

それなりの鏡で裏を見てしまふ

まあまあ暮しに酔っている夫婦

髪染めて夢のかけらを追うている

堺市 梶本哲平

門のないお邸

日本中お庭

仁義礼知信このごろ忘れてる

飲めるやつ飲めなくなつて背が丸い

熊本市 北川一進

自信ある一番先に手をあげる

眉一つ書くのに念のいる舞妓

お祭りが済んだら町はもの色

尼崎市 岩倉 キク子

偶然よ善い事ばかりきてほしい

人生の折返し点どのあたり

此の辺で何か奥の手ないやろか

横浜市 荒井 広和

人間の奢り地球までいじめ

リストラと言う切り札をちらつかせ

山門の坂で六根清められ

兵庫県 徳平 毬子

菊花展わたし私と競い咲く

夢を持ち脳内革命読破する

ダンベルの効果何時出るこの身体

鳴門市 八木 芳水

ネオン点滅みな幸せな顔となる

真つすぐに歩いて白を通し抜く

手を合わずだけで祈りになるかげ絵

寝屋川市 太田 とし子

牛のよだれ水鼻も出し精も出し

学のない雀の詩に振るタクト

声かける友がいてますここかしこ

寝屋川市 瀧本 八十八

公約のうまい話は匂いだけ

抜けるほど澄んだ日本にまだ遠い

人生の退けどきやはり花の下

兵庫県 倉垣 恵美

冷静になれよなれよと鏡拭く

中退はできない土があるかぎり

生涯にこのことありぬ豆の花

大阪市 酒井 勇太郎

シャンゼリゼ ルージュ一本買いに行く

弁解をしない男の胃潰瘍

ガン告知 夫婦の愛が試される

島根県 菅田 かつ子

銅鐸へ屋台店まで出る騒ぎ

幸せが風にゆらゆら物干場

これ見よと携帯電話持ち歩き

千葉県 大川 晩翠

門前にこれも道楽菊畑

こだわりにグレードアップ生き残り

ボス猿が北の大地で冬を越す

鳥取県 権代 康女

正直に言ったら馬鹿をつけられる

文句など言わない牛の目が円い

やれやれと言った所でお茶にする

伊丹市 延寿庵 野鶴

妖精が虹の雫に棲むそうな

さからわぬ風に身を置く女郎蜘蛛

やつぎきの刑はごめんと睨む蟹

和歌山市 福重美子

これ最後これが最後と旅重ね

青青と赤信号で雨に会い

戦友の計に落ちつかずまた一人

富田林市 山原昭水

丸くなら丸くならうで今日も暮れ

君となら楽しく酔えるレモンティー

留守電にして民謡でひとり酒

大阪市 中橋恵美子

荒縄に縛られて着く秋の味

千人針の話がわかる人ばかり

透明な心そのまま伸びてゆけ

岡山県 土居ひでの

孫好きで酒もたばこも無縁です

スキップが上手になった運動会

シャボン玉のひとつ一つに顔がある

阪南市 正橋正

老いた僕自分の夢を食い尽くす

殿で余力充分溜めている

慣れという安定剤の依存症

横浜市 長島亜希子

老母元気 子らが成人病を病む

薄命の相を夫は信じない

ことごとに今年の巨人持ち出され

豊中市 岸田知香子

昨日 今日 毎日変わる秋風情

カレンダー残る二枚に古い重ね

托鉢僧 京の夕陽に笠を染め

静岡市 中西雅

背の丸さ永の年月苦を背負い

球根の夢ふくらんで春を待つ

老いてなおほのかに艶のある暮し

大阪市 松永会美

正月に祥月命日せっしょうな

あの人の好きな慈姑のない御節

寝正月テレビの前で初詣で

益田市 岡田たけを

遺書だけは書いておけよと子に言われ

玉子二つ割って二人の朝がくる

二間きりの倅せ風がよく通る

八尾市 篠原いつふみ

順番でゆくと今度は俺の番

背伸びした時から辛い日が続く

新妻の愚痴聞かされる縫いぐるみ

松江市 佐野木みえ

小菊咲く仏に上げる花鉢

不揃いのみかんが熟れて秋深し

清張の世界に入り秋暮れる

横浜市 川島良子

いい嫁の仮面重いが外せない
無器用で一つの事しかできません
悪妻になって翔びたい時もある

静岡市 小木久子

行革の掛け声だけがよく響き
新党へすぐ飛びついて行く男
金ばかり動いて政治よくならず

大阪市 平井露芳

お百度に変え御祈祷で神頼み
海しかた時が漁師の定休日
待てないとわかっていても待てと言う

大阪市 亀井円女

三つ指を一度はつかせたいらしい
言い勝った後で落込むのは私
喧嘩の因も忘れてしまふ老夫婦

倉吉市 田中八太郎

各部屋に老眼鏡を配置する
この世相 百年先が見てみたい
欲のある限り戦いは続くだろう

島根県 三代朝子

感激が冷めやらぬうち返事書こ
また来てねくるわと別れ惜しむ駅
生かされる余生へ夢を追いつづけ

今治市 渡邊伊津志

見る人によって見られる茶器の良さ
立ち止まることで視点が見えて来る
返す波ゆっくり人を赦してる

出雲市 加藤スズコ

化粧台髪型替えて見たくなり
北滴の赤い夕陽は沈まない
亡夫眠るシペリヤからの冬の使者

尼崎市 軸丸勝巳

敗者復活 拒否権ほしい当選者
半世紀まだ救えない孤児がくる
残留孤児カラーの服にほっとする

鳥取市 有沢せつ子

世渡りは下手でも五人子が宝
プランコの背なを夕日が押してくれ
案内をまた読むだけの旅プラン

河内長野市 木太久正一

音消えて心が澄むと妻は言う
筆談で用は足りると妻の笑み
孫の声聞えなくなり妻あわれ

今治市 中村好恵

パソコンの腕上げました年賀状
じっくりとおでんが煮えて妻は留守
ケーキ入刀もう花嫁にリードされ

吹田市 西岡 豊

カラオケに天狗が並び歌手気どり

吊り橋が揺れて心を盗まれる

わいわいと紅葉に酔い三朝の湯

羽曳野市 西村 りつえ

おめでとう牛はゆつくり草を噛む

羽目はずし手繰られてゐる奴風

饒舌は痛むこころを寒くする

尼崎市 長浜 澄子

おいそれと尻尾は振らぬへび苺

避けきれぬ視線よこ顔意識する

いつ来ても水掛け不動恋に濡れ

大阪市 立藏 信子

現実映画みたいな恋じゃない

朝シャンをした日の予定コンサート

新幹線ドラマのような別れる

鳥取県 藤山 弘子

稲刈りがすむとせわしい冬支度

黄金の栗きんとんが春を呼ぶ

教育費めつきり白髪ふえました

鳥取県 原 みさを

掌に虹を握って眠られず

いい話ばかりためてる耳の底
頂上で順風ばかり聞かされる

河内長野市 妹背 尽呂久

胸中をすっかり吐いて秋の空

リストラでどの歯車も自己主張

ほろ酔いが酒の極致と知りました

鳥取市 山宮 愛恵

かに船がもどり港が活気づく

山の峰動かせている夕茜

終焉はどんなさよならするだろう

高槻市 執行 稲子

派手過ぎずほどよい孫のプレゼント

減らず口叩くあいだはまだ嫁けぬ

試されているなと思う無言ベル

海南市 谷口 義男

出る杭もあるから徐々に変化する

半分の権利が有ると妻の弁

即答は出来ぬ妻にも聞いて見る

鳥取市 山本 益子

あれこれと辞書のことばに心揺れ

日向ぼこ老いは集いて愚痴を吐く

いつの日か昔話にオウム教

鳥取市 尾宮 弘治

世間もうドキッとしなない救急車

長生きに閻魔の金庫錆びてくる
俺に似た子なのにみんな妻につく

因習の重みに耐える鬼瓦

今治市 塩路 よしみ

脈がまだありそうだから電話する
吹っ切れた笑顔にかけり見当らず

富田林市 大橋 鐘造

寂しさを癒すにビール冷たすぎ

策のない男が吠える山の上

むつかしい顔をしている楽屋裏

鳥取市 藤 ふうこ

火をつけて来たのは女古代から

旬の味まず父が食べうなずいた

急がねば晩学の身の時間ぎれ

和歌山県 吉田 武治

公約をやる気あるかと見ているぞ

粗大ゴミけちではないが迷いだし

贅沢がつづく地球怖くなり

東京都 瀬戸 きん子

輪になってしその実むしる女の座

すぐ出ないテレビにわたしふと思ひ

大根炊く香りが冬を連れて来た

尼崎市 河津 正治

居留守して電話のベルが気を揉まず

亡母に似た声に思わず振り返る

セクシーな風が浴衣の襟を撫で

赤いシャツ魔除けと母は買っている

日めくりがやせる女は肥えていく

雨ばかり女も暇を持てあます

東大阪市 今岡 貞人

商売に良心的という尺度

くったくのない性分で坂がない

天下国家論じる秋の実りかな

岡山県 国米 きくゑ

目も口もたつぷり秋に酔う旅路

ゆつくりと乗るも体重増えている

盛衰を見守ってきた村の橋

尼崎市 松下 比ろ志

老いしずか夕陽に明日を問うてみる

花のない木にも寄り添う影がある

蛇行する川を上手に泳ぎきり

香川県 田中 ふみ

慎重が過ぎて逃がした夢幾つ

転び癖ついたか老いに荷が重い

帰宅より素通り出来ぬ好きな店

日立市 加藤 権悟

かあさんがぐつと支えているパート

百態の流れて石はまるくなる

美しい嘘も見ている花時計

島根県 槻谷仲子
雑草のままで目立たぬ生き残り

こぼれ花生きる力が小さくとも
いい話たしかめ合っている二人
尼崎市 中澤向西
雑踏の空白よぎる風の音

満月が僕の影絵についてくる
いつ見ても旅館の女将愛想よい
音なしの構えで妻と向い合う
和歌山市 木村初子
偏差値に洩れたおれだが生きて来た
準備した言葉で人は動かない
来世も川柳と妻離さんぞ
鳥取市 西村半畳

老いという文字あかあかと敬老日
家訓です一切捺さぬ保証印
ゼネコンのあおりで折れた屋台骨
河内長野市 柏本靖子
よくできた料理テレビから学ぶ
年の暮れ我が家のポスト模様替え
数え唄 祖母の記憶はまだ確か
岸和田市 不破仁緑

婆鯨も爺鯨も釣れ孫の竿
病むもよし病んで灯下に親しめり
浜競りの高値に河豚のしたり顔
被っても鬼には成れぬ鬼の面
泣きながら孫は悪戯考える
健康法 読むだけ読んで守れない
和歌山市 中村君枝

沖縄県 杉谷一栄
ばあちゃんが病氣とうそで会いに来た
大阪弁 孫と気楽な話する
招待状ベアの重みをかみしめる
上向いて歩けと丸い背なが言う
サッカーの夫婦で今日も無言劇
廿日市市 森川抜智

高知市 細木子龍
本当の大阪弁に会う電話
正論の届かぬ孫の顔に酔い
酒のんで夢でまた飲む果報者
来てもよし来なくてもよしお正月
月曜の鹿は餌にもふりむかず

大阪市 川久保 睦子

おめでと言える家族で幸せて
火と水の女心のやるせなさ
鈴虫も今は静かに眠ります

香川県 神保 坊太郎

停年に銚子の数を決められる
流水の脆い絆のせめぎ合い
行政がゴミを豊かにして困る (豊島産廃)

和歌山市 森口 美羽

ブランコの軋みも知らぬ有頂天

幸せの波にのつてる母の海
不眠症ですとこっくり昼寝する

大阪市 尾崎 黄紅

梨の名も改め二十一世紀

戦争を知る老い知らぬ老いに檄
国鉄で来たと戦友なつかしい

唐津市 江川 青琴

怪我をしてようやく用心深くなり

入院の主を待つて植木枯れ
みーんなゼロ怖くなかった若かった

鳥取市 石上 悦子

姉弟の昔話にポチは生き

真面目過ぎ真面目不足と同じ罪
早送りしたい涙がまだ続く

福岡県 本田 忠男

散歩道ときにはかえて惚け防止
泣きじょうご泣くまで酒を吞まされる
虚勢張り綻びうめる知恵がでぬ

倉吉市 山本 玲子

電卓の謀反だろうかまた赤字
残り物ばかり食べてる昼の月
おしゃれだと言われ八十路のスニーカー

大阪府 大家 風太

以心伝心 二次会木偶の首揃う

アカンベーする孫ですがお年玉
弱音など吐かぬぞ都会を捨てた鉄

愛媛県 宮本 末子

落し蓋昔話が煮えてくる

総入歯外せば夜の顔となる
さりげなく群れを外れてゆくめだか

和歌山市 木村 親路

天神にもう落ちている絵馬がある

女性アナ目下恋愛中の声
少年Aは少年法を知っている

砂川市 武田 正美

冬の風抱いて女を眠らせる

恋愛成就お神籤よ有難う
真っ白いままで翔べない千羽鶴

岡山市 清 水 金太郎

生きてゐる証を知らず賀状買う
柳誌来る後ろから見る我が名前
無理するな言うてくれるは他人だけ

松江市 浦 辺 静 江

好景気待ち侘びている繁華街
若夫婦自由があつて太り気味
見え張つて金のリングに金の靴

枚方市 奥 田 淳 一 朗

老いふたりこつこつこつと杖の音
対岸の楽土へ渡る橋がない
太陽が好きなお子供の河川敷

兵庫県 中 野 とよ子

思い出せぬあせりが先に空まわり
一点のくろいがかうも動けない
じゃじゃ馬は走り続けていたいもの

大阪市 和 田 和 風

ロスタイム過去は帰らぬひとり酒
喜寿と古稀あつからんと露天風呂
寒波襲来いそいそ毛皮出している

横浜市 清 水 潮 華

便利だが洗濯増やす全自動
振子時計見ているだけで疲れます
出稼ぎの東京で見るネギ坊主

今治市 越 智 青 園

コーヒー一杯いつまで待たす応接間
コンバイン蟠螂の斧無視される
手抜きした料理自分が食べるはめ

鳥取市 富 山 雄 幸

老いてなおゼロ発進の風が舞う
珍客を追つて寒い風に逢う
年女グラマーぶりが牛に似る

米子市 服 部 朗 子

口に合う料理さがして病母守る
松茸に柚子ゆき届く贈り物
領収の判子はつきり押し直す

鳥取市 山 本 崇

一言を添えて見送る親心
敬老日留守番してる老いの役
早起きの一番役は電気釜

横浜市 宮 村 ちよ路

一晩でいいから寝たい孫の横
病窓も明るく峠越えたよう
夫の菊すまして並ぶ菊花展

川崎市 和 泉 見早子

恋を始める補聴器の電池換え
七回忌 身内の顔も欠けはじめ
そんな気は無いのにライバルにされる

旅させる勇氣子離れ修業中 散髪屋 一月ぶりの俺と会う エントツの煙あいなくなってくる	八尾市	山本 宏	後がないいい顔をして生きてこう 財産は無いけど遺書は書いておく もう十年は生きて行こうと妻の言う	兵庫縣	安達 厚
蝸牛ほどの速さの幸でいい 怖がると影も怖がり立ちすくむ 掌のうちを見せられ油断してしまい	島根縣	武島 ちよえ	幕われて心の憂さの掃き溜り 生け花の毒はみせないとりかぶと 携帯が流行り赤でんわの欠伸	横浜市	豊田 羊子
孫の名の箸紙ふえて初春の膳 奥方の着替えをさせている菊師 孤児京子 吾が名忘れず半世紀	大阪府	団野 恒	産地見ず買ってしまったこしひかり 出勤を隣の犬に見送られ お茶入れず白湯を飲んでる妻の留守	横浜市	菊地 政勝
お茶碗も母の両掌も小さくなり 恋人はいます映画の中にいる その時は手術ですよとかるくいう	神戸市	向井 泰子	看病の疲れ座ったまま眠り 母の看護の私を守る子供たち 通院に歩けと医師に励まされ	島根縣	谷岡 ふみ
銅鐸につられて伸びた万歩計 ころんでも上を見つめて歩こうよ おいだけで何も言わない友が来る	島根縣	福岡 博利	大先生わたしと同じ酒を飲み 名案は打ち明けるのが惜しくなり 夫には心で詫びる趣味の会	横浜市	山下 省子
気心も知れてケンカをしています マネキンの服着て鏡考える 初詣で列の後ろで子は眠り	東京都	清原 悦子	マイク持つ十八番がはなさない 悪女ぶることのひとつに酒が飲め 廃校に記念の桜だけ残り	鳥取市	森 明美

出雲市 川島和歌子

黄昏に落ち葉も急ぐ冬仕度
フアッションに心なやます服の色

大阪市 塩谷徳子

久し振り子供と共にする朝餉
朝焼けをビルの壁から覗いてる

熊本県 増田一乗

無為徒食 年金暮らし三十年
過去歴がざつくばらんにつきあえず

鳥取県 吉田孔美子

対等に酒のみだした乱である
笑顔消え責任の目が光りだす

島根県 松本聖子

安らかな寝息残してそつと去に
新聞のチラシで今日も品さだめ

松江市 松本知恵子

風邪癒えて思いのたけのバイキング
雨の日の手紙ついつい長くなり

唐津市 岩崎實

子や孫の幸せ祈り手をあわす
いつの日か一人になるというさだめ

松江市 小西素子

すきな人きらいな人も皆恋し
美しいうそもあの世ではれました

高槻市 小林一完

おはようを返さぬ大人 子が惑う
力貯め新世紀へと牛のそり

島根県 児玉幸子

金鶏がはたして鳴くか大みそか
星空の向こうに何が有るだろう

姫路市 服部一典

寝つかれぬ夜を珈琲のせいにする
逢った日も別れもあつた珈琲館

鳥取市 岸本孝子

男気を出して貧乏くじを引く
旅みやげ無難に銘菓買ってくる

大阪市 一本勇太

一徹の男で踏めない絵がひとつ
鈍と根だけで運など口にせず

兵庫県 緒方美津子

母に買う旅の土産はぼけ封じ
金婚は揺がぬ梢柿二つ

鳥取県 奥田信敬

田舎でも銅鐸景気出たと言う
揺さぶれば頭に落ちる栗の毬

大阪市 福岡雅子

去年の秋今年もおなじ秋なのに
おざなりの慰めでした恥じてます

和歌山市 和田 美寿子
だまされている振りをして柿をむく
幻か道行く人は影ばかり

箕面市 木村 天弘
無理を言う総理もつらい基地移転
出勤のホステス嫌な目で追われ

鳥取県 高尾 京
無事という重さかみしめ生きて居る
知らぬ間に蓋の合わない鍋が出来

高知県 百田 幸
このくらし何時までつづくふと思う
鉛筆が欠伸するほど辞書を引く

豊中市 湯田 敦子
古座敷 障子張り替え菊を活け
しまい湯に明日をも知れぬ虫の声

泉佐野市 大工 静子
初対面 嫁となる娘に尻尾ふり
他人様叱ってくれる情があり

河内長野市 水谷 笙子
あさつての天気言うまい今日は晴
吟詠の背景 雪が霏々と降り

和歌山県 藤井 春子
肩書きがとれて世間の窓があき
最近の鴉ネオンに憧れる

鳥取市 福田 登美
独り旅気楽な本を友にする
常識と言う物差しも揺れ動く

岸和田市 亀井 皎月
昨年と変らぬ願ひ初詣で
建前も本音も揃う初春の膳

倉敷市 家守 政子
生き甲斐は孫の話題に夢をのせ
主婦業もあの手この手で忙しい

鳥取県 橋谷 静江
持ちすぎた欲が重くて動けない
定年の近所をあまり知らなすぎ

横浜市 丹下 智洋子
人の増えまた減り駅が呼吸する
ぎりぎりに値切れば手抜きする工事

八尾市 井尻 民子
遅いかな私も不倫してみたい
猫にだけ変にやさしい夫です

羽曳野市 山本 たけし
今日もまたお蔭様でと言う余生
真っ昼間 二足草鞋が蹴蹴く

和歌山県 尾田 綾子
真っ当に生きて流矢に当たり
路地裏の情けに弱い片手鍋

富田林市 欄 智久

低金利聞いてどうなる訳でなし

親孝行らしくせぬまま年を越す

枚方市 森 本 節 子

風葬も鳥葬もよしあこがれる

早口は苦手返事もそこそこに

大阪市 島 崎 孝 一

ワイドショー バカにしながら見てしまふ

孫叱る言葉は親に向いている

寝屋川市 坂 上 高 栄

来年も私はここに居るだろう

脳味噌の芯まで寒くなる話

倉吉市 高 多 博 丈

ストレスを洗った酒で二日酔い

血統書付きの小犬で賢そう

和歌山市 武 本 碧

母の押す壺は確かで温かい

それなりにライバルも居るかたつむり

高槻市 江 原 秀 夫

あなただけ頼りと妻も年を取り

長生きの余慶地ビール飲みくらべ

米子市 池 尾 保 子

四階の四号室は霊安所

社説までゆっくり読める定年後

大阪市 宮 本 奴 夫

来年も来いと熱海の月が呼ぶ

新幹線 旅の買う癖わさび漬け

大阪市 鈴 木 トヨ子

秋の灯に広げて旅の予定表

家の菊好きな方向き咲いている

倉敷市 戸 田 正 志

悪口を言って自分の悪を知る

啄木のノートもらって詩が生まれ

倉吉市 大 下 智 子

帰宅して毎日集う母の居間

夫婦間慢性化して味がない

尼崎市 向 井 末 貞 一

ワンカップひっかけ帰る休肝日

旅三日 孫の悪たれ夢に聞く

出雲市 梅 ミツエ

トイレでも指折り数え五七五

西の空真つ赤に染めてる出雲ドーム

大阪市 杉 澤 汀

もう直ぐがなかなか遠い山歩き

善意の席もう座ってもよい歳か

大阪市 田 中 節 子

打ち解けて手の届かない距離を知る

どうせなら自筆で欲しい年賀状

隙間風 仏間を通り忍び寄る
嫁迎えそつと教えた京茶漬け

池田市 木村 一 笛

一人居に慣れて夕餉の豆ごはん
ばつばつと湯気が恋しい鍋料理

兵庫県 高見 末 野

結果論だけが大手を振って来る
蟻辞めて今もネクタイ外せない

鳥取市 山口 芦 心

天高く馬も気になるオゾン層
素うどんでブランド商品買いあさる

松江市 松浦 登志子

見合席お転婆娘かしこまる
年始客避け三箇日旅に出る

滋賀県 中 宗 明

夏越した金魚も冬に身構える
虎の子の範囲で買える物選ぶ

和歌山市 吉村 さち子

神様と貝が住んでる銀の宿
峠越え人の情けに泣き笑い

唐津市 林 公 一 朗

老いの風 青春の色身にまとい
濡れ落葉赤く色づきどこに行く

鳥取県 宮脇 道 子

汚すまい一万色の秋化粧
土を踏むはだし百歳まで生きる

島根県 岩田 三 和

履きおろしちよつときついが好きな赤
胸のうち読んでる医者の方箋

米子市 小塩 智加恵

ライバルが居るので老いも精がつき
米寿越えまた活気づく初日の出

兵庫県 仲井 素 水

丸い背に農の苦勞が詰まってる
真っ先に箸を伸ばした茄子の艶

静岡市 増田 扶 美

休日はお決まりコースでモーニング
コーヒーの香りにゆれている笑顔

枚方市 二宮 紫 鳳

折々の季節の味をかみしめる
習わずも忘れる事はうまくなり

鳥取県 国森 武 子

歌よりも衣裳で競う歌謡歌手
秋雨の就職戦線まだ晴れぬ

羽曳野市 森田 四三郎

二泊目は家が恋しい一人旅
老いふたりもて余してる冬の夜

兵庫県 谷田 多美子

和泉市 横山捷也
約束の時間に疲れコンバクト
家計簿に景気回復あらわれず

大阪市 三浦千津子

入院で命いという日が続く
届かない思いがだんだん深くなる

東大阪市 松山隆

宅配の地酒に期待こめてあり
謎とけて通行止めの赤ランブ

交野市 山川日出子

人間界心情表現書画詩歌

初体験烏賊の夜釣りに伝馬船

和歌山県 村中悦男

うす笑いイエスカノーかはかりかね
無口者やはり賢くみえてくる

自選集 (追加)

児島与呂志

信じてる神追いつづけてる祈り
両の掌を合わせて心から拝む
もう一度元の昔をただ祈る
鐘をつく心やすらぎふと覚え
川流れ見つめた過去を振り返り

渺湖抄の選者交代 小出智子さんの病氣静養のため、
一月号から当分の間、八木千代さんと交代します。

川柳塔社

第二回はがき歌全国コンテスト

形式 短歌(五七五七七)形式の便り

内容 誰かに想いを伝えるもの(近況報告・ラブレター・見舞・お礼・お詫びなど)

応募法 はがきに縦書きで、他品とその宛先(父へ、母へ、友へ、恋人へなど)を書き左記へ(はがき一枚に一作品)

応募先 〒790-191 松山中央郵便局私書箱三三四号

締切 1月20日(当日消印有効)

第17回 ときせん賞作品募集

雑詠2句(未発表句)

選者 大野風柳 橘高薫風 寺尾俊平
去来川巨城 小松原爽介

締切 1月末日

発表 『時の川柳』4月号誌上

賞 ときせん賞1名
準ときせん賞2名・佳作7名

投句料 誌友 500円(定額小為替)
誌友外 1000円(発表誌呈)

投句先 〒658 神戸市東灘区渦森台2-10-206 河島いち子宛

選句方法 無記名清記の上、選句。1句ごとに合計点で順位を決め、上位10句を入賞とする。

時の川柳社

沙湖抄

八木千代選

がらくたを整理するまで命乞い
エレベーターみんな無言で上を見る
靴の型ぶざまなままに死にもせず
膝曲げて曲げてエネルギーをためる
妻の絵に俺の知らない滝がある
桃の木を植えてどなたと勝負する
暗がりて耳が鳴ってる聞いてやる
どんぐりころころ森を引き継ぐ決意する
秋森や自分の背中見たくなる
やがて冬になる錯覚のてのひら
杭を打ち主語はしっかり主張する
無関心という攻撃を受けている
でもいいさやっぱり月が出てくれる
人間でいるから迷う事多し
昔のままでないがふるさと水が湧く
母の義務だらう天狗の鼻を折る
冷静な木偶をある時見直した
川向こうから手招きされる身勝手な
天高く号令かける人もなし
漱石をまた読んでみる確かめる

八尾市	高杉	千歩
兵庫縣	大谷幸次郎	
尼崎市	田中	薫
宝塚市	永田	暁風
松原市	小池しげお	
鳥取縣	武田	帆雀
寝屋川市	森	茜
西宮市	亀岡	哲子
大阪市	西出	楓楽
吹田市	山本希久子	
米子市	林	荒介
唐津市	久保	正剣
鳥根縣	松本	文子
出雲市	竹治ちかし	
尼崎市	春城	年代
寝屋川市	籠島	恵子
米子市	小西	雄々
東京都	山口	新子
藤井寺市	田中	透太
吹田市	栗谷	春子

どんなポーズももう間に合わぬ枯葉散る
地震のように起きてバタバタ出て行った
傷のある手帳を懷で庇う
ひっそりと妻が立つたら起こる風
規則正しく水面を乱す鹿威し
響くもの追いかけている冬の耳
すぐ会えるから手を振って別れとく
蒼天に昨日のわたし抛り上げ
有り得ないことも言えぬ月の波
もういくつ開けたでしようか玉手箱
私情ばかりをはさむと神も眩暈する
すこし汚れた右の手をじっと見る
一月やワインレッドのシャツを買う
無駄が多くて排水溝がつまる
舟形に梨もりんごも剥き終える
笑いころげて天から降ってきた睦月
あかつきの夢に母来て歌いけり
スリッパを変えて淡彩画を脱ける
夫婦ふたりの部屋の正確なる時計
朝霧が地から明けゆく蝶の羽化
鎌を振る姿いちばん合っている
悪人になりたい夢は持っている
喪の帯を枷に女の長い冬
台所の譲り合いから出来た溝
一粒のルビーの主張石榴割る
読みさしを机に置いて旅に出る

藤井寺市	高田美代子
岡山縣	小林
米子市	妻正子
八尾市	宮崎シマ子
寝屋川市	江口
米子市	青戸
和歌山市	川上
西宮市	奥田みつ子
海南市	三宅
和歌山市	榎原
富田林市	池
鳥取縣	土橋
豊中市	田中
米子市	政岡日枝子
和歌山市	福井
米子市	林
和歌山市	木本
西宮市	牧淵富喜子
和歌山市	田中
米子市	林
弘前市	齊藤
松原市	玉置
倉敷市	小野
和歌山市	福本
松江市	松浦登志子
守口市	森川まさお

鬼ごっこ 鬼がわたしを追ってこぬ
 心臓に悪いおまわりさんの笛
 その場しのぎに心の位置が上下する
 土踏まず乾いて海に辿り着く
 炎のいろを軽石すっかり忘れている
 七人の敵と背合わせして弾む
 嬉しいのになぜか涙が出てしまふ
 右手には希望を握る赤ン坊
 喝采の中でまंगाの顔になる
 疑えば誰も怪しくなる 哀し
 不意をつくように広告ばかりくる
 大衆の中の不気味な無口者
 じつくりと待てば小骨が溶けてゆく
 神のお告げだ借金は忘れよう
 私の手離れて手毬よく弾む
 落ち込んで仮死状態になる眼
 壁を突き破ると空も日本晴
 鬱の日の電車いっぽんやり過ぐす
 存在感あるかあさんのいなりずし
 米櫃が冷えておりますお父さん
 梨食べて必ず生きる新世紀
 まだともう心の中でくり返す
 本当に肩の力が抜けますか
 酸欠のまんま風船どこへ行く
 ひとりの音になれて雑音うるさすぎ
 片方にいつも合わして揺れている

綾部市	藤田	芳郎
鳥取県	新家	完司
富田林市	片岡智恵子	
出雲市	園山多賀子	
米子市	石垣	花子
八尾市	宮西	弥生
西宮市	西口	いわゑ
鳥取県	谷口	次男
岡山県	矢内寿恵子	
唐津市	浜本	ちよ
鳥取県	西原	艶子
鳴門市	八木	芳水
和歌山市	山根	めぐみ
鳥取県	鈴木	公弘
和歌山市	川上	富湖
和歌山市	堀畑	靖子
宇部市	平田	実男
米子市	白根	ふみ
和歌山市	古久保	和子
鳥取県	土橋	はるお
寝屋川市	井上	すみれ
鳥取県	林	露枝
美禰市	安平次	弘道
米子市	田中	亜弥
大阪市	鍛原	千里
芦屋市	黒田	能子

人生画枯れ木も一つ添えておく
 野良犬が地球の恥部を知っている
 すっとんとたしかに秋の陽が落ちた
 風百態いくつ峠を越えたやら
 二重になつてもいいさとにかく手を打とう
 貧弱な胸へいつでも本を抱く
 あたたくなくならうならうと刺を抜く
 もの言わぬ男と長いながい海
 内緒金たっぷり 下手に使えない
 ゆっくりでいいよ働く時計たち
 ライバルも僕も眠った終列車
 ちよっと目をそらせば背くうろこ雲
 他人のひみつをちよっとついついてみたくなる
 咲きおくれ陰で小ぶりに秋を咲き
 おそ蒔きの花もきれいに咲いている
 太陽の当たらぬ場所にある紅葉
 ためらつてゐる娘の背を押してやる
 芸無しが順番までに消えていた
 みずからを裁く尺度は見つからぬ
 せわしさがいい按配な子との距離
 日向水亡母のやさしさ今解り
 追伸のペンは時どき翔びたがる
 履き慣れた靴がつまりき始めている
 居る場所を確認させる古美術
 いたずらで押してたベルが鳴り出した
 なにげなく見えた心の水たまり

泉佐野市	稲葉	洋
鳥取市	春木圭一	郎
今治市	月原	宵明
羽曳野市	吉川	寿美
米子市	光井	玲子
鳥取県	石谷美恵子	
鳥取県	岩崎みさ江	
兵庫県	遠山	可住
大阪市	本間満津子	
堺市	宮本かりん	
札幌市	三浦	強一
今治市	村上久美子	
八尾市	村上ミツ子	
大阪市	渡部さと美	
八尾市	高橋	夕花
富田林市	藤田	泰子
鳥取市	植田	一京
倉吉市	米田	幸子
枚方市	前	たもつ
横浜市	保田	絹子
西宮市	門谷たず子	
香川県	木村あきら	
米子市	小塩智加恵	
今治市	渡邊伊津志	
鳥取市	前田	一枝
砂川市	大橋	政良

気がかりで毎日めくる死亡欄
選択の自由に迷う堅い椅子

温度差をつけては叱る子の躰

ホームドラマのみかん家族を知っている

深呼吸まるで肩の荷降りたよう

糠味噌のお喋り相手しています

這ってでも生きる意欲はまだ捨てぬ

北からの手紙の音こぼす

ありがたいお経で正座くずせない

鎌倉で丸いポストを見つけた

古い二人初春の厨のひっそりと

おばあちゃんの話も聞いてあげなくちゃ

往復が出来れば見たい黄泉の国

コースのひとりでプリマ取りなり

許しつけてやがて陽気な母でいる

どこまでも自分の過去をしょっている

図書館で頭の隅も掃除する

四畳の書齋で辞書を並べかえ

設計図 私の部屋が書いてない

空振りの後に自分がよく見える

執拗な生への証モミジの朱

色めがね かけずに見たい白い雲

姑の忌に鶴をいっばい折っている

夕暮今日一日の無事照らす

お互いに笑うしかない物忘れ

折々につけては昔話など

倉吉市 淡路ゆり子

岡山県 山本 玉恵

倉敷市 田辺 灸六

貝塚市 池田寿美子

和歌山市 宮口 克子

福岡県 本田 忠男

和歌山市 山田 高夫

弘前市 佐治千加子

鳥取県 田村きみ子

大阪府 辻川 慶子

和歌山市 岩本美智子

大阪府 神夏磯典子

横浜市 丹下智洋子

広島市 流 奈美子

岡山県 福原 悦子

倉敷市 戸田 正志

横浜市 川島 良子

唐津市 仁部 四郎

唐津市 松本 圭

和泉市 中川 楓

香川県 川崎ひかり

茨木市 堀 良江

尼崎市 長浜 澄子

尼崎市 春城武庫坊

和歌山市 吉村さち子

米子市 足立由美子

何時受けた傷かと傷に問いかける

針目からこぼれぬように返し縫い

引き潮にそっくり載せる今日の罪

残照に賭けるわたしの持ち時間

弔辞ではとても偉大な人にする

酒二合肩の力を抜く量だ

錆びたまま開けたことない毒の蓋

第九聴く頃わたくしの誕生日

携帯電話にブライバシーを盗まれる

失速の危険もあった夫婦舟

深呼吸悩む吐き出し吐き出して

頼られて元気の素をもらっている

頼られて頼って俺の座が温い

好き嫌いなくす手品は微塵ぎり

まっさきに好きな子探すかくれんぼ

酒飲めばいつものことの繰返し

岡山市 川端 柳子

出雲市 石倉美佐子

弘前市 一戸 ツネ

弘前市 高橋 岳水

鳥取市 岩原 喬水

弘前市 相馬 銀波

京都市 都倉 求芽

大阪市 町田 達子

堺市 桜沢あかり

和歌山市 青枝 鉄治

兵庫県 中野とよ子

堺市 小西 小雪

倉吉市 奥谷 弘朗

寝屋川市 平松かすみ

大阪府 榎山 隆盛

唐津市 浜本 治幸

高杉千歩さんの命乞いにはひきこまれます。私もだいぶん生きて

きたように思いますが、振り返って整理してみれば宝と信じていた

ものが今はがらくた同然。残してゆくには恥ずかしく、命あるうち

に執着をきっぱり捨てる気になれた有難さを思えば、この命乞いは

償いのためです。大谷幸次郎さんのエレベーターはあの箱に閉じこ

められた時の不思議な心理がでています。便利さ故に自分の選択で

利用しながらいつときも早く解放されたくて地階へ降りる時だって

眼を上げていますもの。田中薫さんの靴の型はぶざまで哀しく愛し

く、来し方の凸凹道そのものです。それでも死にもせず破れもせず

一緒に長らえた靴。他にどんな靴が履けましようか。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 12月号から

森井 菁居

シルバーに座って何となく淋し

朝倉 大柏

「ゆずり合いの席」にまだ抵抗があるのである。それが「何となく淋し」と言う表現になった。でも栄枯盛衰と言うのではない。肩書きをぬがせば曲る父の背な

北川 とみ子

「肩書きをぬがせば」とは老練な表現だ。省略法を如何に駆使するか!! 十七音字の難しさだ。

思い直して父の後継ぐ鉤研ぐ

本田 忠男

一度は憧れた都会の灯。しかし……と思い直したと言うのである。「職人大学」を設置するというニュースもある昨今、微笑ましいではないか。

三度目の入院となる空の青

榎谷 郁子

入院も三度目となれば「シヨック」が「度胸」に変わるから不思議だ。「空の青」は実感であらう。

バーゲンのちらしに主夫も来て並び

村上 久美子

最近流行の「主夫」業がテーマ。現役を離れてからのささやかな「生き甲斐」なのである。シヨッピングに男女の区別はない。百までも生きるつもりの木を植える

菅田 かつ子

記念樹を節目節目に植えて安らぐのが凡夫である。出生、結婚、ETC…。それにしても「百までも生きるつもり」を閻魔が聞けばきつと笑うだろう。

泣くも一期 笑うも一会雲流る

今岡 貞人

句の構が上手い。下五でキリリとまとめた作品。

縄のれん弱虫ばかり寄って来る

北川 とみ子

家を一步出れば七人の敵などとは殿方族の言い分。負けた男が集まる縄のれん。酒を断って見て男のエゴだったことに気付くのだ。

いつの間にか戻れぬ道へ来てしまひ

塩路 よしみ

人生句である。縁あって結ばれた夫と越える夫婦坂……。もう始発駅へ戻る必要もないだろう。

丸腰で失うものはない

村上 剛治

本来無一物と言うのではないか。だから捨て身になれるのだ。

飲めばまた悲しい酒を唄いだす

森 明美

呼び水に誘われて胸の「ひばり」が目を感じますのである。酒徒は哀しき者なるか……。うかつにも齢を尋ねたクラス会

円増 純子

クラス会に集つひととき「青春」が戻る。でも、そのポートレートはセピア色。若ぶれて見えようが、齡取って見えようが、所詮同級生なのだ。

死んだふりするゴキブリが赦せない

田辺 鹿太

死んだ振りしても熊は見抜くと言うが、ゴキブリの演技は人間を欺く。でも非力なゴキブリが生存権を守るにはそれしかない。

荀香のむ

西出楓楽選

許されてからの痛みがひどくなる
見得をきるための花道探してる
遊ばなきゃ日差し短くなるばかり
夕立のように泣けたら楽だろう
美しい思い出ばかりペンの垢
昔話すると力が湧いてくる
蜘蛛の糸わたしの悪もぶら下げる
信号の手前で妥協しておこう
豊かさに慣れて無色の虹となる
それぞれの音それぞれの朝が出る
少し足伸ばそう秋の好奇心
わたくしを守るににくぶら下げて
遮断機の向うで風も止まっている
笑わせておこう無視よりまだから
運勢がよくて人生決まらない
うかつにも影を忘れて森を出る
形相を変えても闇はたじろがぬ
胸の刺抜かぬと深くなる孤独
抜け殻の胸に喰い込む夕茜

和泉市 中川 楓
弘前市 佐治千加子
和歌山市 堀畑 靖子
鳥取県 岩崎みさ江
富田林市 藤田 泰子
鳥取県 田村きみ子
和歌山市 川上 富湖
羽曳野市 芦田 絢子
倉吉市 米田 幸子
鳥取市 植田 一京
吹田市 山本希久子
和歌山市 木本 朱夏
米子市 政岡日枝子
和歌山市 森口 美羽
大阪府 辻川 慶子
羽曳野市 吉川 寿美
松江市 安食 友子
香川県 川崎ひかり
岡山県 山本 玉恵

十三夜 全部告白しましょうか
おかしみをこらえ仁王の顔になる
人間も時計もねじの巻き加減
鳳仙花の種子がはじけている真実
てっぺんのばら一輪が笑っている
父母の樹を揺すっても愛満たされぬ
ひっそりと暮しほっこり子を想う
ワープロに語らせておく独り言
近道が最短距離と限らない
自画像に聞かせるクラシックな音色
おくれ毛が少し乱れてドラマめく
口げんか三時のお茶を入れなおす
にじ色の怒涛にさらす私の冬
食べものの列につながるのに弱い
アルバムの中の春は笑いこけ
足元を見忘れていた督促状
若かったで済ます未熟な日のことを
年金をつかいこなして妻の冬
わたしからわたしへ小さなほめ言葉
よく見える眼鏡親子のきずな読む
背伸びしても私はわたし初日記
愛された遠い記憶は虹の色
紫の襷紗に包みこむ野心
残照は叶わぬ夢のあがきかも
狂わない時計に夫婦の飯が炊け

横浜市 近藤 道子
西宮市 西口いわゑ
倉敷市 小野 克枝
熊本市 永田 俊子
和歌山市 福井 桂香
和歌山市 福本 英子
八尾市 大内 朝子
岡山県 福原 悦子
堺市 桜沢あかり
米子市 林 瑞枝
今治市 塩路よしみ
八尾市 高橋 夕花
米子市 中井 ゆき
西宮市 牧淵富喜子
川崎市 和泉見早子
大阪市 神夏磯典子
大阪市 町田 達子
鳥取県 さえきやえ
大阪府 板東 倫子
米子市 小塩智加恵
西宮市 奥田みつ子
松江市 佐野木みえ
和歌山市 吉村さち子
今治市 村上久美子
西宮市 門谷たず子

五十回忌 今なら死なず済むものを
秋は秋 楽しむ事が手に余る

OとAいろいろあつて半世紀

等身大に暮らす小銭の鳴る財布

平坦な道ばかりなし娘を泊めず

目覚めよく起きた日お洒落したくなる

子と描いた青い図面がかすれ出し

身のほどを知ってひたすら針を持つ

話し上手 喜び上手で日を綴る

転んだら拾う石コロ一つでも

八十を過ぎて奥手ではすまぬ

談論風発 扉を開く酒がある

ときどきは夫の背なを越えてみる

終止符をどこでうとうと神の掌に

まだ空気にはなれないでいる二人

帳尻を無理やり合やす年の暮れ

ふるりの宝 自然が消えて行く

昨年はやつれましたとカイワレ菜

化粧して自分を騙すひと騙す

灯消す明日を信じたそば枕

月夜葎たべてくれとは言つてない

独りよがりの鏡ときどき自惚れる

まあまあの宿と紅葉が慰める

お助けがほしくてたどる蜘蛛の糸
どんでん返しだけがたよりのカタツムリ

寝屋川市 岸野あやめ

倉吉市 淡路ゆり子

松江市 浦辺 静江

和歌山市 古久保和子

和歌山市 山口三千子

横浜市 秋元 和可

横浜市 後藤 早智

和歌山市 榎原 公子

大阪市 鍛原 千里

和歌山市 桜井 千秀

吹田市 栗谷 春子

出雲市 園山多賀子

鳥取県 西原 艶子

米子市 青戸 田鶴

芦屋市 黒田 能子

鳥取市 福田 登美

鳥取県 石谷美恵子

寝屋川市 井上すみれ

横浜市 丹下智洋子

今治市 野村 清美

鳥取市 坂田和歌子

富田林市 片岡智恵子

横浜市 保田 絹子

兵庫県 中野とよ子
寝屋川市 籠島 恵子

あまりにも月がよいのでポストまで

遠い人にも電話する秋の夜

悪口いうはずないけど遠い耳

ちよっぴりのつもりが長い立ち話

くつきりと眉かき女戦場へ

アールヌーボの渦に惹かれた夢ごこち

催促しない約束守る人だから

紙コップ内緒話の糸もつれ

去年より腰の曲った三面鏡

プレゼントしたネクタイで逢いに来た

その先は言うな言つてる咳ばらい

車椅子 心配そうな昼の月

茶漬けのリズム時には狂う二人ぎり

茨木市 堀 良江

横浜市 明渡トヨ子

大阪市 渡部さと美

鳥取市 前田 一枝

横浜市 宮村ちよ路

貝塚市 池田寿美子

大阪市 本間満津子

和歌山市 福重 美子

青森県 富士 トキ

鳥取県 小西五十鈴

鳥取県 権代 康女

河内長野市 植村 喜代

米子市 光井 玲子

楓さんの句―人のやさしさが、ことと次第によってひどく負担になる場合がある。それでは、許しが得られなかったら―それもまたつらく悲しい。善人にとって生きるとは、常に痛みを伴うものであろう。千加子さんの句―誰もみな理由があつて生かされている。だから、どんな人にも長所がある。ただそれを

アピール出来るか否かは、花道。をうまくみつけれられるかどうかの問題だろう。比喩の巧みにひかれて、上位にいただいた

靖子さんの句―このような句に出会ふと、思わず「同感!」と

声を上げてしまう。上五「遊ばなきや」が効果的で、迫力のある句に仕上がつている。みさ江さんの句―悲しみの極限では涙

は出ないとか。夕立のように」という単純な表現から、作者

の悲しみの深刻さが伝わってくる。

碗

松本ただし選



歲月を重ねた碗が重くなる
不揃いの碗に家族の歴史みる
碗伏せた胸にはついになれぬま
わんこそば腹八分目とうに越し
初春を祝うお碗は味噌仕立て
碗の艶消えても家紋背負うてる
味噌汁のお碗の蓋にははがいて
一億を乗せたお碗が沈みそ
孫増えて蒔絵の碗は蔵の中
お雑煮の碗三代の艶で生き
我が家にはプラスチックの碗がある
碗とれば故郷映す丸い餅
格式を家代々の碗に見せ
料亭の碗が見ていた浮き沈み
せんさいの碗が崩した黙秘権
伝統の碗金箔の紋どころ
漆碗の丸み掌素直なり
引出物の碗が溜ってバザー行き
少年の壮志を乗せた碗の舟
碗だねに秋浮はせるお懷石
赤タシのメシ屋の碗が歪んでる
杯は小さいと碗の蓋に酒

荒介 早智 省子 一風 周信 あずき 雅城 晋 さん子 典子 圭 晴翠 好仁 好恵 京子 英子 千代 美子 朝子 ちよ路 度 甚一

春慶塗りのお碗に亡母を偲ぶ春
俺よりも味を知ってるこのお碗
しあわせの暗示をくれる碗の湯気
おかわりのお碗も育ちざかりです
祝酒朱塗りの碗が生きてくる
ボロ倉に初代が買った碗がある
年明けにお碗が丸い誓いさす
お碗だけ乾いて猫は帰らない
玉子割るお碗の中にある思案
汁碗の丸さは母をまだ越せぬ
一碗の酒が別れとなる浮き世
手のひらで可愛がられているお碗
山頭火温いお碗が恋しかろ
冷え切れぬ女心の浮くお碗
爆弾をお碗の中に仕込んどく
佳

とれないで辺り窺う碗の蓋
子が巢立ち碗も無口になつてくる
一碗の粥に合掌する修業
人情がお碗の底で干涸らびる
俺よりも由緒正しい碗がある
人

輪島塗り日本海の音がする
地

煩惱をお碗の中にふせておく
天

碗の塗りも剥けて阿吽の共白髪
海老池 洋

手に余る碗持たされた嫡出子
軸

祝

清水絹子選



お祝いは心をこめて握手する
祝う日も泣く日も人は酒を飲む
変りなく祝うふたりの雑煮箸
修羅いくつ越えて来たらか祝い舟
花言葉探して祝う老いの春
いつまでも祝ってほしい誕生日
豊作の祭太鼓を聞く案山子
車ではなくと書いてる祝賀宴
豊作を祝う地唄の冬仕度
乾杯のポーズの写真増えて春
祝当選聞いたタルマの目がうるむ
年金に分相応のおん祝い
下手でよし命名式の名は太く
叙勲受け猫に小判の感もあり
打楽器の音に合せて祝いあう
祝われて鏡の中の古希の顔
ブライドも名も捨て二度の職祝う
祝杯に嬉し涙も共に空け
冬が来る快気祝をしておこう
ささやかに家族で祝う内定日
激励を師から賜わる祝い酒
柄合せする祝い着の裁ち鉄

和歌子 高明 高美代子 今日子 羊子 圭一郎 久仁於 あきら 子龍 哲子 寿美 杜三 德三 荒介 悦男 雄幸 芳水 仁緑 一壺 アキ 勇太

赤飯で女を祝う母ごろ

親と子がひっそり祝う稲の秋

ひと泣きして祝いの膳に座らせる

棟上げへ嬉し泣きする父の歌

披露宴亡父の席にも祝ひ膳

本番はどうなるものか前祝ひ

翔んだ娘の嫁いだ夜の祝ひ酒

やっと春今日は目出たい内祝ひ

祝われる主役が愚図る初節句

千歳飴引きずっている赤りボン

主役もつ疲れ切っている七五三

祝電披露大物順に誤差があり

嫁取りへ島中総出の祝いごと

村中が祝う久しい嫁がくる

定年の膳に手のひらほどの鯛

住

じいちゃんが祝儀袋をまた探す

お祝いがいつか来る日へ編んでいる

お祝いの席と知りつつ泣き上戸

許す気の母はことごと小豆煮る

精いっぱい母の小さなし袋

人

祝い唄一番下手でうけている

地

祝オリックス神戸の神も立ち直り

天

お七夜の主役バンザイして眠り

輔

今日の日を仏と祝う朝のお茶

まぶしい

舟木与根一選



鬼瓦二代目の眼にまぶし過ぎ

夢抱いた子の輝きのまぶしくて

まぶしくて父は見えない角隠し

幸せさんイミテーションまでまぶし

乱反射ガラスの街も夜が更ける

お陽さまに申し訳ないサンクラス

手のひらに掬えばまぶしこしひかり

ライバルがまぶしい時は気をつける

如月や鬼にまぶしい豆の音

白日に晒すと潤む埴輪の瞳

勲章もない父の背がまぶしくて

少年の歯のまぶしさへ許す気に

太陽にうつむいている保釈金

他人の飯食べて親父の背がまぶし

父さんがまぶしく見える作業服

住

少年にまぶしい女の子がひとり

かなしみを返すまぶしい銀世界

分家にはいつもまぶしい鬼瓦

母子手帳まぶしいものを抱きしめる

まぶしさは銅メダルでも変らない

人

庵寺はまぶしきものも無く暮れる

地

初産の妻はまぶしいほど光る

天

宝石のまぶしき知らぬ母の指

輔

帰省した幼馴染みのニールック

杜 的

一 風

典 子

荒 介

高 明

隆 風

虹 汀

岳 水

可 住

あずき

重 人

ちかし

たもつ

宵 明

螢

しげお

寿恵子

正 圃

明 水

和 重

久 保

正 剣

初歩教室

題 一 朝

吐 田 公 一

おめでとつございます。どうぞよろしく。

この欄を担当してふと気付いたことだが、添削を当てにしているの投句が多いのではないかといいことである。これは「初歩教室」である以上、当然と言えばそれまでだが、本来はご自身の作品を評価してもらう場、つまり他の課題吟と同じで「これでもか、これでもか」という意欲的な態度で臨んでほしい。それとこのほかの課題吟や句報に載ったその方の句を拝見すると、感心させられることがあるにもかかわらず、初歩教室に限ってなおざりになっているように見受けられる。安易に考えず、ご自分の作品の価値を問う意気込みで創っていただきたい。

添削句

次の2句は11月号に当方のミスで出題が、「窓」となっておりましてので、特に取り上げさせていただきます。

- 全開の窓へ待つてる青い鳥
佳句（青い鳥といえば普通「探す」だが、窓に結びつけて成功）
あき子
- 独り住む北の小窓は寒い風
「北」は不要。独り住みの侘びしさや、世間の風当りなどを詠み込めば
トミエ
- 独り住む小窓に強い風当り
以下課題吟「朝」の句
- 朝が来たもう忘れよう悪い夢
原句では単に悪い夢を見たというだけ。ドラマ性「人生の中で実際に起きた悪夢に置き換える思考が必要では」
正志
- 悪夢から逃れる夜明け待ち焦がれ
朝酒を飲まねばならぬわけがあり
専門
- 朝酒を飲まねばならぬわけがあり
説明句以前の問題。「わけ」を具体的に
専平
- 朝酒で昨夜のドジの憂さ晴らし
今日こそは頑張りますと顔洗う
公一朗
- 今日こそは頑張りますと顔洗う
他の2句共に大上段に振りがぶりすぎ。もっと肩の力を抜いて
- 顔洗いながらも今日のスケジュール
御来光記念に朝日撮るカメラ
晩翠
- 御来光記念に朝日撮るカメラ
御来光といえば朝日のこと。同義語
- 御来光撮った記念の伊勢の旅
三文の徳を信じて早く起き
武治
- 三文の徳を信じて早く起き
狸諺そのままでは川柳とならない。
武治
- カゼ引かぬ徳を早起きからもらう
- 間引き菜の一つ菜ふえて朝の膳
恒
- おかずが一品増えたその妻の心配りを
一品にも妻の気配り朝の膳（上六）
- ミニ菜園夜盗を探す冬の朝
「夜盗」は「夜盗虫」のこと
きん子
- ミニ菜園句を味わう朝の膳
朝起きるなど死語になる二十四時の街
都子
- 朝起きるなど死語になる二十四時の街
内容はいいが破調すぎる。詩としてならよいが、川柳としては言葉の絞込み込むこと
尚子
- 朝起きを忘れた二十四時の街
母さんの笑い声で朝が来る
中七にすれば語呂がよく佳句
- 母さんの笑い声で朝が来る
母さんの笑い声から決め
康子
- 朝食は夫出勤の後と決め
語彙を片仮名に換えるだけで川柳らしく
康子
- ハズ送り出して朝食とる日課
朝やけに急かされながら大根抜き
玲子
- 朝やけに急かされながら大根抜き
急かされる理由は朝の味噌汁の具に
玲子
- 抜きたての大根刻む朝の汁
朝一番病妻の声聞き安堵
一典
- 朝一番病妻の声聞き安堵
病妻への思いやりがよく表現されていていい。ただし少しスパイスが不足
- 病妻の声に安堵の朝の粥
早朝の散歩一枝お花もろてくる
多美子
- 早朝の散歩一枝お花もろてくる
少し漢文調で固くなるが
多美子
- 花一枝朝の散歩にある余慶

○朝風呂が食欲増すか旅の膳 捷也

「増すか」がひっかかる

▽朝風呂が食欲そそる旅の膳

○二十一世紀の朝日を拝む幸欲しし トキ

上九にしくても。下五に絡りなし

▽次世紀の初日を拝むまで生きる

○初日出湯舟で拝む共白髪

共白髪もいいが、こんな贅沢バチが当らないかナ、という気持を込めれば

▽勿体なや湯舟で拝む初日の出

○おはようが素直に言える朝の膳

道子

中七諍いのなかった日の朝のことだろうが

▽おはように今日も元氣な朝の膳

○百選の化粧が揃う朝の駅

少しこじつけのように思いますがー

▽OLの化粧が競う朝の駅

志華子

○スニーカー朝のコースの露を踏む

川柳は人間諷詠。下五に代る言葉

▽スニーカー朝を楽しむコース選る

美寿子

○居酒屋で話はずんで朝帰り

説明句で相手の琴線に触れない

▽二日酔い下げて夫の朝帰り

よし子

○ずつしりと重い朝刊金曜日

土目当ての広告が一ぱいの朝刊に目を付

けられた点立派。惜しいのは言葉の配列

○朝になり夕べの喧嘩忘れてた 省子

単に忘れたという状態だけではなしに、そ

れに至る過程、例えば些細なことだったと

か、忘れっぽい性格とかに焦点を当てると

句が生きてくる。

▽諍いを朝まで持てぬ輪となり

崇

○早朝にお茶が立ったと妻の声

奥さんの嬉しいような声が聞こえるいい句で

すが、お茶が立つー解らぬでもないが、茶

柱の方が無難では

▽早朝に茶柱立ったと妻の声(中八)

俊一

○五円なく朝参りせん八十姥

作り替えてみると(創作)

▽朝参り欠かすことなく老母達者

陸子

○目覚めると去年と違う朝日なり

違うのは心のあり方。その変化を詠む

▽新居から見れば朝日も違って見え

静子

○朝出合う楽しめは娘のような氣に

熟年の恋も娘の恋も恋に変わりなし

▽ドキドキと毎朝出合う人がいる

幸次郎

○朝の章先ずキツチンに明りつけ

言葉の配列を変えただけです

▽キツチンに明りをつける朝の章

佳句

明石港橋と魚で躍る朝

今朝の紅少し濃いめを勧繰られ

言い過ぎてこたわる朝の夫婦箸

エプロンをかけて平和な朝が来る

オベ以来朝寝朝湯を許される

(回復への喜びが胸を打つ)

ポケットを確かめ鍵つ子朝を出る

(鍵つ子を如実に捉えている)

山越えたいのちに朝日降りそそぐ

(快方への心情がよく吐露されている)

茶柱が立つてうきうき朝を出る

(躍動が伝わってくる)

聞き流す妻の小言や朝歩き

(切れ字「や」がやや気になるが)

一病を持って散歩の朝の靴

(一病と朝の結び付けがいい)

万歩計朝日をあびに動き出す

味噌汁の匂い朝を告げにくる

(匂いが一中七にすれば秀句)

葱きざむリズムで明ける母の朝

(葱と朝ー過去に類想句はあると思うが)

インクまだ香る朝刊読む日課

朝の空未知の時へと雲流る

私句

ネクタイを締めて男は朝の顔

トヨ子

雄幸

茂代

八重子

円女

奮水

碧

ふゆ子

馬洗

君江

苑子

一乗

ますみ

義男

雅子

本社 十二月句会

十二月九日(月)午後五時半

メンズファッションセンター

本年最後の本社句会は八十四名の参加により定期開催された。

はじめに十一月三十日亡くなったはずも川柳会会長久家代仕男氏に黙祷を捧げる。

お話は西田柳宏子さん。本年十月を以って理事長を退いた感慨を述べ、十二月一日きやらばく忘年句会に初参加した報告、感想を語る。まず三十二回目という継続の力に驚かされたと言う。参加者は山陰はもとより京阪神から、四国から、いろいろな柳社の人が集まり盛大な句会であったこと、主催者が、それぞれの到着時刻を把握して出迎えて下さったこと、句会後の宴会では日舞あり、洋舞あり、飛び入りあり、最後は全員合唱と和気あいあいであったこと、米子市内で初雪という雪景色にまで歓迎されたことなどを話した。

月間賞は尼崎市の黒川紫香さんに輝く。

(司会) 隆盛 (記名) 月子・弥生

(受付) たもつ・寿美子・かすみ

席題「座る」

江口

度選

龍安寺の石に煩惱座らされ
太陽へ向けて寝たきり座らせる
スキー場寒波居座る日の機嫌
地藏さん一度座って見たかろう
隅っこに陣どっているわさ組
一つ席あいてた好きな人の横
妻というしがらみ座る暇がない
今年またわたしの座る椅子がない
座り拚死昭和も遠くなりけり
まん中へでんと座って隙だらけ
母の日も頑固に下の座に座る
座り直してお茶の出るのを待っている
同じなら美人の横に座りたい
枯葉散る位置に座っている羅漢
父の座は隅へ隅へと追いやられ
シルバースートの座り心地を確かめる
抜きて座った椅子が軋み出す
やわらちゃん男座りも愛らしい
座る人座れない人十二月
逃げ易いところへ座る癖があり
座りだこ唾うすらりと伸びた脚
頂点に座ると待っていた孤独
妻の愚痴聞くのに正座させられる
前任の温もり冷めてから座る
母逝って冬が居座る低い屋根
座ってる暇ない主婦の十二月
居座った席に押しピン置いてある

洋 隆盛 柳弘 鬼遊 月子 輝子 千歩 庸佑 射月芳 天笑 ゲン吉 美代子 典子 萬的 悟郎 希久子 庸佑 柳伸 シマ子 天笑 英子 正雄 昭子 欣史子 寿美 正坊 寿美

庭石に向かう正座はみな無口
わが胸にとつかと座る冬の章
前列にいつも座っている自信
指定席自然に決まる趣味の会
百歳になれば真ん中に座る
佳
S席に座るわたしが落ち着かず
置き炬燵ベルへだあれも出てゆかぬ
末席で手強い奴が手をこまね
酒癖を知らず隣へ座られ
座り直してあなに言いたいことがある
人
指定席へ座った老母を見届ける
地
頂点に座ると空気薄くなる
天
妻横に座ればボクの体浮く
軸
気がつけば美人の横に座ってた
兼題「握る」 田中輝子選
一本の筆を握って慶と弔
自我ひとつ握ってからの胃の痛み
賞も無く肩書きも無く歛握る
姿なきさびしさ握る秋の水
握りこぶしやりどころない正念場
傷口をやさしく握る花鋏
利用価値あるのか握手してくれる
新世紀の夢握ってる赤子の掌

弥生 鹿太 諷云児 満州 重人 金太 英子 千秀 白溪子 磔 茜 諷云児 欣史子 度 隆盛 満州 昭子 薫 弘直 友照 洋 武庫坊

しつかりと握り返した後継者
 握りしめた藁が思わぬ夢を呼ぶ
 ふところが寒くて僕は手をつなぐ
 震災でお世話になった握り飯
 百歳の人と握手をしたはてり
 核心を突いたら握りつぶされた
 若い娘の手をすぐ握るお爺ちゃん
 握手したら離してくれぬおばあちゃん
 姉ちゃんのスカート握って従いてくる
 大金を握ると落ちる目の鱗
 手のひらを真つ赤に染めて握り飯
 いつからかあなたが握るドアの鍵
 権力を握り錯覚してしまふ
 握り返して芯まで想い届かない
 握りしめていたつもり愛は抜け殻
 ポケットで握るやり場のない拳
 手を握り母さんありがとうとだけ
 悪いとは知りつつ握る悪の金
 千手観音一手一手に握る慈悲
 握るとも離すともなく長い恋
 ジョーカーを握って鬼に逢いにゆく
 握らせた札が口火を切りたがる
 持参金握って放さない妻だ
 握手した手に残されたバラの刺

住

しげお
 みつ子
 信子
 正坊
 保州
 桂香
 柳宏子
 天笑
 千歩
 章久
 かすみ
 たず子
 希久子
 寿子
 美智子
 紫香
 ダン吉
 利武
 千秀
 ダホネ
 寿美
 富湖
 鬼遊
 みつ子
 萬的
 白溪子
 美代子
 森子

冬の樹と握手かわして橋渡る
 人
 三日月の端を握っている詩人
 地
 一握の砂の嘆きを知る駱駝
 天
 余生とや握ったままの石ひとつ
 軸
 握られし手は潮騒の音を聴く
 兼題「公認」
 宮崎シマ子選
 公認のベット暮れると家を出る
 ひととは俺は公認朝帰り
 子供寝たアタルトビデオ始めよか
 公認書 一段高く鎮座まし
 公認の記録鎖に縛られる
 満二十歳酒もタバコもまずくなる
 公認の女は色が褪せてくる
 公認の軋落劇を見せしまつ
 公認の僕の彼女はニューハーフ
 公認で婿とゆっくり飲んでいる
 常習で皆に諦められている
 余命表 神は公認していない
 公認の薬に怖い落し穴
 公認のレットル大きな席をとる
 公認をされた浮気はつまらない
 嫁はんの前でおんなへ電話する
 公認をしますあなたに気紛れは
 尋ね人許す帰れと小さくある

寿子
 美代子
 森子
 シマ子
 輝子
 弥生
 愛論
 東雲
 弘直
 悟郎
 柳伸
 章久
 輝子
 かすみ
 たもつ
 洋
 保州
 稚代
 悟郎
 紫香
 鬼遊
 ダン吉
 美代子

公認へずい分長い坂でした
 公認の朝ネクタイをしめなおす
 ギネス公認ホンマカイナという記録
 公認のケチがゆたかな寄付をする
 公認が嬉し胎動高鳴って
 公認をしたドクターも酒が好き
 公認の趣味おばあちゃんのお針箱
 公認の味で逢うのが減りました
 陽の当たった場所に置かれた寒椿
 通夜の席公認の娘がひそと座す
 無農業へ公認済みの虫食い菜
 公認にされてしまった物忘れ
 公認されてヤツタと地金ほくそ笑み
 公認のドーム未来へ廻る
 5%の公認首を締めに来る
 バツ一は公認白無垢で嫁ぐ
 脱税の仕方税理士から習う
 ほがらかな酒で公認されている
 公認のふたりは雲にのっている
 非公認だから捨て身で勝負する
 人
 公認の蜂の巣がある軒の下
 母の公認裏口だけは開けてある
 天
 公認の浮気火花で終りそう
 軸
 公認になって運転こわくなり

典子
 重人
 美代子
 朝子
 典子
 市子
 絹子
 三男
 森子
 たず子
 たもつ
 天笑
 頂留子
 一風
 寿美
 千秀
 英子
 笛生
 いわゑ
 千秀
 絹子
 たず子
 楓云児
 シマ子

行革に魔法使いはいないのか
反抗期母の魔法がもう効かず
金持っている魔法にすぐかかる
大都会魔法使いがあちこちに
風呂敷を魔法のように使う老母
恋なかば魔法がとけてから勝負
ピンチには魔法で妻は金を生む
金婚の妻に魔法がかからない
都会から吹く風魔法持っている
妻の魔法は定年の日に解ける
簡単に騙すこわきのある魔法
お出かけの靴に魔法をかけておく
金婚式互いの魔法解けぬまま
官僚のエゴを魔法で直したい
知命はるか魔法のときインターネット
常識に魔法をまけて老いの道
逃げ回るオウム魔法の解けぬまま
玄関で魔法が解けた旅三日
魔法かけた靴がせつめと家に向く
虹の橋渡ろう魔法さめぬうち
熱い目の魔法にかかり動けない
金婚へ妻の魔法が溶けてくる
ワイングラスに愛の魔法をかきまぜる
権力は魔法のように金を生む
魔法瓶の律義さといふ母の冬
肝心なときに呪文が出てこない
札束の魔法わたしもかきたい

金太 輝子 しょお 露児 保州 欣史 鹿太 鬼遊 三男 大輪 狸村 天笑 柳弘 かすみ 薫 義子 昭子 富湖 諷云 児 笛生 森子 一風 たず子 庸佑 いわゑ

女みな可愛い魔法使いです
やりくりの魔法母にはかなわない
妻の魔法で走り続けた五十年
魔法の指に男の心盗まれる
税金の使途は魔法のように消え
住
ポックリと死ねる魔法を探してる
二重どり魔法使いの計算機
万札の裏広告という魔法
切り札を抱くと魔法がとけてくる
物欲の魔法の糸にあやつられ
人
痛くない魔法がほしいガンの友
地
点滴の魔法へ生命預けます
天
魔法の杖になつてほしいな白い杖
軸
忙しき魔法瓶から溢れてる
兼題「糸」 芳地理村選

路児 三男 諷云 児 金太 武庫坊 かすみ 利武 輝子 稚代 朝子 英子 美智子 友照 一風 洞庵 みつ子 勇太 たず子 希久子 満州

募金箱善意の糸で結ばれる
世渡りのテグス引いたり緩めたり
糸とりの手品ばあちゃんから習い
情念の糸がまつて冬の風
赤い糸無いけど夫婦仲が良
飾らない絆を縫った木綿糸
満ち足りて母がほどこいたしつけ糸
しつけ糸女哀しい喪服着る
熱すこしさまして解いているもつれ糸
政官財絡めば糸はすぐ染まる
伝統保存河内もめんの糸つむぐ
糸切り歯ぐらいて切れぬ糸ばかり
有頂天になつたら糸の切れる風
糸電話 遠く幼い恋でした
野仏へ遊びに来て糸蜻蛉
蜘蛛の糸ほどの軽さで生きている
糸通し器へ糸がかからぬ喜劇です
糸引いてはるとは知らず踊られ
別れ上手で未練の糸はすぐ切れる
弁解の糸で縫つてる悔いの過去
むすび合ふ糸をたぐつてまだ迷い
無理したらあかぬ約束指の糸
細い糸それでも母は愛を編む
目に見えぬ糸が私を引き寄せる
大物に糸を切られて悔しがる
俺とお前は切つても切れぬあまい糸
母がひく糸見えてる塾通い
運命の糸が母さんとの出会い
ふたたびの命抜糸を見届け

保州 千歩 丹吉 月子 森子 紫香 笛生 弥生 たもつ 萬的 笛生 保州 正雄 いわゑ 美智子 満州 弥生 義子 天笑 一風 英子 庸佑 東雲 萬的 丹吉 輝子

絆の糸には熱い血が通う
横糸を少し緩める母として

秀

母さんをばけさせなんだ糸と針

軸

絹糸が生きる刺繡の彩に酔い

兼題「苦心」

橋高薫風選

お歳暮もあれこれ悩む予算内

苦心したわりには映えぬ年賀状

何気なく語ってくれた苦心談

子育ての苦心へママの体当り

完成して初めて苦心ねざらわれ

苦心苦心苦心の果てに虹が見え

光らない私磨いている苦心

苦心して積木三つを積んだ孫

工作完成苦心したのはお父さん

千切りへ苦心している紅い爪

苦心談聞いているのは猫ばかり

一生懸命下手に演じているピエロ

肩書きが多くて苦心の自己紹介

苦心してベットのパンツ編んでます

本当の苦心多くは語らない

苦心など語らず淡々職人芸

名優の苦心が台本の行間に

苦心しましたあなたをこちら向かすまで

苦心した嘘フアックスを流れ出る

苦心した一手を軽く躲される
能面師の苦心が生きる能舞台

悟郎
富湖

月子

狸村

たもつ
正坊

利武

寿美

柳宏子

度

希久子

美智子

富湖

朝子

みつ子

保州

弥生

とし子

洋

グホネ

路児

たず子

稚代

庸佑
千秀

パレットに苦心落いていたピカソ

力作のオブジェ鑑賞する苦心

ここまでの苦心は語らない微笑

血のじむ苦心も知らず結果論

苦心したことには触れず用立てる

顔見世の高い切符を苦心して

一男一女 わたくしの苦心作

苦心した割には評価してくれず

苦心とは思えないから笑えます

苦心のあとあるので許すことにする

開発の苦心も知らず全自動

佳

相槌を打つのに苦心する相手

初心者の苦心のあとが見えぬ作

苦心のあと母さん見逃しはしない

自惚れの作に苦心の跡がない

根回しの酒ねばねばと終電車

人

苦心した昨日があつていい笑顔

地

核つくり苦心さんたんするヒト科

天

苦心して来た頂上は霧の中

軸

苦心いま岩から水のにじむさま

(清記—希久子)

大輪

茜

寿美子

風云児

いわゑ

薫

正坊

昭子

欣史子

義子

洋

佳

信子

ダン吉

文秋

薫

かすみ

ダン吉

紫香

薫風

平成八年本社句会全出席者

西田柳宏子・高杉鬼遊・前たもつ・山本義子
川島風云児・北山悟郎・小池しげお・池森子
岩佐ダン吉・森下愛論・橋高薫風・福田満州
芳地狸村・稲葉冬葉・海老池洋・高須賀金太
辻白溪子・福本英子・阿萬萬的・平松かすみ
黒川紫香・清水利武・宮崎弘直・西口いわゑ
大内朝子・榎山隆盛・金井文秋・柴田英壬子
吉村一風・藤井正雄・神夏磯典子・坊農柳弘
玉置重人・山本希久子・一本勇太・板尾岳人
宮西弥生・田辺鹿太・河井庸佑・福井桂香・
宮崎シマ子・松原寿子・寺井東雲・河内月子
奥田みつ子 (45名)

平成八年度本社句会の月間賞杯永久保持者
は平松かすみさん(寝屋川市)に決定。

老地神壇

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

久世川柳クラブ

二宗 吟平報

筆まめを羨ましいと投書欄
見たこともないライバルにはげまれ
低金利稼いで貯める気になれず
稼ぐ蟻唄うキリギリス人生訓
損得を言わずせつせと稼ぐ嫁
一獲千金夢みて地味に稼げない
共稼ぎ子供成長夢みつ
票稼ぐ訴え晴れたり曇ったり
老いてなお稼ぐつもりで服を縫う
残業で稼ぐ夫へ食はず待ち
平凡な後ろ姿が美しい
愚痴などとは言わずに暮す平凡に
平凡なくらし花の種をまく
平凡に生きて今年もバス旅行
平凡な暮しに慣れて八十路坂
平凡に生きた人生花作り
平凡に余生を送る老い二人
平凡に暮し一生苦勞なし
稼ぎ高妻に譲って無事な日々

美恵子 志重 禅心 富士野 種子 旭泉 久子 亜矢 のぶ子 吟平 知世 秀香 善代 楽山 伊久栄 光水 千代女 すみれ

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

尾に鱗がついて戻って来た噂
義理人情からみ結び目ほどけない
パチンコに時間を忘れて子を忘れ
渋滞に巻き込まれてる人待つつ
あたり前のちきさな善行光ってる
時間買う時代きそうな子感する
当然の権利と二の句つがせない
時間など気にせず完走した笑顔
時間がないからしつかり食べておく
月下美人しずかに溜めてる時間
川柳塔おっぱこ吟社 木村あきら報

清芳 喜美子 シマ子 欣史子 弘直 香住 田実子 留吉 能子 あずき ひかり はつ恵 吟笑 ふみ あきら よしみ 正雪 マツエ かおり くに子 坊太郎 いさむ チカエ 治延 放任

家の裏畑の野菜地の宝
転んでもビリを覚悟の子に拍手

ペン皿の会

鍛原

千里報

思い出をたぐればゆれる秋桜
大先輩にいつでも会える高野山
半分にしばんだけれど夢は夢
もの言わぬ夫の背なと老いを見る
ことは数少なくいと案じられ
四十年の絆さめゆくひと言に
溝に咲く花にエールを送ってる
反省をしながらリング削いている
どん底であのひと言に救われる
方言の素朴なことは親しまれ
花言葉信じて愛に飢えている
疑ってかかる代議士の言葉
成り行きで火のつく言葉吐いている
川柳クラブわたの花 吉村 一風報

3なみ子 文仙 勝子 曉子 友美 久子 いくの 式美 秋子 慶子 寿美子 節子 千里 智子 凡子 隆盛

嬉しいと愛の糸吐く妻と居る

地獄にもきつと賄賂が効くだろう
へそ曲り地獄でうまくやるならか
掃される間魔好みでない女

蟻地獄お寺の緑の下にある
ユーモアで介護地獄をのりこえる

空襲の地獄を知っている余生
いじめ地獄の鬼をばち手なすける

この世は地獄情けに弱い鬼もいる
イチローがメロドラマを打ちたてる

叱られて家出の宿を納屋にする
想い出を胸にたんで陽が沈む

顔見れば当たりとなる倦怠期
花の〇L通動地獄慣れたもの

子供にもこの世の地獄受験前
買物のカード地獄を見ぬように

川柳塔みちのく(前月分) 小寺

身に覚えあつて二人は日を数え
白檀の仄かに香る盆の窪

古里を誰に聞いたか蛙の群れ
リストラの綱が根首を搔きに来る

チラリズム男は何度死んだやら
某月某日カルテがくれた致命傷

まだ少し色気があつて薔薇を購う
疑問符を解いてみれば道化師で

くしゃみひとつやっぱりに噂され
水が欲しいと叫ぶあの夏の雲

病名にふれぬ夫婦の散歩道

美津留

シマ子

一風

幸枝

春子

道子

ミツ子

剛治

宏

八寿子

民子

美代子

知佐子

春江

鬼遊

紙おむつ無欲の老母はよく眠る

足し算のように色気のある手付き
肩書が欲しい名刺の裏表

嫁が来る次は子供が欲しくなる
夫婦仲鳥のつがいに教えられ

向日葵の色気に嫉妬する残暑
土壇場で一枚岩になる夫婦

いつの間に夫婦になって五十年
念仏の底で金策駆けめぐる

孫の笑みやっぱり欲しい負け角力
誰よりも貴男が欲しい未練花

梅干しを急に欲しが娘の理由
溝口川柳会

年末へ山積みになるわが雑務
餅つきも一人ですませ味気無い

寒の神の祭 年末近くなり
おふくろの味を求めて帰省する

せかせかと年末風に追われてる
捻子捲いてこの一年を締めくくる

せかせかと師走の風が背中押す
春穫りの野菜も植えて農の暮れ

いささかの貸し借りもなし年の暮れ
喪のはがき今日も届いた師走風

川柳東大阪 森下

生と書き死と書きペンを重くする
灯台にきて確かめる肩の雪

三行の老父の手紙にある重み

生恵子

影郎

しげる

一光

井蛙

花峯

黙人

隼人

花匠

順三

北歩

一花

雄々報

鈴枝

弘子

幸せの箱が重いと泣いている

情熱のおもむくままの乱れ文字
何があつたか父が乱れる昼の酒

健闘を褒めてやりたい乱れ髪
良妻もこころ乱れる時がある

星を数えて少女のクルスから光る
星を数えなくなるよな故郷の空

故郷はこんなに星が多かった
星空の彼方に夫の影探す

下町に住み下町の星見て眠る
一人っ子恋言い出せぬ親思い

母さんはお空にいと遺児三つ
こころざしが鳴いてそろそろ出す給

そろそろと言われて娘はほを染め
落ち葉舞うそろそろ迫る冬の使者

佳句地十選(12月号から)

健やかに朝のハブラシ立っている
磨崖仏眠れる森の青い木々

妹よ酔えない酒もあるのです
教会の椅子の固さも愛だろう

悲しみがわがかり涙が止まらない
家を探して 自由ヶ丘 希望ヶ丘

パチンコが趣味なら嫁に貰わない
神輿出て町が一つになっていく

新米が出たので新米を食べる
極めればバセリ一つの置きどころ

真柳

柳伸

晋吾

文秋

恭昌

湖風

昭二

賢子

三代子

東雲

シマ子

三重子

太一

愛論

幸世

川柳ねやがわ

江口

度報

朝子

あきら

ゆとりなく暮してゐるからボカをする

あやめ

古稀過ぎて後半戦の向い風

黎之助

ルイ子

ゆとりあるうちに遺言したためる

頂留子

ノッポビル倒してみたい風の意地

度

あき

晴耕雨読今朝はおいしい茶を注ぐ

良知

信頼の眼差しほんのりしてくれる

スミ子

薫

熟練のゆとりによりズムある動き

たもつ

嫁ぐ娘の花束二度も泣かされる

惠美子

重人

例えばの話で父の小言出る

博泉

無にかえる空も泣いてる通り雨

紫香

風

例えばの例えが私によく似てる

亜成

泣く事もし仕事と小児科医が笑う

高栄

高史子

秀才の兄を例えが私によく似てる

光弘

泣きたいのは俺だ男の喉仏

白溪子

静風

慣例を破る勇氣に陽が当たる

時弘

一枚の紙で今度は北へ飛ぶ

茶の子

白狐

子には子の意地か黙って友かばう

冬風

青春を減茶苦茶にした赤い紙

秀夫

貞子

意地はつたように野仏おわします

弘直

こより太めに父の蔵書も秋になる

庸佑

比呂子

そんなに意地張れば醜い顔になる

磯

白紙にはしてやれないが通夜に行く

波留吉

栄恵

分け前を取るまで押さぬ離婚判

三郎

つれづれに綴る自分史まだ序章

静江

美佐雄

分け前の話に乗った泥の舟

高栄

つれづれのひととき生きている自覚

東雲

節夫

分け前は子等それぞれの良い所

源一

湯の町の旅のつれづれ独り酒

艶子

喜久恵

分け前はいらぬ共犯者にはならぬ

ルイ子

旅に出てつれづれのまま絵をかきぬ

一笛

清水

分け前になると味方の顔でくる

シマ子

つれづれに仏としはし話する

吉太郎

淑子

玉蜀黍のひげで茶髪にした案山子

文秋

つれづれにセピアの写真めくる午後

伸子

蛸牛

八十路まだ登る坂あらい紐締める

一途

つれづれに子に聞いてる敗戦記

マツエ

房枝

水割りをちよっと濃い目に秋夜長

権太

つれづれにゆがんだ自画像描き替える

克治

夏喜

こけた子を迎える拍手温かい

庸佑

月並みな言葉を選ぶ通夜の席

瀧小

喜美子

記念撮影心に隠すものをもち

とし子

がむしやらに生きて未完の夢いくつ

朝子

あきら

竹原川柳会

時広

一路報

泣き顔を笑顔を見せるのは一人

高史子

十五歳の私写真にとつておく

千枝

失つてから大切なものと知る

蘭幸

かけがえのない人と知る二人きり

静風

大切な地球をよこすのは誰だ

白狐

大切な命と知っているゴリラ

貞子

大切な物件忘れた長電話

比呂子

竹細工竹の命を大切に

栄恵

そつめん流し竹の緑が命なり

美佐雄

手づくりの竹籠愛の証かも

節夫

名水を竹の香りと共に飲む

喜久恵

木洩れ日にサラサラ竹の私語を聞く

清水

竹が好き亀甲竹の芸が好き

蛸牛

頼まれもしない私が張り切つて

房枝

久し振りに訪えば元気な姉米寿

喜美子

雲になりたい小さな小さな私

夏喜

残念だ養父が効いて来ぬ

喜美子

病癒えよ明日を信じて髪洗う
長女二女どりの髪は父ゆずり
髪一本一本大事にしてるなと鏡

南大阪川柳会

寺井

東雲報

夫婦独楽回り続ける他はなし
親亀は子亀へエール惜しまない
中心にたつて円周視野に入れ
失敗連続自分で自分嫌になる
エール交換どっちも負けると思つてず

ばつりばつり内職仕事続いてる
墓場からもエール送っているらしい
迷宮入り淀で止まったデカの勘

エール浴び男の意地がとがり出す
昼カレー家に帰ればまたカレー
ダイエット続ける事が勝負です

青春の扉に触れる円舞曲
平素から掃除洗濯僕らの役

ころんでも懸命に働く子にエール
やつぱりバツジに隠れていた仮面

迷宮に未練かくさぬ捜査網
叩き売り機関銃の如くよく喋り

借りに来て平素と違う顔を見せ
お宮入りかと刑事あながい軽く言う

選挙前平素見せない顔が来る
迷宮入りさせぬ女の記憶力

スーチャーさんにエールを送る世界の眼
日本シリーズエールで夫婦揉めている

お祭りも平素もおなじ奈良の鹿

正宏
笑子
一路

平常は猫をかぶってひるねする
はずれはずれ又はずれでも宝くじ
達筆で平素無沙汰の見舞状
迷宮へ書類を全部焼き捨てる
人形のエールで小菊生きている
迷宮のまま遺品を大事がり

三幸川柳教室

三宅

保州報

灯籠の数をかぞえて順路ゆく
松の木から鉄の音が降ってくる
大海を知らない魚の有頂天

自然美を贅の限りと温山荘
翁の業績称えて映える松の青
潮入りの池に迷子の稚魚の群れ

趣味仲間集えば松の木も笑う
手を引かれ石灯籠に触れてみる
肉食べて太郎花子と産み分ける

一二位の極め手はスマイルで分ける
添い遂げる愛の真水を分けあつて
補聴器を好みに合わせ聞き分ける

人生航路ポイント一つ明と暗
一寸先の闇へ分け入る好奇心
人生図分岐点は鬼が立つ

欲望と理性を分けて生き延びる
運と言う篩の網に分けられる
小分けして老後に咲かす花の苗

細分化しすぎて山が見えてこぬ
街角の孤独を分かつ花時計
分裂の危機免れぬ自己主張

久蜂
三恵子
トミ子

東雲
日出子
久子

美子
和子
貞子

健三郎
さち子
碧

当代
喜美代
親路

鉄治
めぐみ
嘉平

初子
靖子
孝子

秀男
あいや
三千子

百合子
朱夏
公子

因数分解あたりで親は手をこまね
傷物にされて内気なタマ帰る
海鳴りに疼きはじめた夏の傷
侮った傷でてんでこ舞いをする
一言で医者も治せぬ傷を負う
冗談にのせて傷口開けにくる
孤児再会決め手となった傷の跡
かいわれの傷癒えぬまま秋の風
傷つかぬように包んだ言葉尻

富柳会

池

森子報

ひとりでも地球が抱いていてくれる
落ちる蟬蟻の食事に身を委ね
そつとしておこつ火種の消えるまで
過去は過去ひとり歩きは淋しすぎ
降りしきる落ち葉は少しはしゃぎ過ぎ

深煎りのコーヒー豆と夜を明かす
雷も落ちくたびれて暴風雨
一パイのコーヒー時計針を止め
ひとり居が気楽と後家さん皆達者

馴れそめも別れ話もコーヒーから
肩寄せ家族笑顔で握り飯
ブランドが私だけの虚栄心
罪ひとつ抱いて浄土にゆくつもり

渦一つ残して落ちてゆく夕陽
思い出を秘めてハンカチコーヒー色
落ちてゆく夕陽に明日の貌がある
柿の木から落ちてアイデア思いつく

歯の抜けるように戦友またひとり

桂香
みね
美智子

千秀
和代
章子

保州
町子
正簡

とも子
秀樹
紅紫朗

文子
昭子
美代子

宗一
悦子

(画) 勇
(伊) 勇
トシエ

二三子
アキ
登子

絹子
鐘造
昭水

智久

新党のロマンが票にしがみつ
鉛筆の先から焦り出してくる
ひとりからふたりになってまたひとり
大菩薩峠を読んでいるコーヒー
遠き空離ればなれの雲の行く
呼ぶ声の高い方へと流れ着く

柳太
花梢
欣之
岳人
久則
森子

川柳ささやま

酒井 靖子報

若いうち登ればよかった山がある
自立する子へ乾杯の酒を干す
一汗をかいて上衣を忘れてる
子に賭けて履歴のいらぬ鉄を振る
いつまでも履歴が追ってくる迷路
弥陀の手へばつばつ行く人急ぐ人
努力した証は拳の中に秘め
頑張つて立派な城に老い二人
リーダーは妻にまかせて家平和
リーダーが居るのか長い蟻の列
反省の日記立派に生きる日々
書くほどの履歴はないが一代記
履歴書が書かず素直に農を継ぐ
履歴書が良すぎてバイト断われ
立派な子二人ふると振り向かず
残り火が揺れてばつばつしておれぬ

惠美
純子
とよ子
とみ子
つや子
和子
ヒサ子
八重子
市三
素水
美智子
末野
多美子
すず子
可住
靖子

川柳塔みちのく

小寺 花峯報

中傷の中で腕組みする男
鼻歌の妻は女の顔を塗る
無断駐車吸い殻までも置いてゆく

五楽庵
花峯
ツネ

川柳塔わかやま吟社

宮口 克子報

今踏んでおかねば麦も墮落する
優雅にもシャンソン聞いて散る落ち葉
本一冊持つて改札口抜ける
七色に変わる女を持て余す
ポケットに葉を詰めて孫帰る
山のバス落ち葉蹴散らしやうて来た
庭の落ち葉一枚添えて夜の膳
古本の折った頁にあるドラマ
一冊の本から激震が走る
本を繰る指先にある波の音
父蔵書はらりと落ちた花葉
本の中から戻された電話ベル
大地までも踏めたら逢いにゆくつもり
仲間さえ踏み台にする出世主義

柳々
隼人
千加子
和香子
黙人
一光
龍人
あかり
北歩
順三
一花
雅城
英子
和子
緑良
富湖
三男
紫香
三枝子
正博
金太
輝子
紀美女
紀久子
太茂津
勝

城北川柳会

吐田 公一報

旅立ちの日迫り親の心知る
赤とんぼそうしてみんな居なくなる
生きる励み流行の服選っている
野の草も粒子を抱き秋の風
遠足の車内にいじめなさそうだ
浅知恵が墓穴大きくしています
核心へ迫る深夜の刑事室
距離おいて見ればゆとりが湧いてくる
会話ない夫婦の仲にみる疑問
きらめいた硝子に映るストーリー
痛む心へ土足で迫るインタビュ

千尋
春蘭
登美子
佐津乃
政子
睦子
史風
寿美子
久留美
昭子
一枝

踏みつけた財布中味は空だった
実直に生きて大地を踏みしめる
竹を踏み山を歩くもすね笑う
内弁慶一步踏み出す勇み肌
虎の尾を踏むたび燃やす底力
臆病になってブレーキばかり踏む
いつからか社内に出てくる踏絵
国のため一步踏み出す新議員
踏まれても美女なら我慢する男
父ちゃんが時々女装して困る
砂時計心がわりを潮どきに
ほんとうに変わらなにかと神父様
心変わり愛の煮こり溶けてゆく
やんややんや目立たぬ男変わる夜
御機嫌の変わらぬうちに頼みごと
他人の靴踏んで自分の靴を履く

吞天
射月芳
淳太郎
豊太
利治
和重
柳宏子
誠子
武春
大輪
栄美子
稚代
めぐみ
由美子
年子
克子

名月が病室のぞく午前二時

点滴のボトリポトリがもどかしい

遠州の庭に正座は崩されぬ

一輪がツンと燃えてるバラの自負

シーユーアケン孫の見送る手に涙

互角だと錯覚してた自己過信

秋深しひとときわ光る敬老日

子の悩み真正面に向い合う

球場で病欠同士顔が逢い

指定席損したように空いている

きらめきを秘めて原石チャンス待つ

関白が奥と姫とに無視される

踏みつけた花がきれいに咲いている

晩酌の量を気遣う遺影の目

孫達に時には被る鬼の面

秋深し納得するまで墨をする

近頃は頑固になった親譲り

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

靖国を眩しいと言う人がいて

思い切り捨てよか思案の古い服

唐津焼酎の嗜着で御嫁入り

トンカツに結局なったレストラン

家政婦の名前で週休二日制

叶わねど画き続ける夢ひとつ

一人居の秋の夜長に進む酒

愛想よい妻の声にも裏表

日本の秋山に入り言うことなし

引き出して春を待つてる万歩計

ファックスにハガキの意地は年賀状
火だるまになって行革するという

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

指笛が古里の唄覚えてた

据え膳にも食指動かず老いにけり

小兒科は指温めて診てくれる

河豚の値を袋の中できめる指

マニキュアの指が女を蝶にする

指のしな酸いも甘いも使いわけ

この指にだあれも居ない塾の友

指先に亡母を見つけた冬支度

一日中沸くぜいたくを風呂につけ

子ら巢立ち風呂の湯二日ずつ使い

新妻は背を流すわと湯に入り

産湯の児宇宙遊泳まねてする

微温湯につかり幸福かみしめる

仕舞湯の母は十八番を口ずさむ

妻の愚痴湯豆腐フーフー聞きながす

芋羊羹一個へ二人湯を沸かし

リモコンの適温を手で確かめる

ケトル噴いて一瞬おんなをだませる

人形劇指で伝える息づかい

白魚の指前髪をより分ける

正直な小指ゆびきり躊躇する

曲がり角許し許され老いの坂

よろしくと答えた父は式待てず

当選にみそぎ済んだとでかい顔
好きだから嫌いな癖も許してる

弘

正剣

よし一

あらた

雅子

おぐり

良子

絹子

羊子

和可

明玄

純子

美奈子

ちよ路

省子

広和

徳三

サト子

潮華

見早子

由美子

ふみ

智洋子

八重子

亜希子

政勝

道子

ライバルにツイを許すお人好し
詫びもせず許すも言わね酒交わす

金婚式指貫き以外もってない

指を折り子供の帰省待つ夕べ

許す気の扉に鍵がかけてない

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

あの言葉余韻をひいて日が昏れる

冷やめしになる犬の子の淋しい目

脱ぎ捨てた帯がトグロを巻いており

けずられて割られて割り捨てられる

一日が終り仮面を脱ぎすてる

車椅子母娘で楽しいシヨッピング

そうとは知らず握ってしまった冷たい手

月三更わが生きさまを振り返る

風邪ひきが冷房室でもてなされ

割き割られてからが忙しい

脱ぎ捨ててこれが自由というものか

京都塔の会

松川 杜的報

鈍行でもらった気さくなにぎり飯

愛という文字を気さくに書く少女

引き受けて気さくの吐息ポケットに

風立ちぬキャンパスの中少女の絵

地獄絵に回るきれいな風ぐるま

絵ときした祖母から学ぶ事多し

絵そらごと並べてうなる選挙カー

侮れば我が身に返る紙つぶて

侮りの視線不慣れな窓口で

トヨ子

加津子

天々

早智

満秋

民子

かつ子

聖子

好栄

ちよえ

英子

はるみ

鈴江

博利

清泉

白汀

杜的報

百合子

友照

京子

圭坊

龍小

紫香

栄

芳子

求芽

見当がちがう言訳聞いている
見当通りならぬ浮世に夢がある
何もかも見当違いでしたお月様
見当はずれの答をしている好きだから
絵心にひかれ下車した海の駅
奥飛騨の郷愁誘う絵ロウソク
侮った軽さに自分試される
国民を侮っている消費税
侮った態度無視して二度の職
もらい物値段の見当つけたがり
みんな許し一番楽になる自身
祭にはきつと帰ると言つたまま
出好きの足ひしめく秋が呼びにくる
旅人としぐれが渡る渡月橋
月澄んで心の中まで写りそつと
とつぜんにアンパン欲しい老いである
解散選挙静かな秋は姿消す
燃え尽きた自分とはまだおもつてず

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

白溪子 波留吉 杜的 磔 巨詩 英一 ただし 正坊 庸佑 福子 てる 笑女 達子 春蘭 美穂 年代 武庫坊 水客

二重三重包んでくれたお小遣い
味しめた空巢を懲らすツローック
二重橋渡れないけど写して
幸せを袋に二重に締めておく
二重扉がたがた基地が揺れている
二重丸の自画像のまま老いてきた
がまん袋の底は二重に刺しておく
前ぶれの二重封筒受取りぬ
母と子の半音ずれた二重唱

朗子 遊

腹切りも総懺悔も見た二重橋
勝算があつての事か二重底
父と母二重に詫言を入れにゆき
二重底の箱に④を入れている
二重になつてもいい先ずは手を打とう
二重丸今日一日はよく生きた
ははに差し上げる二重丸三重丸
遠い記憶を二重に論議する枯葉
笑いころけて二重に落ちてくる喜劇
二重蓋亡母もこうして煮含めた
力を抜いた日にもらう二重まる
二重蓋の空間にある泡の苦悶
唐突のようだが予告してあつた

ローズ川柳会

山崎

君子報

天雀 花子 田鶴 蘭 玲子 紫布 荒介 てい子 瑞枝 美世 ふみ 日枝子 千代

窓いっぱい明け悪い夢陽に晒す
カタログをいっぱい集め夢を追う
子供よりカメラとババの運動会
私とわたし今日もケンカをしています
食べ盛りお腹さすって箸を置き
手のぬくみいっぱいもらい生きのびる
古里の栗が届いて栗おこわ
鍋いっぱいおでんを炊いて母の旅
生かされて感謝いっぱい折つている
母の忌に鶴をいっぱい折つている
満天の星きびしさとやさしさと
何処で咲いても女王の顔で薔薇が咲く
秋深み人の疼みを聞けばかり
詩の神道いっぱいにもみじ敷く

年代 武庫坊 はつ絵

二人三脚張り切り過ぎて転ぶ老い
つるし柿軒いっぱい老いふたり
とちの実がいっぱい落ちて山は幸
ライバルをはじめて抜いた運動会

ほたる川柳同好会

井上

直次報

派手なのが一人居て会盛り上げる
月末に派手な喧嘩をする夫婦
少し派手でもお上手なおしゃれです
派手な服着ればくすくす笑う影
派手なだけ人目につくそれつきり
大部屋に派手な女の見舞客
おばさんが見ている派手な水着ショー
イチローの派手な一振り酔うファン
さてどうしよう派手にわめいた公約を
審判のジャッジ派手なパフォーマンス
仕事柄真つ赤な服も着ています
派手な服きとパワーが湧いてくる
同窓会出世頭の派手な服
呆けてもおおきにはだけは覚えてる
嫁十年姑の喜ぶツボ覚り
喜劇見に来て存分泣かされる
栄転へ母はひとりの米を研ぐ
旧姓で呼ばれた夜のまぼろしよ
つばりの孫のバイクが夜気を裂く
秋の夜バントマイムの老夫婦
文明が進んで夜店無くなつた
電照に夜奪われて咲き急ぎ
仕事せぬ日も夜食だけおつき合い

民平 君子 義子 笑女 吉太郎 博史 純次 直次 真郎 祥風 竹二 正三郎 英子 保子 敵子 だし よしろう 喜美子 桂子 明光 馬洗 善守 正安 昭子 久子

留守番の夜は全身耳となる

キャンパスには派手な絵の具で挑戦し

視線浴び自己満足の派手好み

派手な生活だった 悪いことした

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

ドラエモン人気で黄泉の賑やかさ

人気で予感にはずむ赤い靴

人気には惑わされないう草

落ちそうな人気に尻尾振り続け

勉強は出来ぬ孫だが人気者

人気出て急にファッション考える

大物が小切手額で使ってる

大物も時には孤独な時もある

叱るまいこの子大物かも知れぬ

大物は小さい風を聞き流す

大物は家に戻れば恐妻家

大物はちゃんと跡継ぎきめて去る

生かされたい天国地獄見る時世

天国へ届かぬ手紙書いてみる

天国の裏を見ていた白昼夢

来世紀天国で見る事にする

天国と言いつる里で寝る無心

天国で涙は涸れた鶴彬

前進のない趣味だけ諦めぬ

青い目のギャル前掛けがよく似合う

前売券買って忘れた棚の上

前面に出ると台詞を間違える

散る前に見て欲しかった花の私語

まみ子

恭子

キヨ子

螢柳

茂美

雄々

多賀子

久枝

可女

静江

友子

みえ

明子

満江

寿美子

晴子

房子

ひふみ

与根一

登美子

早苗

日出子

清子

鶴丸

米子

太泡

桂子

神前の神楽囃子に秋深む

深づめも許そうやさしい人だから

秋の日に干せばやさしくなる言葉

やさしさを亡母の形見が匂わせる

秋冷の晩酌やさしい顔が欲し

山陰に咲くとやさしくなる野菊

孫帰省やさしい風を連れてくる

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

ワンマンで甘い言葉に弱いボス

アルバムにビントの甘いのは避ける

甘い顔うっかり夫に見せられぬ

角砂糖の溶ける速さに似た余生

日向ほこ紅葉も人もやがて散る

カマギリが動かぬ日向冬支度

日々好日日向はつこの茶がうまい

崖下の日当りが好き草いちご

山の匂う蒲団に大の字で休む

淋しさの心をさらう冬日向

染みのある軍手日向に干してある

母さんの匂い日向のおいおんぶの子

退院が近い日向を散歩する

茶断ちしていた母とも知らずそむいた

悲しみを断つにはやはり酒が要る

母子家庭子とも仕上げた裁ち鋏

情け断つ互いに仮面脱ぎ捨てる

なれるならしがらみ断つて鬼になる

未練断つ汽笛は一度だけでよい

好きなもの断つても恋は実らない

義良

きみえ

鳳笙

芳枝

静恵

町紅

射月芳

二南

柳宏子

楓云児

みつ子

トミエ

透太

文

道胤

春蘭

しげお

涼子

白溪子

いわゑ

鹿太

ひろ子

香子

はつ絵

杜的

紫香

紫香

雑学がひそかに役に立っている

限界をひそかに悟るベダル踏む

広辞苑ひそかに引いて来た自信

はげしさをひそかに秘めた女面

葬式の費用ひそかに貯めている

ひそかに脱皮していた孫のイヤリング

拳銃は出ぬが奇麗になった川

ぶらんこが揺れて二人の恋すすむ

立話へそつと迂回をして帰る

萩の花小紋の映る女だった

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

古稀過ぎて長きゴールがまだ見え

朝食をしつかり摂って行くゴール

ゴールインのあと追いかけて華燭の灯

逆転のゴールキックは発光す

八十路過ぎ歯の数だけが自慢です

歯に衣を着せて言葉に化粧する

吊り橋の真ん中あたり歯が疼く

白い歯をこぼして青年突っ走る

尾椎骨歯科医の椅子になじめない

枯れるのは男が早い長寿国

ひとり行く枯野は風が鳴るばかり

胸の泉も枯れたようです余白の日

野仏の耳に枯野のものがり笛

空缶をぼんと蹴つたら今日が枯れた

秋風にこぼれてゆくかさぼの花

霜月の声にぶるんと身構える

義子

澄子

てる

富喜子

よし津

萬的

曙蝶

正とし

房子

正坊

千恵

澄子

弘治

武庫坊

愛

キク子

光穂

十四郎

義芳

伊三郎

紫香

年代

すみ

美子

正子

比ろ志

比ろ志

負け将棋しぶしぶ認め駒を投げ

理に負けてしぶしぶ頭下げたけど

しぶしぶの顔でしつかり飲んで

手間掛けた味が我慢の手打そは

手間かかるとすよと母嬉しそつ

手間賃もない虫喰いの菜を束ね

亡母の味纏むにやつと母の齡

修復で輝き出した金のしやち

手間どつたトンチンカンな日が暮れる

見栄はつて競っているが淋しい眼

競うこととおかた終えた日向ぼこ

すれ違つて晴着どうしの女の目

追い越すと越される気配気にかかる

競い合う辞書に手垢がついている

不器用に生きて競走などしない

お人好し他人の悩みも抱え込み

ライバルの悩みを聞いてやる余裕

敏

晋

ダン吉

四三郎

かつみ

辰子

たけし

美喜

漢沓

利武

一屯

りつえ

扶美代

泰子

洞庵

重人

金太

優勝の涙はグイヤより光る

立ち上がる男拳で拭く涙

ビエロの目睨いてみたarseぬように

修羅も涙もほほえみに変え棺の母

そして秋濡れたまつ毛を乾している

ライバルの痛いところを知っている

良心が少しは痛むほどの罪

口裂けても男痛むとは言わず

痛いは生きている証と鬼は言い

カラオケで心の痛み消えました

腰痛が齡だとしだと言いたてる

痛いほどつたれています旅の湯に

向う腰の痛さこたえる間のわるさ

痛み知る度に人間丸くなり

やんわりと痛いところ突く京説り

歯こぼれのナイフ痛みを知っている

突き刺すと軽いジョークも痛みだす

みのる

美房

扶美代

桂子

美代子

昭水

六点

智久

敦子

キミ子

絹子

みよ子

宗一

昭子

志洋

花梢

和樹

夕陽射し車窓に映る赤い富士

振袖に映る成人無垢の顔

十二支を全部漢字で書けますか

もう一度漢字を繰っている辞典

珍しい写真と話長くなる

母さんの代りにメモが置いてある

吊り草がゆれてる今日も生かされる

行草も和の心にてうやむやに

菊の花揺れて聞こえる亡母の声

珍しい往きも帰りの富士が見え

結論はうやむやのまま酒になる

翠洋会(鬼の節吟行) 藤井 正雄報

鬼ごろしより女ごろしがいいですか

霞ヶ関へ鬼百匹を送りこめ

赤鬼も人が頼めば食われまい

鬼鬼鬼 わたしの鬼も遊ばせる

伝説に女の鬼は出てこない

一笛

知香子

石舟

しげお

慶子

明光

薩児

吉太郎

つえ子

杜の

求芽

東雲

隆盛

トミエ

てる

保子

絹子

澄子

佳秋

ミサヲ

宏

いつふみ

恭昌

江美

義子

はつ絵

宣司

柳太

阿武

利武

和子

修六

吸江

鐘造

目をと

夢に出

夢はみ

んな若

さる

挫折の

たびに

夢はだ

んだん

でかか

る

指鉄砲

で撃た

ただけ

で消え

る夢

大臣を

夢見て

大志の

文字が

ない

空涙

相手は

先を読

んでいた

柳太

阿武

利武

和子

修六

吸江

鐘造

目をと

夢に出

■各地句会だより

とっとり川柳会

武田 帆 雀

とっとり川柳会は、春と秋吟行会をメインに、近隣柳会の人たちを招き、名所旧跡を訪ねている。昨年の春は後醍醐天皇ゆかりの地船上山へ、赤碕川柳会のご後援も頂いて登山した。残雪点々と残る一向平キャンプ場を借りて手作りの焼肉パーティーを行い、飲んで唄ってゲームして行く春を惜しんだ。そして秋、

何の因果で貝殻漕ぎ習うた

有名な民謡貝殻節発祥の地賀露港が秋の吟行地となった。鳥取駅からタクシーで十五分意外と近い所にある。天気予報も午後から雨もなんのその、青空が見え隠れするますますの日和。最初に築港された新生鳥取の顔鳥取港へ立ち寄った。外国船が入りする一万トン岸壁。この日も韓国船が停泊して砂が降ろされていた。また、広い岸壁の一角には、丈余の中国産の粗石が積み重ねてある。名産二

十世紀梨もこの港から海を渡るののである。そして太公望の絶好の釣り場となり、埠頭は天狗たちで満員。また、市民の憩いの場としても親しまれている所である。そして何より賀露の最大の目玉は、松葉蟹である。全国の店頭に並ぶ松葉蟹の五割は、この港から揚げたもの。とれたての蟹、這って逃げそうな蟹、海のタイヤを求めて観光ツアーがバスを連ねてやって来る由縁でもある。

鳥取港を後にし、本日のメイン会場沙見亭



へと着いた。日本海をバックに絵勢二十六名が記念写真に納まる。二階へ上がると、窓からは絶景の鳥ヶ島が絵に描いたように浮んでいる。さっきまでのわいわいがやがやも俄かに静まり、囁み吟の作句に余念がない。どの顔も腕を組んで天を仰ぎ、真剣である。披露は一杯やりながらと言う合意で各人投句を済ませ、準備された階下の大広間へと移った。いきなり目に付いたのが二尺に余る鯛の生き造り。本日の幹事長なかなかやるな！と思いつくや当館ご主人の歓迎の差し入れ。一同拍手をもって感謝感激。卓上には食べ切れぬほどのご馳走が所狭しと並んでいる。

会長謝辞に続き、石花菜さんの乾杯で宴が始まった。ほどよく渴いたのに冷たいビールが旨い。披露も飲みや食べやのムードの中、ユーモアのオンパレードに拍手喝采に沸いた。時は無情に過ぎ、秋の陽は暮れやすく、またの日の再会を約して手を握って散会した。

当日の囁み吟の中からいくつか拾ってみた。

賀露の町蟹の香に似た風が吹く 益子
魚釣る阿呆に見てる馬鹿もいる 静生
元唄の貝殻節を囃す浜 石花菜
賀露港よ他人の顔をするでない 一瑤
輸入した砂に砂丘が嫉妬する 忠良
日本海今日は柁目の波になる 登美枝

柳界展望

味です

★第17回川柳塔鹿野みか月
川柳大会は11月17日、山紫
苑で開かれた。本社同人の
総合成績は次のとおり。

第2位（町教育長賞）新
家元司▽第3位（町議会議
長賞）小池しげお▽第6位
原章峰▽第7位〓八木千代
なお、じげ起し賞を乾隆
風・小島蘭幸・両川洋々の
3氏が受賞した。

★第38回和歌山市文芸まつ
りの表彰式が11月17日、市
庁舎大集会室で開かれ、次
の各氏が受賞した。

〈市議会議長賞〉
不条理を倒すドミノの駒
になる 佐藤美知子

〈毎日新聞社賞〉
追憶の胸にひろがる遠い
野火 山田 高夫

また、文化協会賞には、
宮口克子・田中みね・森口
美羽・山口三千子・川上富
湖・納谷つや子氏らが入賞

した。

★第36回和歌山城観月句会
入選句は次のとおり。

〈読売新聞社賞〉
明日へと命をつなぐ水の
音 田中 みね

〈市観光協会会長賞〉
音程がはずれた母のぬく
いうた 森口 美羽

また、奨励賞に小山太一
吉村さち子・尾田綾子氏ら
が受賞した。

★第38回豊中市民川柳大会
は134名が参加して11月
23日、同市立中央公民館で
開かれ、同人の西出楓葉さ
んが秀句賞を獲得した。

涙みな涸れると活路見え
てくる

★第32回川柳塔きやらぼく
忘年句会は12月1日、米子
市てんま屋ホールで開かれ
たが、本社同人の特選は次
のとおり。

亀の子を放しに行つてか
えらない 原 章峰

新 同 人 紹 介

清 水 潮 華

古 久 保 和 子

黒 崎 恭 子

栗 田 久 子

北 村 正 安

藤 原 桂 子

新 同 人 紹 介

清 水 潮 華

古 久 保 和 子

黒 崎 恭 子

栗 田 久 子

北 村 正 安

藤 原 桂 子

新 同 人 紹 介

清 水 潮 華

古 久 保 和 子

ブライバシーの足もとが
掃いてある 原 章峰
蛸壺の中で遊んでいた時
間 林 荒介

寝てみよう痛みも眠るか
も知れぬ 政岡日枝子

▽出 版△

■二宗吟平川柳句集『満九
十二歳』(B6判・216
頁)昭和4年以来、営々と
して作句を続け、後進の指
導にあたり、満92歳を迎え
た二宗吟平氏の一千句を取
録した記念碑的句集。
勝つ事でなくても勝った
旗で泣き

▼計 報▲

■川崎秋女さん(同人・鳥
取県・本名静代) 11月18日
病気のため死去、79歳。

■久家代仕男氏(本社参与
平田市・いずも川柳会会長
本名義雄) 11月30日、病氣
のため死去、76歳。

▽訂 正△

■12月号P106下段10

行目「計光」↓「町紅」▽
P110下段20行目「計光」
↓「町紅」

▽お断り△

■11月号P38(川柳塔)
上段17行目「夕立は大阪城
を丸洗い」の句、及び12月
号P53(秀句鑑賞)中段
20行、26行を、本人の申し
出により削除します。

■12月号第2回川柳塔ま
つりの同人総会に関する記
事中、西原艶子さんが総会
出席者から脱落してしまし
た。この出席者名は、会場



受付で記名して頂いた名簿
に拠ったもので、記名しな
かった出席者は氏名を把握
できなかったため、掲載し
ていません。受付の不備を
お詫びしますとともに、ご
諒承をお願いします。

川柳塔碑へ物

故者合祀法要

高野山大霊園内の川柳塔
碑への本年度物故者合祀法
要は11月14日午後零時半か
ら高井大霊園長の読経で厳
修された。

今回の新合祀者は、松高
秀峰・増田竹馬・片上英一
若宮武雄・飯田悦郎・猪子
れい・桑原喜風・三宅一郎
江原とみお・三輪通彦・上
杉信秋・西口忠雄・榎谷寿
馬・直原七面山の14氏で、
このうち6家族10名の遺族

前 田 昭 子
— 薫風・直次推薦

太 田 とし子
— 薫風・紫香・柳宏子・小路推薦

酒 井 勇 太 朗
— 薫風・紫香・柳宏子・小路推薦

坂 上 高 栄
— 薫風・紫香・柳宏子・小路推薦

森 茜
— 薫風・紫香・鬼遊・智子・千秀推薦

が法要に参列された。

このほか、松永会美さん
はじめ遺族有志に本社から
馬・直原七面山の14氏で、
橘高薫風主幹ら10名、和歌
山・岸和田からも同行し、
法要後、奥の院に参拝する
者もあり、秋晴れの日を
有意義にすごした。



川崎秋女さんを偲ぶ

野中御前

十一月十八日の夜八時ごろでした。夕食後、テレビを見ていましたら電話のベル、受話器をとると聞きなれない声で一瞬誰かな？と思

いました。「赤崎の川崎ですけど、おばあちゃんに死にました」「エッ！」と言ったまま足が震えて後の言葉が出て来ませんでした。

電話をして下さったのは秋女さんのお孫さんでした。秋女さんとは数日前にも電話で話をしたばかりでしたので本当に驚きました。

今、この追悼文を書きながらも、涙が出て仕方ありません。秋女さんのことや秋女さんと話をしたことなどが、走馬灯のように頭の中を駆け巡って、悲しくて悲しくて泣きながら書いています。

私が初めて秋女さんにお会いしたのは二十五年前のことです。倉吉からバスに乗って赤崎の公民館で開かれていた川柳の会に出席した時でした。それ以来、毎月のように赤崎例会に出席させていただきました。ま

た、秋女さんも倉吉川柳会に来て下さり、だんだん親しくなると、本当の姉妹のように仲良くしていただきました。

秋女さんも私も、幼いころに両親に死に別れ、祖父母に育てられたという境遇が似ていましたので、特に親しくなったのだと思います。私が店を持った時の記念句会にもかけつけて下さいまして、秋女さんの句が天位になって大よろこびされた顔を昨日のことのように思い出します。その時の句は

午前五時 生きねばならぬ顔洗う
という句でした。このように秋女さんはご自分の身の回りのことを丁寧に、とても上手に川柳にされました。この他にも

せかせかと生きねばならぬ手内職
いざとなりや何でも食って生きてやる
うとうとと亡夫の夢見る昼下がり
ふところが温うって笑いたくなつた
みんな留守柱時計の音と居る

正座する仏間へ亡父が亡母が来る
若葉食む虫も言い分あるだらう
やがて散る花だたつぷり水をやる
拾ってきた猫と余生を楽しもう

など、生活の実感にあふれたとてもいい句を沢山残されています。句会や大会などで秋女さんの句に共感しては、私もがんばらなくてはと刺激を受けたものです。

秋女さんは花作り、野菜作り、そして漬物を作るのが大好きで、立派な花や野菜、おいしい漬物をたくさん作ってダンボールにつめて送って下さいました。今も、私の家の物置には秋女さんが丹精こめて作られた玉葱がぶら下がっていますし、じゃが芋もあります。冷蔵庫の中には奈良漬が入っています。

本当にお世話になってばかりで、先日私も体が調子を崩して弱気の電話をしました。死なれんよ。私よりあなたが先に死んだら葬式には行かんよ」と励まして下さいました。

生者必滅 会者定離とは言いますが、本当に悲しい悲しいお別れでした。十一月二十日のお葬式は、前日まで降り続いた冷たい雨もきれいに上がり、不思議なほどポツカリと暖かい秋晴れで、海が見える高台の庭には、秋女さんが大切に育てた花々が静かに咲いていました。

新年おめでとうございます

記念川柳大会へのご参加をお待ち申し上げます

大 原 川 柳 社

川柳大原四〇〇号

発刊記念川柳大会

とき 4月6日(日) 午前9時

ところ 大原町総合センター

お話 大森風来子氏(川柳岡山社)

兼題と選者(各題2句)

「駅」 大森風来子・河内 天笑

「原」 土居 哲秋・山口 流木

「芽」 林 荒介・土橋 螢

「続」 森田 熊生・神原日出夫

事前投句 「うれしい」 小林 妻子謝選

会費 2000円(発表誌・昼食等)

◎昼食・宿泊準備のため、宿泊者はハ

ガキで1月31日までに事前投句を左

記へ出句してください

〒707-04 岡山県英田郡大原町下庄町

小林 妻子

*欠席投句およびご芳志は拝辞します

主催 大原川柳社
後援 大原町文化協会

あけましておめでとうございます

川 柳 大 阪

会 員 一 同

謹 賀 新 年

大阪川柳人クラブ

会 長 磯野いさむ 幹事長 西田柳宏子

金 金 片 梶 海 乙 岡 大 尾 小 榎 植 上 上 上 稲 板 磯 井 安 秋 阿
内 井 岡 川 堀 倉 崎 坂 谷 野 本 松 原 田 田 葉 尾 野 村 藤 山 萬
寿 文 湖 雄 醉 武 麻 形 清 楠 信 美 柳 冬 岳 い 俊 寿 晃 萬
子 秋 風 次 月 史 子 水 風 眩 治 代 子 逸 影 仁 葉 人 む 二 美 子 朗 的

田 田 清 柴 塩 坂 阪 酒 里 佐 佐 後 小 小 小 小 橘 吉 北 川 河 河
中 頭 水 田 谷 本 上 井 藤 伯 藤 西 西 出 池 高 川 島 内 内
正 良 斗 繭 幸 晴 秀 瀧 小 誠 英 正 安 幹 智 し 薫 寿 勝 諷 天 月
坊 子 升 女 子 美 子 小 路 一 夫 一 夫 齊 子 げ お 風 美 美 美 児 笑 子

藤 深 比 半 濱 早 波 西 西 西 中 中 中 友 都 塚 津 竹 武 高 高 田
岡 日 嘉 井 田 野 部 出 田 川 山 野 尾 飛 茶 謙 倉 本 田 森 一 雀 紅 美 博 新
花 白 は 甘 良 白 楓 柳 景 お 恵 飛 茶 謙 倉 本 田 森 一 雀 紅 美 博 新
梢 光 る 平 知 賢 洋 樂 宏 子 子 空 鳥 子 三 子 江 舍 子 子 子 泉 一

和 米 吉 吉 吉 山 山 山 藪 楊 森 森 森 宮 松 牧 前 堀 藤 藤
田 澤 田 岡 岡 本 本 本 内 井 中 下 前 本 浦 田 江 村 村
維 俊 大 晋 美 翠 三 久 千 恵 愛 イ 秀 章 完 咲 と し 女 成
久 夫 輔 吾 房 公 郎 美 子 代 子 美 子 論 子 子 次 二 を 女 成

(五十音順)

明けましておめでとうございます
 ことしもよろしくお願い致します

米子 川柳塔きゃらぼく

小	木	木	神	川	門	鹿	大	岩	猪	石	池	足	青	石
村	村	村	崎	上	脇	島	塚	崎	森	中	尾	立	戸	垣
て	春	富	あい	より	晶		恵		すみ	時	保	由	田	花
い	枝	美	こ	子	子	蘭	子	遊	え	子	子	美	鶴	子

服	野	中	中	富	寺	田	鷺	菅	白	塩	澤	坂	さ	雑
部	坂	野	井	永	沢	中	見	井	根	谷	田	口	え	賀
朗	な	弘	ゆ	の	み	亜	正	と	ふ	八	千	一	や	美
子	み	子	き	り	ど	弥	子	も	み	重	春	江	え	世

八	矢	茂	三	光	政	吉	福	広	原	林	林	林
木	野	理	好	井	岡	岡	代	江	田			
千	満	高	寿	玲	日	文	天	富	紫	風	瑞	荒
代	子	代	々	子	枝	葉	雀	枝	布	子	枝	介

献 寿 平成九年

あけましておめでとうございます

川柳塔鹿野みか月

第17回（満16周年）記念大会のご支援ありがとうございました。
お陰様で盛会になりました。会員一同こころより御礼を申し上げます。
ことし第18回大会は、11月16日（日）開催の予定になります。
ご支援くださいますよう伏して偏に、よろしく願い申し上げます。

山根茂	土橋はるお	大角正道	徳岡本丸	中 計 中原みさ子	副会長 中原 諷人	会 長 森山盛桜	相談役 土橋 螢	顧問 小倉利男
-----	-------	------	------	--------------	--------------	-------------	-------------	------------

西川和子	中原汲香	土橋睦子	津村八重子	田村きみ子	黒田くに子	太田幸枝	大角幸代	岩崎みさ江	乾 隆風	乾 喜与志	石尾かつ乃
------	------	------	-------	-------	-------	------	------	-------	------	-------	-------

ほか会員一同	森 明美	中澤正恵	谷口百合子	吉田孔美子	山岡久枝	安井博子	徳田圭子	田中きみゑ	竹森富久江	国森武子	加藤公子
--------	------	------	-------	-------	------	------	------	-------	-------	------	------

☆事務局 〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279 中原諷人方
電話（0857）84-2100

謹 賀 新 年

平成9年 元 旦

〒794 今治市蒼社町1-5-51	越 智 青 園	☎0898-22-1189
〒793 西条市喜多川70-1	片 上 明 水	☎0897-56-2244
〒799-15 今治市唐子台西2-9-8	塩 路 よしみ	☎0898-48-1843
〒790 松山市古川北4-16-23	白 石 春 嶺	☎089-956-1690
〒790 松山市保免上1丁目5-6	竹 田 さやか	☎089-933-5180
〒790 松山市北土居町552-8	丹 下 美津子	☎089-957-0276
〒799-15 今治市桜井1-11-18	月 原 宵 明	☎0898-48-0088
〒794 今治市常盤町1-3-2	中 村 好 恵	☎0898-22-1913
〒799-15 今治市桜井1-10-6	野 村 京 子	☎0898-48-0094
〒799-15 今治市桜井1-10-47	野 村 清 美	☎0898-48-2287
〒790 松山市余戸中2-5-4	宮 尾 みのり	☎089-973-6073
〒794 今治市郷本町1-5-43	村 上 久美子	☎0898-32-9143
〒794 今治市南宝来町1-9-43	矢 野 佳 雲	☎0898-23-4537
〒799-22 愛媛県越智郡大西町別府630	安 野 案山子	☎0898-53-2829
〒794 今治市八丁東3-4-6	渡 邊 伊津志	☎0898-31-4179
〒799-15 今治市桜井団地1-27-10	渡 辺 南 奉	☎0898-48-0466
〒794 今治市北宝来町3-3-26	和 田 宏	☎0898-31-2853

いずも川柳会

事務局 〒693 出雲市大津町大曲2097

TEL 0853-22-2179

頌 春

平成9年 元旦

川 柳 塔 唐 津 支 部

久保正剣	林公二朗	相葉あき	宗弘	松本圭	市丸晴翠	山門夕ミ	山門幸夫	岩崎久仁於	浜本久仁於	山口高明	仁部四郎	田口虹汀
------	------	------	----	-----	------	------	------	-------	-------	------	------	------

あけましておめでとうございます

ペン皿の会

会員 一同

謹 賀 新 年

高槻川柳サークル卯の花 一 同

本年もよろしくご支援のほど願ひ上げます

謹んで新年の

お慶びを申しあげます

とっとり川柳会

宮	前	橋	春	谷	武	武	坂	石	岩	池	岩
木	田	本	木	口	田	田	田	上	原	本	田
一	一	多	圭	侑	粗	帆	和	悦	喬	山	輪
夫	枝	哥	一	里	粒	雀	歌	子	水	人	多
		由	郎				子				朗

南大阪川柳会

会 員 一 同

新年おめでとう

ございます

京都塔の会

松川 都倉 松川 渡辺 高山 山田 本庄
杜 求 芳 圭 友 栄 子
的 芽 子 坊 熙 子 子

あけましておめでとうございます

ほたる川柳同好会

橘高 井上 湯浅 月原 稲葉 一瀬 池田 上田 江口 岡本 嵯峨根 酒井 滝北 玉置 中田 古川 松本
薫風 直次 馬洗 方郎 眞一郎 福守 善秋 明光 太郎 保子 小史 英子 純次 喜美子 本だし
ほか会員一同

定例会句会・毎月第2火曜日午後・豊中市蛍池公民館

新年おめでとうございます

東大阪川柳同好会

会長 片岡湖風 副会長 吉川晋吾

句会部 澤村猪太郎 会計 森下愛論

あけましておめでとうございます

本年もよろしくお願い申し上げます

川柳若葉の会

吉田あずき	山内香住	宮崎シマ子	宮崎弘直	宮本欣史子	古川喜美子	中島実子	椎江清芳	黒田能子	大福留吉	指宿千枝子	橘高薫風
-------	------	-------	------	-------	-------	------	------	------	------	-------	------

もくせい川柳会

三宅つえ子	満仲きく子	松本ただし	梶本路児	星野登代子	春城武庫坊	辻川慶子	玉置英子	田中正坊	田中薫	滝北博史	栗原富子	岸田知香子	木村一笛	北山悟郎	岡本吉太郎	江口明光	安藤寿美子	黒川紫香	橘高薫風
-------	-------	-------	------	-------	-------	------	------	------	-----	------	------	-------	------	------	-------	------	-------	------	------

定例句会 毎月第3月曜日 豊中市立中央公民館

あけましておめでとうございます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-01 和歌山市西ノ庄239-23

桜井千秀

あけましておめでとう

ございます

岸和田川柳会

福浦勝晴

岩佐ダン吉

島崎富志子

原さよ子

古野ひで

田中文時

寺田甚一

林春恵

内田一弥

村垣鹿太郎

井齋一齋

柿花昭二

長谷川呂万

藪野ケイ子

高須賀金太

芳地狸村

あけまして

おめでとうございます

川柳クラブ

わたの花

高杉鬼遊

大内朝子

川崎友甫

村上剛治

服部春子

村上ミツ子

平川幸枝

神原まさと

松葉君江

中島春江

小沢泰成

西村幸子

宮崎シマ子

奥田けいこ

田中トシエ

山本宏

二瓶道子

八倉知佐子

粂山隆盛

乾美代子

生嶋ますみ

花柳吉五進

吉村一風

篠原いつふみ

山下美津留

井尻民子

内田龍

砂田八寿子

高橋明子

あけましておめでとうございます

西宮ローズ川柳会

おめでとうございます

本年もどうぞよろしく

富	笠	奥	松	竹	藤	川	小	松	辻	阿	黒	正
山	嶋	山	川	内	村	島	池	川		萬	川	本
ルイ子	恵美子	美智子	芳子	花代子	メ女	諷云児	しげお	杜的	白溪子	萬的	紫香	水客

新年おめでとうございます

庄司利治	河原恵美子	小田川智重子	森山英子	北川民子	藤原鈴江	松本はるみ	谷岡芳枝	石田清泉	小砂白汀
松浦洞然	石田一字	渡部菜々	渡部ふじ子	武島ちよえ	渡部好栄	菅田かつ子	松本聖子	福岡博利	細木歳栄

島根県大原郡木次町四六一

わかあゆ川柳会

謹 賀 新 年

うみなり川柳会

会 員 一 同

鳥取市相生町 3 丁目 204

電話 (0857) 23-4672

新春のお慶びを申し上げます

平成九年 元旦

川柳塔おおとり 会員一同

会 長 小 林 由 多 香

(鳥取市相生町 1 丁目 110)

あけまして

おめでとうございます

はびきの市民川柳会

安芸田 泰子

芦田 絢子

内田 さとみ

川田 晋

徳山 みつこ

西村 りつこ

三好 専平

森田 四三郎

山本 たけし

吉原 辰子

榎本 吐来

酒井 一壺

清満 利敏

季刊

川柳展望

天根夢草編集

作品出句十句

(天根夢草選)

年間誌代

4,960円(〒共)

川柳展望社

〒563-01 大阪府豊能町ときわ台3-4-17

電話 0727-38-1845

FAX 0727-38-6770

郵便振替 01150-2-49710

賀正

熊本川柳会

岩大字永北高鶴有
切川野田川野田働
康幸照俊一宵謹芳
子子代子進草爾仙

あけましておめでとうございます

川柳ささやま社一同

代表 遠山可住

あけましておめでとうございます

サークル 檸檬

あけましておめでとうございます

八尾市民川柳会

会員一同

あけましておめでとうございます

児 他 一 同	高 島 与 呂 志	福 田 治 子	武 部 悦 子	楠 敦 子	赤 昭 子	高 和 三 郎	川 端 六 点	大 槻 一 屯	福 元 み の る	中 島 志 洋	高 田 美 代 子	吉 岡 美 房	笠 原 吸 江
------------------	-----------------------	------------------	------------------	-------------	-------------	------------------	------------------	------------------	-----------------------	------------------	-----------------------	------------------	------------------

川柳藤井寺

明けましておめでとうございます

川柳塔わかやま吟社

同人										顧問	主幹
川上富湖	川上大輪	柿花紀美女	尾田綾子	小倉アサ	大野武太	内芝登志代	岩倉天彦	伊賀政一	野村太茂津	牛尾緑良	
富上光代	天満三千代	寺田裕美	千原淳太郎	垂井千寿子	玉井豊太	谷口信子	田中輝子	杉山精子	塩谷佐代子	坂部紀久子	桑原道夫
				横垣忠翁	森三枝子	宮口克子	松原寿子	堀端三男	細川稚代	福本英子	福田和子
										中島正博	中後清史
											中井榮美子

ほか
会員一同

例会 毎月第2日曜日 近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先

〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良

TEL 0734-46-2855

竹原川柳会

〒725 広島県竹原市本町1丁目14-3

小 島 蘭 幸 方

あけましておめでとうございます

創立40周年記念川柳大会へのご支援、ありがとう

ございました。今後ともよろしくお願い致します。

会 監 会

計 査 長

山 古 古 岩 藤 古 石 岡 森 岩 時 小

内 田 田 本 解 谷 原 本 井 本 広 島

ほ 房 比 太 文 静 節 淑 清 菁 笑 一 蘭
か 子 呂
同 子 子 虚 晴 風 夫 子 水 居 子 路 幸

あけましておめでとうございます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西5分)

事務局および投句先

〒662 西宮市両度町2-19-515 山本 義子

久	木	菊	亀	門	小	小	奥	奥	上	浅	秋	黒
保	村	池	岡	谷	倉	熊	山	田	田	野	元	川
まさ	貴	ト	哲	た		江	美	み	佳	房	て	紫
お	代	ミ	子	ず	藍	美	智	つ	秋	子	る	香

吉	山	山	牧	藤	春	春	林	西	小	黒
田	本	崎	渕	村	城	城		口	池	田
笑	義	君	富	✓	武	年	は	い	し	能
女	子	子	喜	女	庫	代	つ	わ	げ	子

1 月 各 地 句 会 案 内

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	10日(金)午後1時から 命・軽い・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
八尾市民 川 柳 会	10日(金)午後6時から 礼・嘘・野心・華やか	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 ま つ え	11日(土)午後1時から 牛・円満・活気	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
堺川柳会	12日(木)午後1時から 明るい・書く・笑う・軽い	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 わかやま	12日(日)午後1時から 運・夢・進む	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	13日(月)午後零時半から 琴・満足・包む・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川 柳 同 好 会	14日(火)午後1時から 元気・客・すっかり	豊中市立蜷池公民館 阪急宝塚線蜷池駅西へ150米 〒560 豊中市蜷池中町3-10-28 井上直次
高槻川柳 サークル 卯 の 花	16日(木) 正 午 か ら 喝采・こやか・抱く・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
南 大 坂 川 柳 会	17日(金)午後6時から 愛嬌・鮮やか・圧力・案外	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
岸 和 田 川 柳 会	18日(土)午後1時半から 夕刊・用意・落書・りんご	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	19日(日)午前11時から 真ん中・夢中・やる気	寝屋川市民会館 京阪寝屋川市駅東口からバス市民会館前下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	20日(月)午後1時から 林・縫う・鋭い・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
京 都 塔 の 会	23日(木)午後1時から 門・配る・明日	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下弁財天町 都倉求芽
富 柳 会	23日(木)午後1時から 牛・凍る・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池 森子
東大阪市 川 柳 同 好 会	25日(土)午後6時から スタート・飾る・起きる・無事	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 川 柳 会	26日(日)午後1時から 駄目・打つ・うっかり・ポーズ	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

☆あけましておめでとうございます。

編集長という大任は私には重すぎますので、固くお断りしましたが、スタッフそれぞれ事情があり、私が年長ということで、一応まとめ役をさせて頂くことになりました。でも、主婦の身では、時間的にも空間的にも、行動の範囲が限られてしまいます。できる限り一生懸命するつもりですが皆様のご理解、ご協力を心よりお願い申し上げます。☆編集に携わるまでの私は句を送りさえすれば、印刷屋さんが、このような一冊の同人誌に仕上げてくれると考えていたが、そんな簡単なものではなかった。☆送られた柳箋は、先ず、事務所で川柳塔・水煙抄・

渺湖抄・茴香の花・一路集初歩教室、その他に分類され、各選者に送られる。選者から返ってきた原稿は下読みをして、誤字脱字を正し、割付けをして印刷へ回す。その後、校正を二度繰返し、ようやく一冊の本になる。このように書くとは簡単に思えるが、月刊誌は限られた時間内に仕上げねばならないから厄介である。

☆新年早々、言わずもがなのことを書いてしまいました。みなさんに少しでも喜んでいただける誌面に見たいと思いますので、ご意見、ご感想をお寄せください。☆二十一世紀まで、あと三年、いろいろな面で新しいものが求められ、変わろうとしていきます。古いものも良さも認め、その上に新しさも加えてゆきたいものだと念じております。(み)

ひとこと

司会に寄せること

うまくやろうなんて所詮無理なこと。ミスだけ極力なくす心掛けで与えられたチャンスに背を向けず、急遽、本社11月旬会の司会に立った。三時間余、一瞬の油断も許されず、私なりの目くばり、氣くばり、と緊張の連続である。

情性になれて生きる日々に久しぶりの仕事と受け止め、トライする情熱と感情の起伏を味わった。

フアイトを燃やすエネルギークその活力の源ではないでしょうか。春夏秋冬、月に一度の本社旬会、皆さんのお顔が集う融和と研さんの場です。会場はいつも最高の熱気に盛り上がっています。すこしでも明るいムードづくりの進行を目標とします。

あくまでも脇役に徹し、正確なモットーに永くつづく司会をと念じています。

榎山 隆盛

○お正月の楽しみ用に、毎年暮れに本を買っておくことにしている。近所の小さい書店では心もとなないの、某日、ターミナルの比較的規模の大きい店へ出向いた。お目当ての本の名は、かねてから新聞広告や出版社のPR誌を切抜いて用意しておいた。

○通信販売時代のこの頃、日用雑貨から生鮮食品まで豪華なカタログで選べる。それらは電話一本で届くし、代金は後払いでよい。先か後で支払うだけの違いだが、

(ふ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

発表（3月号）

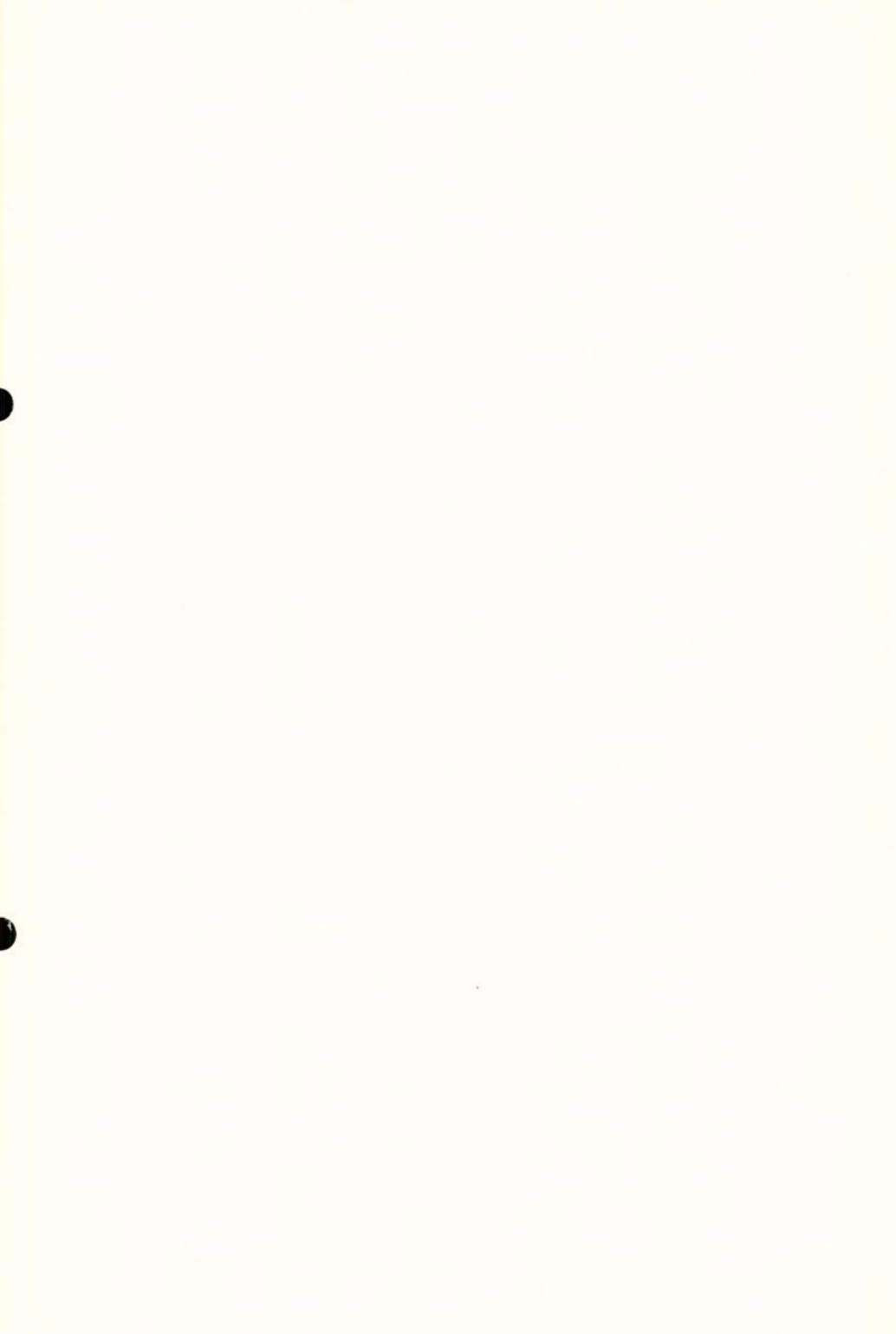
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

初歩教室 「歩く」(3句) 吐田公一担当	課題吟 (3句) 「人」 「占」 「菓」 「子」 「形」 「う」 「子」	荳香の花 (3句) 西出楓 選	渺湖抄 (3句) 八木千代 選	水煙抄 (8句) 高杉鬼遊 選	川柳塔 (8句) 橘高薫風 選
	池内かおり 選	亀岡哲子 選			
	吉岡きみえ 選				

3月号発表(1月15日締切)

本社1月句会

席題 1題 当日発表 会費 500円	兼題 「息子」 「甘い」 「時問」 「迎える」 「期待」	西口いわゑ 選	春城武庫坊 選	吉岡美房 選	河内天笑 選	橘高薫風 選
ところ とき 1月7日(火)午後5時半 メンズファッションセンター3F 中央区内本町1-1 電06・941・1918 地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角	★短冊交換会(1人3点以内)					

4月号
課題吟「魚」「出発」
「ようやく」
初歩教室「堅い」

本社2月句会 7日(金)予定

兼題 「ゆったり」「木」「猫」
「フルーツ」「やがて」

夜市川柳募集

第8回「本能」藤本静港子選
ハガキに3句 1月末締切
投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「プラン」河内天笑選
ハガキに3句 1月10日締切
投句先 〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表 1月25日(土)午前11時5分
からラジオ第1放送(予定)

「川柳塔」への投句について

- ①川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限ります。
- ②渺湖抄・荳香の花欄および一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限ります。ただし荳香の花欄は女性だけ。
- ③各欄への投句は、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。

〒545

定価 六百元(送料92円)

半年分 四千元(送料共)
一年分 七千九百元(同)

平成九年一月一日発行

編集兼 発行人 美橋高ト

印刷所 美研アト

大阪市阿倍野区三好町一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六六元一六九一四番

振替 〇〇九八〇一五一一三三六八番



【イメージ・キーワード】
“Value for Human”

バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7

(06) 941-9631

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530 大阪市北区浪花町9番4号

TEL・FAX(06)372-1178